



TITLE:

漢代の官衙と屬吏について

AUTHOR(S):

佐原, 康夫

CITATION:

佐原, 康夫. 漢代の官衙と屬吏について. 東方學報 1989, 61: 95-163

ISSUE DATE:

1989-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66696>

RIGHT:

漢代の官衙と屬吏について

佐 原 康 夫

はじめに	九五頁
第一章 和林格爾漢墓壁畫に見える官衙	九七頁
1 和林格爾漢墓壁畫の構成と配置	九七頁
2 官衙の空間構成	一〇〇頁
3 墓室構造と壁畫	一一〇頁
第二章 文獻に見える官衙	一一四頁
1 中央官廳	一一四頁
第三章 閣の内と外	一二七頁
2 地方官廳	一二〇頁
3 長官公邸としての官衙	一二四頁
1 屬吏制度と諸曹の形成	一二七頁
2 ふたつの「門下」	一二三頁
3 長官と屬吏のアラベスク	一三五頁
おわりに	一四〇頁

はじめに

漢代の官僚制は中國歴代の官制の原點である。三公九卿を頂點とする官僚機構のピラミッドと、その中を上っていく人材登用のシステムは、三國以後の様々な書物で絶えず振り返られ、記述されてきた。現代の歴史學においても、漢代の官僚制度に關する研究は依然重要なテーマである。現代の研究の方向は大きく二つに分けられる。一つは官僚制度の機構的側面の分析。この中には各官廳の職掌と機構の具體的な研究に加え、居延漢簡などを利用した文書行政の實態の研究も忘れてはならない。

いまひとつの方向は、官僚制度の中の人的側面である。郷舉里選に始まる人材の登用と官職叙任の仕組み、その中で形成される人間関係の現われとしての門生・故吏関係など、官僚制度を通じて漢代の國家と社會の性格を論じた業績は紹介しきれないほど發表されている。

しかし從來の研究は、漢代の役所が具體的にどのような場所であり、官僚たちはそこでどのように仕事をしていたのか、という素樸な疑問には十分答えていないように思われる。とりわけ漢代の官僚制度の顯著な特色として、官吏たちが法定の休暇以外には自宅にも歸れず、いわば役所に住み込んだ状態で仕事をしていたことがあげられる以上、官僚機構の容れ物である官衙はそれ自體調べてみる價值がある。官衙が官僚たちの仕事の間であるとともに生活の間でもあったことを重視すれば、官僚たちの公式・非公式の人間関係を官衙という場において分析しなおしてみることも可能だろう。けれど官僚機構の分析は、單なる職掌のピラミッドの構築に終わるのでもなければ、出世の階段を一段ずつ辿ってみることに終わるのでもない。官僚機構を動かす制度的、人間的メカニズムの總體の分析を目指すべきである。制度の理念を抽出するだけでなく、ある役所でさまざまな人間がそれぞれの職務を果たしている、その状態にいま一度立ち返ってこそ、十全な分析が可能になるのではないだろうか。

近年、壁畫などの畫像資料の紹介と研究が進んだ結果、漢代の官衙についての視覺的イメージは飛躍的に豊かになった。特に和林格爾漢墓の多數の壁畫は、漢代の官衙の實態を伝える貴重な資料である。本稿ではまず和林格爾漢墓の壁畫に見える漢代の官衙を分析し、文獻史料と突き合わせてその空間的特色を明らかにしたい。さらにそれを手掛かりに、文獻に記される多くのエピソードが主題として傳える長官と屬吏の關係に、別の方向から光をあててみたいと思う。まず漢代の畫像に描かれた官衙を見てみよう。

第一章 和林格爾漢墓壁畫に見える官衙

1 和林格爾漢墓壁畫の構成と配置

一九七一年秋、内蒙古自治区和林格爾縣の東南四〇キロの新店子で後漢代の大型磚室墓が発見された。墓室はほぼ東向き、前・中・後の三室と、前室の南北に附屬する二つの耳室、中室の南につながるもう一つの耳室からなっている。この墓は早い時期に盜掘を受けており、副葬品はほとんど残っていないが、壁面を覆う漆喰に墓主の官歴を描く色彩豊かな壁畫が残っていた。⁽²⁾ この壁畫と題記によって、墓主が孝廉に擧げられて郎官となり、西河郡長史、行上郡屬國都尉事（西河長史のまま事務代行）、魏郡繁陽縣令を経て護烏桓校尉となったことがわかった。また、壁畫に描かれた西河郡治が離石城とされていることから、墓の年代が二世紀後半にしばらくすることも判明したのである。⁽³⁾

和林格爾漢墓の最初の發掘報告は一九七四年に發表され、續いて圖版を中心にした『和林格爾漢墓壁畫』（文物出版社一九七八年、以下『圖版』と略稱）でカラー寫眞と模本が出版されている。この『圖版』は壁畫を題記によって場面に分け、その位置の順にならべたものだが、中にはひと續きの畫面を別の題で分割してしまったり、説明のみで圖版のないものもある。

圖1に示したのは和林格爾漢墓の墓室の平面圖に壁畫の位置を書き込んだ圖である。畫題は『圖版』の命名によるが、題記をそのまま畫題としたものと報告者が新たにつけた畫題とがあるので、題記を採った畫題には「」をつけて區別することにした。畫題に※を附したものは寫眞・模本を問わず圖版のないものである。以下圖1によって、壁畫全體の配置について若干の説明を加えておこう。

① 耳室およびその甬道

三つの耳室とその甬道には、農耕・牧畜といった生産活動と、廚房における生産物の消費が描かれる。⁽⁴⁾ これは耳室が墓主の死

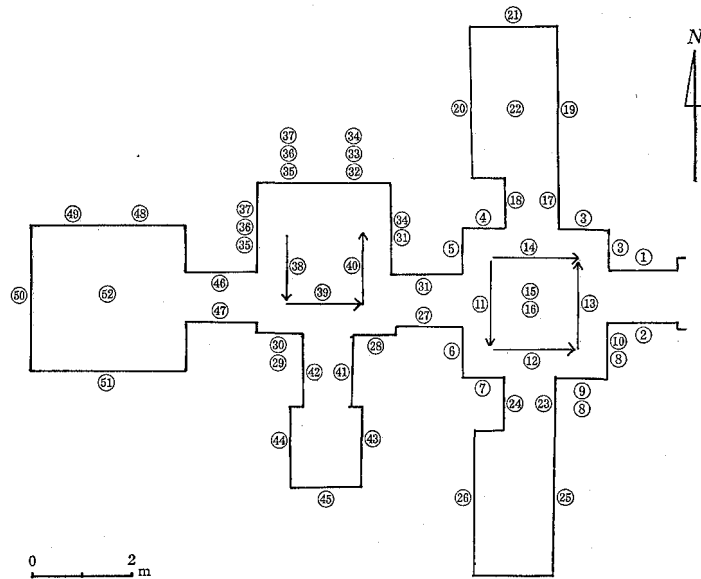


圖1 和林格爾漢墓壁畫の畫題と配置

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| ① 「莫府門」 | ②⑦ 「繁陽令被璽□時」 |
| ② 門衛 | ②⑧ 「繁陽縣令官寺」 |
| ③ 「莫府大郎」 | ②⑨ 「西河長史所治離石城府舍」 |
| ④ 拜謁・百戲 | ③⑩ 「行上郡屬國都尉時所治土軍城府舍」 |
| ⑤ 「護烏桓校尉莫府穀倉」 | ③⑪ 寧城圖 |
| ⑥ 「繁陽吏人馬皆食大倉」 | ③⑫ 樂舞百戲 |
| ⑦ 「上郡屬國都尉西河長史吏兵馬皆食大倉」 | ③⑬ 迎逐※ |
| ⑧ 「莫府東門」 | ③⑭ 饗舍※ |
| ⑨ 諸曹 | ③⑮ 廚炊・宴飲・祥瑞 |
| ⑩ 「兵弩庫」※ | ③⑯ 燕居 |
| ⑪ 「舉孝廉時、郎、西河長史」 | ③⑰ 歷史人物 |
| ⑫ 「行上郡屬國都尉時」 | ③⑱ 「渭水橋」 |
| ⑬ 「繁陽令」 | ③⑲ 輶車從騎 |
| ⑭ 「使持節護烏桓校尉」 | ③⑳ 「使君從繁陽遷度關時」 |
| ⑮ 「麒麟、兩師駕三□」※ | ④① 五奴僕 |
| ⑯ 「□人騎白象、鳳凰從九□、朱雀」 | ④② 果樹鴉雀 |
| ⑰ 廚炊 | ④③ 廚炊※ |
| ⑱ 「共官掾史」 | ④④ 廚炊・器皿※ |
| ⑲ 牧羊 | ④⑤ 禽舍※ |
| ⑳ 農耕 | ④⑥ 鼓吏※ |
| ㉑ 碓舂・穀倉 | ④⑦ 「宮中鼓吏」 |
| ㉒ 雲文・斗拱 | ④⑧ 武成城圖 |
| ㉓ 廚炊 | ④⑨ 「立官桂樹」 |
| ㉔ 觀漁 | ④⑩ 「臥帳」 |
| ㉕ 牧牛 | ④⑪ 莊園圖 |
| ㉖ 牧馬 | ④⑫ 四神圖※ |

→は車馬行列の向き。同一個所の上下に畫がある場合は數字の上下で位置關係を示す。

後の生活に必要な様々な副葬品を収めるためのスペースであることに關係するだろう。前室北側の耳室甬道に描かれた厨房には「共官掾史」と題された官吏がおり、この厨房が後述する寧城圖に見える護烏桓校尉府の「共官門」内の厨房にあたることは明らかである。

② 墓室下層

三つの墓室の床から大體一・六メートル前後までの壁面と、墓室をつなぐ甬道の兩側には墓主の日常生活が描かれている。このうち前室には護烏桓校尉府を中心に上郡屬國都尉府や繁陽縣寺の様子を描かれている。中室には墓主が歴任した官衙を表わした城郭の圖がある。北側には護烏桓校尉府が置かれた寧城圖があつて甬道からひと續きに描かれ、南東には繁陽縣城が大きく描かれて甬道の「繁陽令被璽□時」に接し、南西には土軍城（上郡屬國都尉府治）と離石城（西河郡治）が上下に描かれている。中室の残りの部分には迎迓圖（詳細不明）とサーカス、墓主と夫人を中心とした宴席が描かれ、その下には様々な祥瑞、上には孔子、老子を始め多數の孝子や英雄、高德の婦人を描き、墓主夫妻を取り巻くが如くである。さらにその下には厨房が描かれている。また、迎迓圖の上から寧城圖の上にかけて、報告者によって「鬘舍」と名附けられた畫があると思われる。⁽⁵⁾これは墓主の勉學に關係すると解釋されているのだが、圖版は未發表。中室から後室へ通ずる甬道の兩側は鼓吏と建鼓、侍婢が描かれ、後室に入ると壁面いっぱい、南に莊園圖、西に墓主夫妻の宴を描いた「臥帳」圖、北には武成城圖と「立官桂樹」圖がある。

③ 墓室上層の車馬行列

前室に四つ、中室に三つある出入口のアーチの上には、すべて墓主を中心とした車馬行列が描かれている。⁽⁶⁾前室の行列は西から南、東にぐるりと續き、「舉孝廉時」「郎」「西河長史」（西壁）、「行上郡屬國都尉時」（南壁）、「繁陽令」（東壁）、といった題記を伴う。北壁の行列は他の三つと向きが違うが、「使持節護烏桓校尉」の題記がある。どの行列も互いに交錯して描かれ、墓主の經歷が車馬行列で表わされていると見てよい。中室の車馬行列は、西壁に「渭水橋」の題記を持つ橋の上を行列が通る

ところ（墓主の經歷との関連は不明）、東壁は「使君從繁陽遷度關時」という題記があつて、墓主が護烏桓校尉として居庸關を越えて赴任する行列、南壁はこれに續く夫人の行列である。

④ 墓室天井頂部

前室と後室のドーム形の天井の最上部にも畫がある。前室天井には「麒麟」・「雨師駕三〇」（北面）、「人騎白象」「鳳凰從九〇」「朱爵」（南面）という題記を持つ吉祥が描かれる。このうち特に白象に人が乗る圖は、佛教的な畫題の早期の事例として注目されている。⁷⁾ 後室天井には青龍・朱雀・白虎・玄武の四神が描かれる。

つぎに、本稿の主題である官衙に關係する壁畫を具體的に見てみよう。

2 官衙の空間構成

和林格爾漢墓の壁畫で最も詳しく描かれている官衙は護烏桓校尉府である。⁸⁾ 中室の寧城圖がその全景、前室下層の北側全部と南東の角の壁畫はそれぞれ特徴的な建物を取り出して描いたものである。そこでまず中室の寧城圖から見ていこう。

① 寧城圖

寧城圖に見える建物についてはすでに羅哲文氏によって整理されている。寧城圖は前室から中室に至る甬道の北側と、それに接續して中室の東壁下層に描かれている。全體の構圖は護烏桓校尉府に烏桓族が伺候するところを俯瞰的に見たもので、甬道側には烏桓族が寧城にやってくる行列を描き、⁹⁾ 中室ではその行列が城門、護烏桓校尉府の門を通じて墓主の居る大きな堂の前まで續いている（圖2）。行列の先頭が堂の前まで來ているのに、後尾がまだ城門もくぐっていないというのはいかにも不自然である。この行列は烏桓族の移動經路を表わしていると考えの方がよからう。

寧城圖は四方を城郭で區切り、右が南である。右端まん中が寧城の南門、その上下端が東門・西門になる。南門を入ると高い雙闕をもつ「莫府南門」がある。これが護烏桓校尉府の正門だろう。この門をくぐると官吏が居並ぶ回廊狀の建物に圍まれた廣場に出る。¹⁰⁾ 門の廣場側には太鼓がある。南門を入れて左側は、別の回廊で仕切られた廚房で、その出入り口は「共官門」

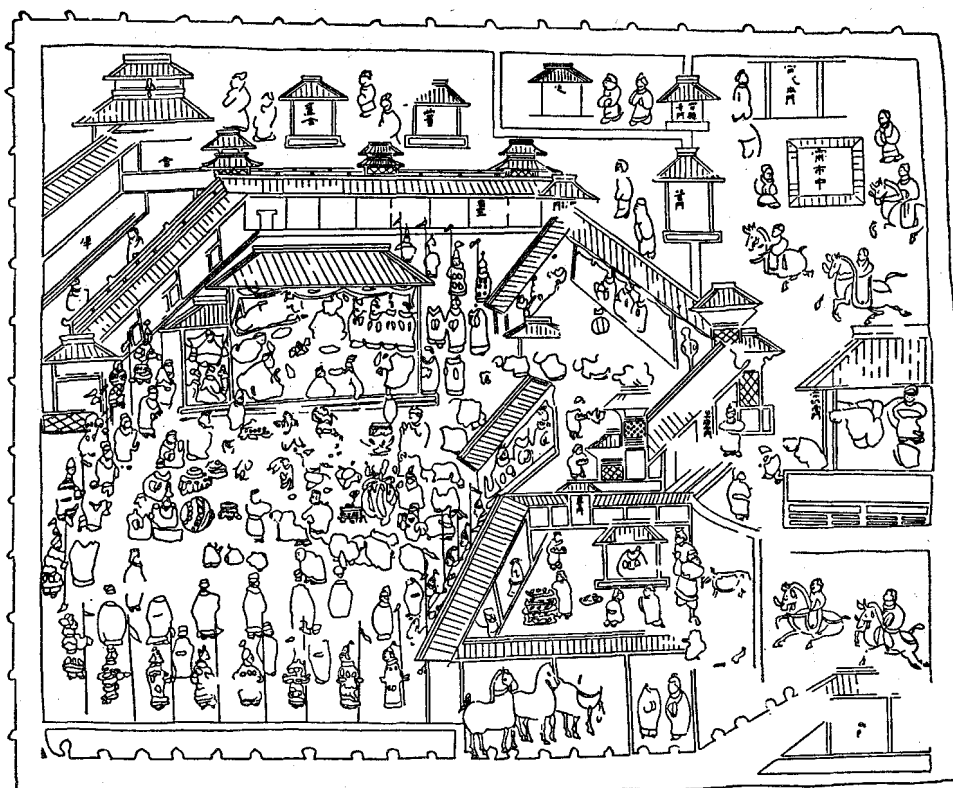


圖2 寧 城 圖

である。この厨房のまん中の建物に座っている官吏が前節で紹介した「共官掾史」かもしれない。さらに厨房の下に廄舎の區畫がある。

さて、南門を圍む回廊の奥には中門があり、烏桓族の行列が畏まって通って行く。ここを抜けると廣い廷を前にひときわ大きな堂が建っている。廷の周圍では甲冑を着けた兵士が物々しく警戒にあたり、その内側には官吏の列がある。堂の前では輕業の最中、堂上中央には赤衣の墓主が左右に官吏を従えて座っている。堂の左側には庇がのびて脇部屋が表わされ、ここにやはり赤い衣の人物が描かれるが、これは報告者によれば墓主の夫人である。烏桓族の行列は今しも堂の前に來たところである。常識的に見れば、南に正門がある以上、堂も南面していると考えられるから、どうやらこの堂と廷の部分だけは南北を上下にとってあるらしい。堂の後ろには長屋狀の建物が描かれてかぎ形に堂を圍む。上には望樓のようなものがついている。右奥の小室には「齊室」の題記がある。その右、南門から伸びる回廊との接

點に「東府門」があるが、この門が回廊側に通ずるのか、それとも「齊室」の方に直接通ずるのか、このままでは判らない。廷の左にはまた別の區畫があつて、高い樓のある建物が「倉」、平屋が「庫」である。これは廷の北になるのか西になるのか判らない。以上が護烏桓校尉府である。

護烏桓校尉府の上には、別の官衙があり、入り口の「營門」の奥に「營曹」、「司馬舍」がある。これはおそらく司馬の指揮する護烏桓校尉府下の軍營だろう。⁽¹¹⁾さらにその上の小さな區畫は寧縣の官衙である。「寧縣寺門」を出て、「寧城東門」の下には「寧市中」の區畫がある。⁽¹²⁾これらの官衙などは、護烏桓校尉府に比べて著しく小さく、ごく簡単にしか描かれていない。寧城圖は都市全體の圖というよりは護烏桓校尉府の圖であり、そのほかの部分は單に説明のため描き添えられたに過ぎないよう
に思われる。次に、寧城圖と對照しながら前室に描かれた官衙を見てみよう。

② 「莫府大郎」圖と拜謁・百戲圖

前室に通ずる墓道には門衛とともに「莫府門」が描かれる。これは、この墓全體の入り口が護烏桓校尉府の門と見なされることを示している。墓門を入れて前室の東壁の北側から北壁の東側の下層には、「莫府大郎」と題した官衙の畫が描かれている。北壁の甬道のアーチを挟んで西側には、報告者によって「拜謁・百戲」と名附けられた畫がある(圖3)。「莫府大郎」圖の東壁側は頭を剃り上げて辨髪を結った烏桓族が武裝した兵士の列の前を通つて行くところ。⁽¹³⁾おそらく墓道の「莫府門」を抜けてきたという見立てだろう。これにつながる北壁東側に描かれるのが「莫府大郎」と題される建物である。⁽¹⁴⁾畫面は上下三段に分けられ、上段と中段が建物、下段は右から續いてきた烏桓族の列である。中段の建物の右側は軒に赤い幕がつけられ、褐色の欄干も見える。その中には褐色に赤い縁の衣と黒い冠を着けた官吏が七人ほど見える。その左側は屋根が一段高くなった門であるらしく、烏桓族の行列が入って行く。その奥、畫面上段にはやや大きな建物が描かれている。軒には灰色の地に黒い點の模様の幕が掛かり、欄干は赤、兩端に黒衣の衛兵がいる。建物の中には、赤い縁の敷物がコの字形に敷かれ、灰色の地に黒の縁取りの衣、黒い冠の官吏が十人ほど座っている。手前左側で平伏している人物は赤の地に黒の縁取りの衣、黒の冠である。

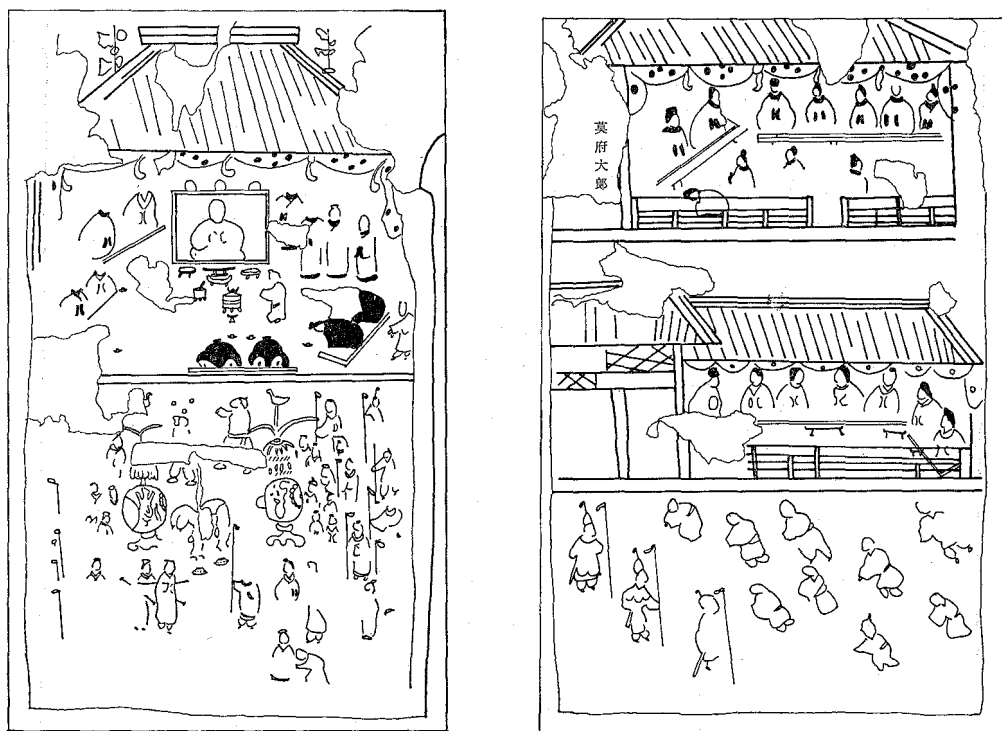
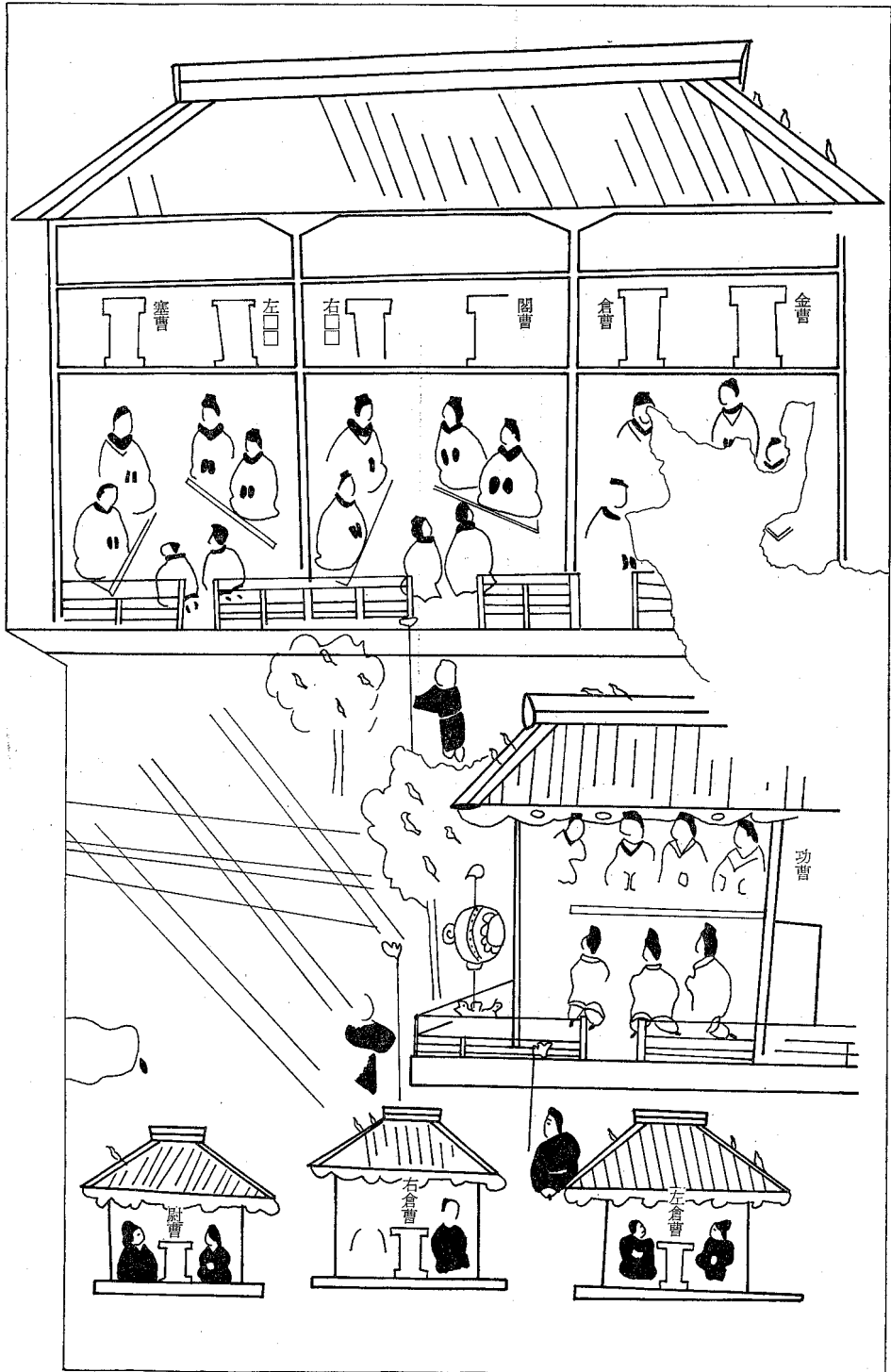


圖3 「莫府大郎」圖(右)と拜謁・百戲圖(左)

耳室甬道のアーチを挟んでこれと並ぶのが拜謁・百戲圖、大きな建物と廣場の情景である。廣場の周囲には兵士が並び、建物の前では輕業が行なわれている。廣場の下端右寄りには、官吏の前を畏まって歩く烏桓族が一人だけ見える。赤褐色の衣を着け、頭を剃りあげた様子は「莫府大郎」圖の烏桓族と同じ。上段の建物の屋根の上には赤いのぼりのような飾りが翻っている。軒には灰色の地に黒點模様の幕が掛かり、室内のまん中、黒い衝立の前に、墓主と思われる赤い衣を着た人物が大きく描かれる。その左側には赤い縁の敷物に赤衣と灰衣の人物が交互に座り、右側には四人の灰衣の人物が侍立している。墓主の前には酒宴の支度がしてあり、それを前にして四人の黒衣の人物が平伏している。報告者はこれにちなんで畫題をつけたのだろう。しかしこの畫は烏桓族の護烏桓校尉府への伺候を描いており、その點で「莫府大郎」圖とつながって解釋すべきである。すなわち、「莫府大郎」圖で中門をくぐった烏桓族が墓主の前にやってきたところを描いたのがこの圖なのである。これはまさに寧城圖と同じモチーフである。したがって、拜謁・百戲圖は寧



諸曹・兵弩庫

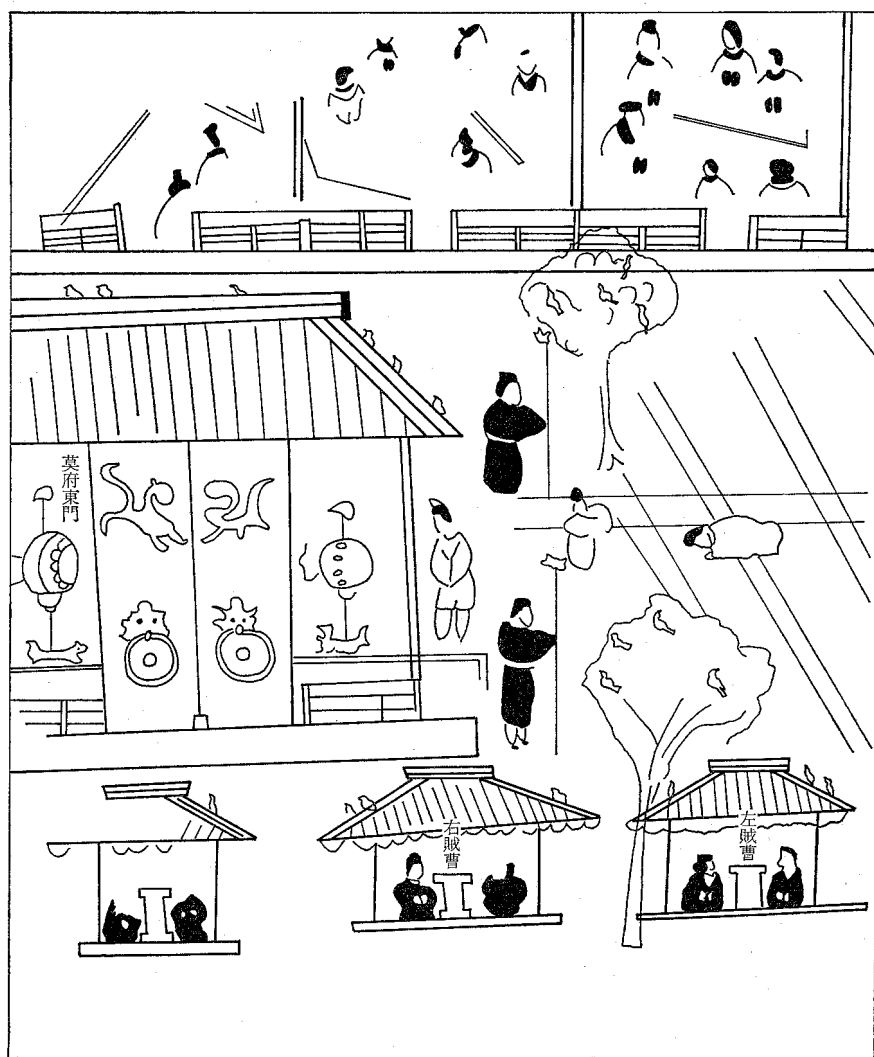


圖4 「莫府東門」と

城圖に見える護烏桓校尉府の堂と廷を擴大して描いた圖、「莫府大郎」圖は寧城圖の「莫府南門」から中門までを描いたものといえるのではないだろうか。そして、「莫府大郎」圖上段の建物は、幕や敷物、官吏の服裝が拜謁・百戲圖の堂と一致することから、これも護烏桓校尉府の堂だと見なすことができよう。この二つは、墓主が堂に出御する前と後とを描き分けたのだと考えたい。

③ 「莫府東門」圖

「莫府大郎」圖と拜謁・百戲圖の向かい、前室東壁の南側から南壁東側には、「莫府東門」と題された壁畫がある。『圖版』ではこれを、「莫府東門」と諸曹、「兵弩庫」（圖なし）の三つに分割しているが、本來ひと続きの畫として見なければならぬ。『圖版』のカラー寫眞を合成した模寫を圖4として掲げる。この畫は、門とそれをコの字形に圍む官衙の圖である。「莫府東門」と書かれた門には虎の畫がかかれた大きな門扉があり、環がついている。その兩側に建鼓も見える。⁽¹⁶⁾ 門前の廣場の四隅には樹木と黒衣の衛兵が立っており、建物を結ぶ通路が通っている。⁽¹⁷⁾ 右上には門より大きな建物があり、欄干の奥に十數人の官吏が三群に分かれて座っている。みな灰色に黒縁の衣、黒い冠である。軒と官吏の間には題記のついた「工」字形の出入り口があつて、右から「金曹」「倉曹」「閤曹」「右□□」「左□□」「塞曹」の六つを數える。この建物の左、「莫府東門」の上も、半分しか見えないがおそらく同じような建物だろう。このどこかに「兵弩庫」の題記があるはずである。門の正面には「功曹」と題された中型の建物があり、軒に赤い幕を掛け、欄干の内側に建鼓を立てている。中にいる官吏はみな褐色に赤い縁の衣、黒い冠である。畫面下段には小さな建物が六棟描かれ、軒の幕は赤（「功曹」と違つて模様はない）、それぞれ二人ずつ黒衣の官吏が座っている。やはり出入り口のところに題記があり、右から「左倉曹」「右倉曹」「尉曹」「左賊曹」「右賊曹」（左端は不明）となつている。

ここに描かれた官吏の服裝は「莫府大郎」圖、拜謁・百戲圖と共通する。「莫府東門」圖上段の灰色の衣の官吏たちは拜謁・百戲圖で堂上の墓主に待つており、中段の褐色の衣の官吏は「莫府大郎」圖中段にも見出せる。そして下段の黒衣の官吏は、

拜謁・百戲圖で墓主の前で平伏する人物と共通する。官吏の服装は、描かれる高さと同関係がありそうである。これはおそらく護烏桓校尉の屬官の中のヒエラルキーを表わしており、灰衣の官吏が上級職員、褐衣が中級、黒衣が下級の職員であることを示すと考えられる。⁽¹⁸⁾「莫府東門」圖ではこのヒエラルキーが建物の大きさにも反映している。すなわち官位の上・中・下が建物の大・中・小に對應する。この畫は、左右に見て行けば空間的配置を、上下に見れば官位の上下を表わす、という複合的な畫なのである。その結果、上段の「倉曹」の下役が下段の「左・右倉曹」に分かれていたり、さらに中段の「功曹」は諸曹の最上位に位置するはずであるにもかかわらず、中級職員しか描けないことにもなる。こう考えれば、下段に描かれた下役の小屋が、實際にこのように竝んでいたと考える必要はない。諸曹の建物は回廊狀につながっていたと考えてよいのではないだろうか。

さて、この畫を寧城圖と對照してみよう。「莫府東門」は寧城圖の「東府門」に比定できそうである。「東府門」周邊は寧城圖ではあいまいだったが、「莫府南門」から中門に至る回廊が東に伸びて「東府門」に通じており、ここが諸曹に分かれた長屋になっていたと解釋できそうである。そして「東府門」が諸曹から軍營に通ずる通用門だったと考えれば、「塞曹」や「兵弩庫」の題記も生きて来るのではないだろうか。

ところで、「莫府東門」圖は墓門を「東門」と見なしているのに對し、墓道の壁畫や「莫府大郎」圖は墓門を護烏桓校尉府の南門と見なしている。これはこの墓が東向きであることに關係するだろう。墓門は當然墓の正門なのだが、その方向からいえば東門でもあることになる。この墓門の性質が壁畫の構圖に反映していると考えれば、さほど不自然ではないように思う。

④ その他

前室の西壁には、穀物倉を描いた二點の壁畫がある(圖5)。向かって右側は「護烏桓校尉莫府穀倉」という題記をもち、二層の屋根の上層が換氣孔になっている。⁽¹⁹⁾これは寧城圖に描かれた「倉」と同じ描き方である。倉の前には穀物の山が二つ、その下には長い警棒をもった赤い衣の衛兵が大きく描かれている。左側は「繁陽吏人馬皆食大倉」と題される。上段には「繁



圖5 「護烏桓校尉莫府穀倉」(右)と「繁陽吏人馬皆食大倉」(左)

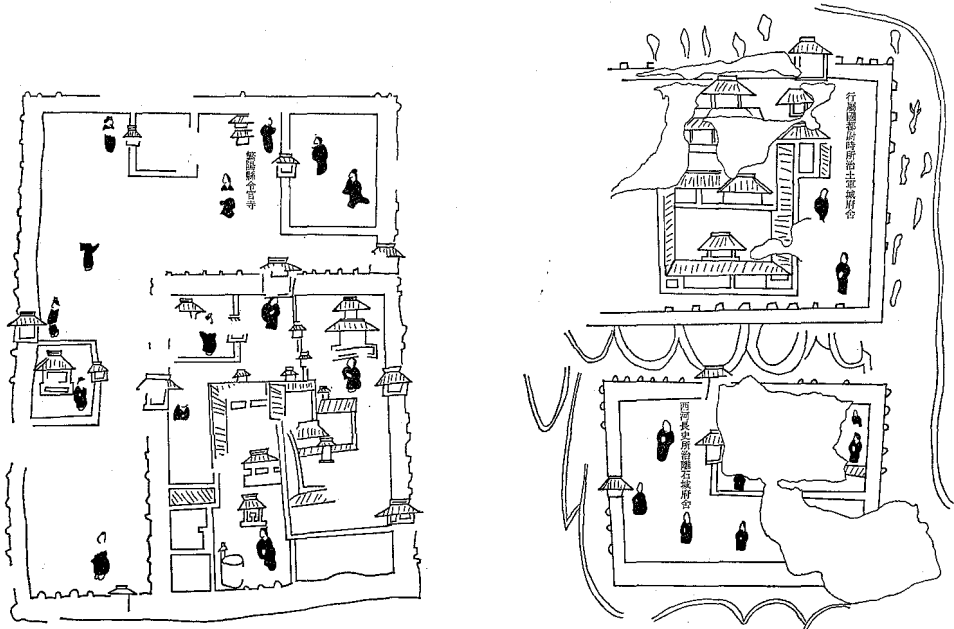


圖7 「繁陽縣令官寺」(左)と土軍城・離石城府舍(右)

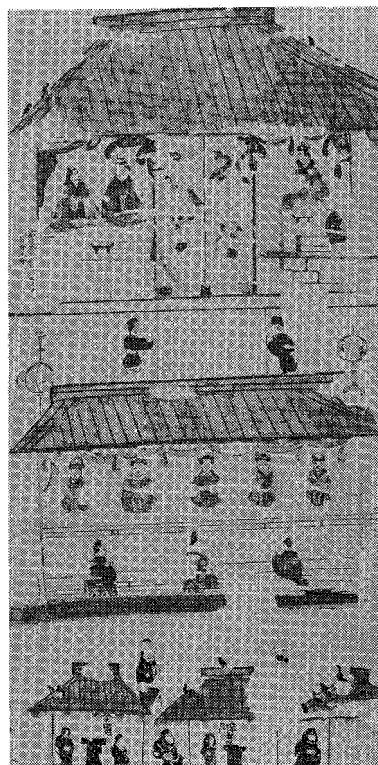


圖6 「上郡屬國都尉西河長
史吏兵馬皆食大倉」

陽縣倉」と書かれた右と同様の倉が描かれ、中段には穀物の山や黒衣の衛兵、荷車が見える。下段は「功曹」と書かれた建物で、描き方は「莫府東門」圖の下段と同様。これで繁陽縣の官衙を代表させたものか。この二點でことさらに大きく描かれた衛兵は、畫中の倉の警備と中室の警護を兼務しているのである。

その左、前室南壁西側の壁畫は「上郡屬國

都尉西河長史吏兵馬皆食大倉」と題されている(圖6)。構圖は大・中・小の建物が上下に並び、下の建物に「金曹」「辭曹」と書かれており、全體として「莫府東門」圖に似る。カラー圖版がないので色彩はわからないが、官吏の描き方も共通するように見える。ただし上段の建物には門扉が描かれている點が異なる。題記から知られる如く、この畫は上郡屬國都尉府と西河郡府という全く異なる役所を一つの畫面にまとめたものである。また、題記から倉が描かれてもよさそうところだが、周圍の護烏桓校尉府の畫の構圖にあわせて省かれたと考えられる⁽²⁰⁾。

繁陽縣、西河郡府、上郡屬國都尉府の官衙の俯瞰圖は、中室南壁に並んで描かれている(圖7)⁽²¹⁾。ともに寧城圖ほど丁寧に描き込んでないが、官衙の内部が回廊や塀で複雑に區切られていることは共通する。むしろ寧城圖の方が、主要な建物だけを取り出して描いており、それだけ單純化されているように感じられる。

以上の検討によって、前室の入り口から南北壁に描かれた一連の壁畫が、寧城圖の一部分とはっきりした對應關係にあることが明らかになった。そこから窺われる護烏桓校尉府の空間構成は、諸曹の官吏のいる區畫とその奥の堂・廷の區畫を中心とし、その周圍に倉庫など附屬施設の區畫が配置されていたと考えられる。しかしこれが護烏桓校尉府のすべてであると考え

のは早計であろう。ここで個々の壁畫を離れて、墓室構造と壁畫の關係を再検討してみよう。

3 墓室構造と壁畫

和林格爾漢墓壁畫を、描かれた墓室ごとに見直してみると、前室と中・後室では主人公に違いがあることに氣附く。前室壁畫の主人公は拜謁・百戲圖の堂上の墓主であるのに對し、中室の寧城圖を始め、車馬行列や宴席圖の主人公は墓主夫妻である。壁畫全體の中で墓主の夫人は中・後室にのみ現われるのである。この差は前室と中・後室の空間的意味の相違を反映しているに違いない。まず漢代の他の壁畫墓と比較してみよう。

和林格爾漢墓とならぶ漢代の壁畫墓に、河北省望都縣で發見された望都一號漢墓がある⁽²²⁾。やはり前・中・後の三室に耳室のつく、後漢代末期の大型磚室墓である。この前室には二十數人の官吏が描かれ、それぞれに題記があつて官吏の肩書きが知られる。墓室における題記の位置を圖8に掲げた。墓門内には「門亭長」と「寺門卒」が描かれ、和林格爾漢墓と同様に墓室を官衙に見立てていることがわかる。前室の奥には「門下功曹主簿」と「主記史主簿」がならんで座る。西壁には「門下功曹」以下「門下史」に至る門下の諸吏、耳室入り口をこえて「追鼓掾」「□□掾」がいる。「門下史」の下に「……皆食大倉」という題記があつて、和林格爾漢墓と同様な總タイトルである。東壁は「門下小史」と墓主の供回りである「辟車伍伯」、耳室の手前に「賊曹」と「仁恕掾」が描かれる。すべて後室に葬られた墓主を拜して立っている。前室壁畫の官吏たちは奥から官位の順にならび、これを「主簿」が統括しているが如くである。また耳室の入り口によって、墓主の側近である門下の諸吏と「賊曹」など諸曹の吏が區切られているようにも見える。和林格爾漢墓と同じく、前室は屬吏とそのヒエラルキーを描いているといつてよい。

しかし、中室に通ずる甬道に描かれた官吏は様相を異にする。甬道の奥には「侍閤」「小史」が前室の方を向いて立ち、手前側には奥に向かつて平伏する「勉□謝史」と拜禮する「白事史」が描かれる。この二者は肩書きではなく、それぞれ「勤務ぶりを譽められて感謝する史」⁽²³⁾、「事を白し上げる史」⁽²⁴⁾を意味する。「侍閤」「小史」は墓主への取り次ぎ役であろう。「侍閤」

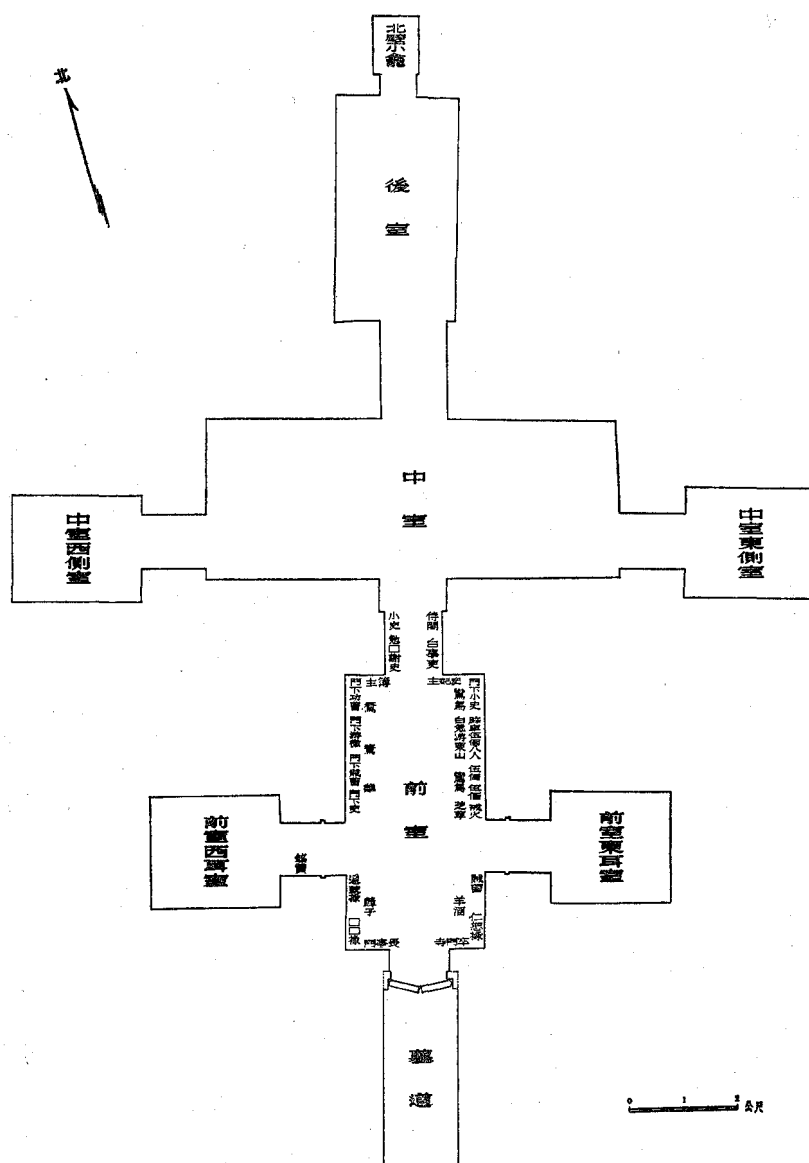


圖8 望都一號漢墓の平面と題記

が官名の示す如く「閤に侍する」吏であるとすれば、中室の入り口は「閤」という門と関係があることにもなる。

これを傍證するのが嘉峪關の有名な壁畫墓の三號墓（西晉代）である。⁽²⁵⁾この墓も前・中・後の三室からなり、前室には上下二層の壁龕がある。西側の壁龕には「炊内」と「臧内」、東側上層の壁龕には「各内」、下層には「牛馬廄」「車廡」の題記があった。壁龕は墓主の屋敷に見立てた墓室の、炊事場・倉庫・車庫・畜舎にあたる。⁽²⁶⁾そして中室入り口の横に設けられた門のミニチュアは「中合」と題されていた。これは勿論「中閤」の省略である。⁽²⁷⁾すなわち、官衙と私邸の差はあれ、ともに墓室を地上の建築と見なす望都一號漢墓と嘉峪關三號墓は、ともに中室入り口と「閤」を關連づけていることになる。中室入り口をそのまま「閤」と名付け得るかどうかはしばらく措くとしても、墓室構造において前室と中・後室を仕切る門が重要な意味を持っていることは明らかである。⁽²⁸⁾

これを手掛かりに再び和林格爾漢墓の壁畫を検討してみよう。和林格爾漢墓前室は、墓主の屬吏がそのヒエラルキーに従って役目を果たす公務の場である。對照的に、中・後室は墓主夫妻が徳高く暮らす私生活の場であり、両者の間にははっきりした違いがある。その境界が前室と中室の境である。具體的には、寧城圖に描かれた護烏桓校尉府の中門が、墓室においては中室入り口にあたるのではないだろうか。こう考えれば、前室は護烏桓校尉府の南門から回廊の突き当たりの中門までの空間にあたり、中室は堂と廷にあたることになる。

では後室は護烏桓校尉府のどこにあたるのだろうか。手掛かりは後室北壁の武成城圖にある（圖9）。この畫は中室の寧城圖などと同じく、墓主のいた官衙を俯瞰的に描いたもので、四角い枠が城郭と官衙の塀を表わしている。左下の「南門」はおそらく城門、その上の「武成寺門」と「武成長舎」、「尉舎」は定襄郡武成縣の官衙を表わす。畫面上端の「長史宮門」を入った「長史舎」が墓主の生活する建物、その下に「□中馬」がいて廐舎であることがわかる。墓主はどうかやら晩年は定襄郡長史であったらしい（とすればあきらかに左遷であるが）。⁽²⁹⁾「長史舎」は左右二つの部分にわかれている。右側の建物が「内」で竈を具え、その前に「井」がある。左の建物に「堂」という題記があるらしいが圖版では確認できない。ここは軒に幕を垂らし、

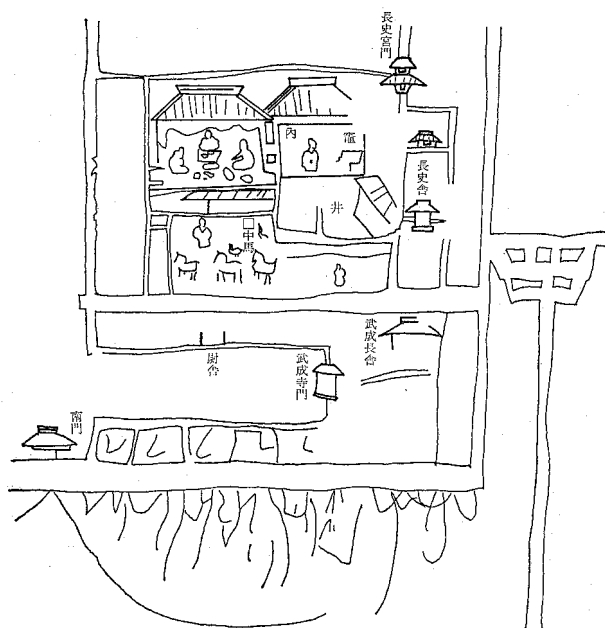


圖9 武成城圖

墓主が宴會をしているようである。この圖の構圖は中室の四つの城郭圖と共通するが、堂とつながる「内」が描かれる點ではつきり異なる。これは城郭圖の中でこの圖だけが後室に描かれていることに關連するだろう。後室は墓の一番奥で棺の置かれるところ、地上の建築でいえば主人の寢室にあたる。文獻に見える漢代の住宅建築で「内」は堂の奥の部屋を指している。⁽³⁰⁾ここに描かれた「内」は堂につながる主人のプライベートな場所であり、それ故に後室に描かれたと考えられる。

この點を考慮に入れて寧城圖を見直してみよう。寧城圖で「齋室」のある堂の後方は、晝で見える限り、堂を取り巻く廣場の延長にしか見えない。しかし實際には堂の後方には墓主とその家族のためのプライベートな空間があり、その一角に「齋室」があったのではないだろうか。寧城圖にははつきり描かれていないが、護烏桓校尉府の空間構成にはもうひとつの要素、すなわち堂の奥の部分を加える必要がある。これが墓室構造でいえば後室にあたることになる。

以上から、和林格爾漢墓の墓室構造と壁畫の對應關係をまとめてみよう。前室壁畫では墓主と屬吏の關係だけにとりあげられ、中室では墓主夫妻が中心になるが、堂上の墓主は屬吏に取り巻かれている。そして後室は寢室などの最もプライベートな空間にあたり、ここにはもはや屬吏は登場しない。護烏桓校尉府の空間構成になぞらえていえば、南門から中門までの回廊が前室に、中門が前室と中室の境界にあたる。⁽³¹⁾その奥の堂と廷は中室、堂の後ろの「内」が後室にあたる⁽³²⁾と考えられる。耳室はこの三段がまえの區畫に附屬する倉庫や廚房、廩舍などにあたるだろう。

和林格爾漢墓の壁畫は言うまでもなく墓の裝飾である。これを描いた繪師は、護烏桓校尉府を始めとする各地の官衙に精通していたとは限らない。墓の裝飾という條件の下で墓主の注文を生かした結果、このような壁畫が描かれたのであり、現實の護烏桓校尉府がここに描かれたとおりであったという保證は依然としてない。しかし逆に、寫實的描寫でないからこそ、この墓と壁畫は漢代の官衙の一般的モデルを提供しているともいえる。次の課題はこのモデルを文獻史料に見える漢代の實際の官衙にあてはめて検討することである。

第二章 文獻に見える官衙

1 中央官廳

漢代の中央官廳のありさまを、前漢の丞相府を中心にとめてみよう。宮中の諸官廳は特別なのでここでは一應除外する。丞相は「天子を承^うけて萬機を助理」する、外朝百官の總帥である。漢初の一時期は相國と呼ばれたが、以後前漢末まで丞相、哀帝の元壽二年（前一）に大司徒と改稱され、後漢代に司徒となった。その屬吏は秩百石以上四百石までの吏だけで三百餘人を擁する大所帯であり、漢初には長史二人（秩千石）が、武帝時代からは司直（秩比二千石）がこれを統括していた。⁽³³⁾事務部局としては東・西曹が知られている。東曹は地方官の人事を、西曹は府内の屬吏の任用を分擔していたが、當然これ以外の部局もあつたはずである。後漢の太尉府ではこの二曹（掾の官秩は比四百石）の他、比三百石の掾を長とする次の諸曹があつた。戸曹（戸籍・稅務）奏曹（上奏文作成）辭曹（訴訟處理）法曹（郵驛）尉曹（轉運）賊曹（警察）決曹（司法）兵曹（軍事）金曹（金錢出納）倉曹（食糧）。⁽³⁴⁾中の幾つかは和林格爾漢墓壁畫にも見られる。

屬吏たちは丞相府の周圍に設けられた吏舎に住んでいた。曹參が相國であつた時、晝閒から酒盛りが行なわれたという、かの吏舎である。屬吏はこういった吏舎に、よほどの堅物でなければ妻子とともに住んでいたのである。⁽³⁵⁾御史大夫寺には「吏舎

百餘區」があり、それぞれ井戸や竈を備えていた。また府中には柏樹が植えられ、數千羽の鳥が住みついていたともいう。⁽³⁶⁾ 和林格爾漢墓「莫府東門」圖に描かれた樹木と鳥のような鳥を思い出させる。

丞相府は職務にふさわしく、巨大な官衙であった。丞相府には四方に門があり、晝夜の別なくさまざまな報告が受け附けられた。そのため他の役所と異なっていちいち太鼓の合圖はしないことになっていたようである。⁽³⁷⁾

丞相府の中心は、丞相が政務を執る堂とその前の中庭にあたる廷である。ここは「聽事」とも呼ばれ、後世「廣」をつけて「廳」とされる場所である。⁽³⁸⁾ 昭帝の後、帝位に迎えられた昌邑王賀を廢位する宮廷クーデターを準備していた霍光が、大司農田延年を丞相楊敞のもとに派遣したことがある。皇帝の首をすげかえるという企みに驚いた楊敞はなす術を知らなかったのだが、田延年が「更衣」(賓客用の着替え部屋)に起ったすきに、「東箱」から様子を窺っていた夫人が助言してこの謀議に加わることにしたという。⁽³⁹⁾ 「東箱」とは、「殿の東堂」とも、「正寢の東西に附屬する箱形の室」とも言われるが、⁽⁴⁰⁾ いずれにせよ賓客を迎える正堂の脇にある部屋と解釋できよう。和林格爾漢墓壁畫寧城圖で、夫人が描かれた堂の脇の部屋を思い浮かべればよい。この堂は「殿」とも呼ばれる大きなもので、屬吏から日常の業務が報告されたり、賓客を迎えるほか、上計吏數百人を廷に集めて詔敕を読み上げる、といった公的な儀式にも使われた。⁽⁴¹⁾ 後漢代の司徒府の堂は「百官朝會の殿」といわれ、天子の臨席のもとに地方の實情が報告されたり、數百人の上計吏が司徒の前に平伏する、といった重要な政務の場であった。⁽⁴²⁾

このような堂と廷は塀や回廊で圍まれていたが、この區畫へ出入りする門は三種類が知られている。まず正門にあたる「中門」があった。哀帝の寵臣董賢が帝の勧めで丞相孔光を訪問した際、孔光はまず衣冠を正して門外で待ちうけ、董賢の車が見えると引つ込んだ。そして董賢が「中門」まで来ると今度は「閤」に入り、董賢が車を降りたあと拜謁して「送迎はなはだ謹」だったという。⁽⁴³⁾ 「中門」はこのように、よほどの貴人の訪問か天子の來臨といった場合に開けられる特別な門だったと思われる。また董賢の例から見て、「中門」までは車で入れたことがわかる。後漢の三公府の「駐駕」という來客用駐車場も、おそらく「中門」の外側にあったと考えられる。⁽⁴⁴⁾

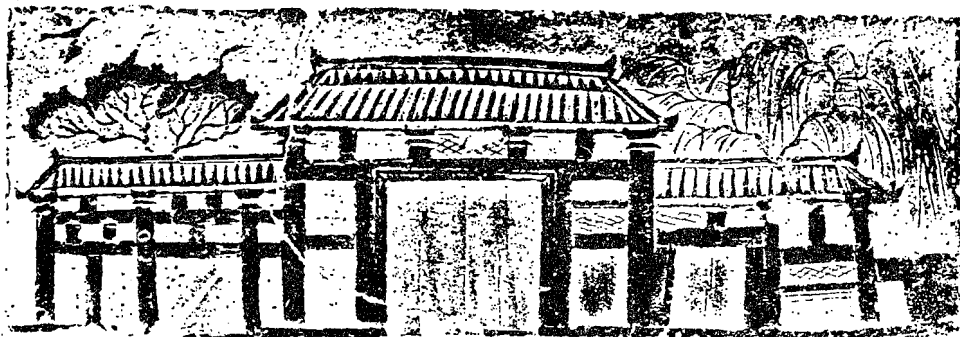


圖10 門 と 閣

これに對して、延に日常的に出入りする屬吏のための門が「黃閣」である。前漢の丞相府、及び後漢の三公府の「聽事の閣」、すなわち丞相の執務室から屬吏の事務所に通ずる「閣」は特に「黃閣」と呼んで尊ばれた⁽⁴⁵⁾。太尉府には「黃閣主簿」が置かれて諸曹から提出される書類の處理に當たっていた。これは、望都一號漢墓の壁畫で「主簿」が前室の一番奥に描かれていたことと對應する。また太尉府には「閣下令史」も置かれ、「閣下の威儀の事」を擔當した⁽⁴⁶⁾。こちらは望都漢墓壁畫の「侍閣」にあたるだろう。しかしこの門を開け閉めしたのは蒼頭だったらしい。例えば新任の吏が挨拶におもむく時はこの蒼頭の名前を大聲で呼ばわって閣を開けてもらわなければならなかった。ちなみに秩百石以下の小吏は丞相に直接目通りはかなわ⁽⁴⁷⁾ない。この門番を「宜祿」という縁起のいい名前の蒼頭が務めたことがあったらしく、官吏が報告のため閣に至るたびに「宜祿」と呼ぶことが、以後の慣例になった⁽⁴⁸⁾という。後漢の司徒府において、「中門」の外で屬吏が宿直に當たっていることから考えて、少なくとも諸曹の事務所は「中門」の外側にあったことは確かである⁽⁴⁹⁾。

では「中門」と「黃閣」はどのような關係にあったのだろうか。『説文』には「閣、門の旁戸なり」とある⁽⁵⁰⁾。門の横に設けられた潛り戸だという解釋である（圖10）。嘉峪關晉墓の「中閣」が中室入り口の脇に作られていたことも参考になる。

「中門」まで來た董賢を迎えた孔光是、その脇の潛り戸である「閣」を入ったのだと考えれば自然であろう。さらに、屬吏の事務所が「中門」附近にあり、彼等の出

入り口も「閣」であることから考えれば、「黄閣」は「中門」の脇にある「旁戸」ではなかったかと思われる。こう考えれば、「中門」の外の片側に駐車場などがあり、もう一方に屬吏の事務所があったと解釋できよう。寧城圖の中門附近の空間構成はおおむね丞相府にあてはまりそうである。

さて、丞相府の堂と廷の區畫に出入りするもうひとつの門として「東閣」がある。武帝時代の丞相公孫弘は客館を建てて「東閣」を開き、賢人を招いて謀議に参加させた。顔師古によれば、賓客専用の小門を東向きに新設することによって、屬吏が廷に出入りする門、すなわち前述の「黄閣」と區別したのである。「東閣」は廷の東側に開かれた小門だったに違いない。もっとも、客館は公孫弘の後ほどなく使われなくなり、公孫賀と劉屈氂の時には車庫や廢舎、奴婢の宿舎になっていたようである。⁽⁵⁴⁾

さて、長官のプライベートな空間は「便坐」と呼ばれ、正堂の奥にあった。⁽⁵⁵⁾ ここも中庭を圍んで建物が建つ形式だったらしく、その中心となる堂を「後堂」という。尹翁歸が東海太守として赴任する際、廷尉于定國を訪れた。東海郡出身の于定國は故郷の者を新太守に引き立ててもらおうと、「後堂」に彼等を待たせておいたのだが、終日尹翁歸と語りながらついにその話を切り出せなかったという。⁽⁵⁶⁾ 尹翁歸を迎えた正堂とは別に、私的な場所として「後堂」があったのである。正堂と「後堂」の關係は和林格爾漢墓の中室と後室の關係に對應している。

後漢桓帝の頃、蘇不韋は父の仇大司農李嵩をつけ狙っていた。彼は大司農寺の北垣に接する將作大匠右校のまぐさ置き場に忍びこんでトンネルを掘った。そして首尾よく寢室に侵入、李嵩の愛妾と小兒を殺したが、たまたま廁に行っていた李嵩は無事であった。⁽⁵⁷⁾ 南向きの大司農寺で、李嵩の寢室は建物の一室奥になるが、北からトンネルを掘れば却って近かったのである。丞相府では、このあたりに裏庭にあたる「園」があった。⁽⁵⁸⁾

ところで前出の大司農田延年は、三千萬錢という前漢代最大の横領事件をおこした。これが發覺すると、彼は「閣を閉ざして獨り齊舎に居り」、さりとて自殺の決心もしかねていたのだが、廷尉からの召喚の使者が到來したことを告げる太鼓の音を

聞くや、自刎して果てた。⁽⁵⁶⁾「齊舍」はもちろん「齋舍」、寧城圖の「齊室」にあたる。便坐の一角に設けられた齋戒の場所である。この他、丞相府には倉庫などの附屬設備もあったはずだが、現在知る術がない。

このように、丞相府を始めとする中央官廳の空間構成は、大きく分ければ屬吏の事務所の區畫と堂・廷の區畫、「便坐」と呼ばれるプライベートな區畫の三つの主要な區畫と、その他附屬施設の區畫にまとめて考えることができる。これらの區畫にはそれぞれ門が設けられていたが、その中で堂と廷の區畫と屬吏の事務所を隔てる「閤」が特に重視されていたようである。前述のように「閤」が「門の旁戸」であるとすれば、なぜ脇の潛り戸ばかりが重視されたのだろうか。

「閤」の定義については、これまで『説文』に従って解釋してきたが、『爾雅』釋宮には「宮中の門、これを閤と謂う。其の小なるもの、これを閤と謂い、小閤これを閤と謂う。」とある。『爾雅』は宮中の門を大小の順にならべており、この場合「閤」は「門の旁戸」とは限らないかもしれない。また「門の旁戸」ならばどの門にもあり得るが、『爾雅』はこれを宮中の門に限定している。まずこの點を考えてみよう。

前漢の長安では、未央宮の門の警備には衛尉と郎中令（のち光祿勳）の二系統があった。衛尉は地方から輪番で上京して来る衛士を率いて正門の守りを固めている。⁽⁵⁷⁾光祿勳は「宮殿の掖門の戸」、すなわち正門の脇の小門を擔當するとされる。ここには光祿大夫など諫官や謁見の案内役の謁者が屬する他、多數の郎官が「門戸を守り、出でては車騎に充」てられる。⁽⁵⁸⁾衛尉と光祿勳の違いは、一口で言えば一般の警備兵と親衛隊の相違なのだが、この違いが管轄する門の違いとして表現されているのである。同じ場所に設けられた門でも、正門は外部を警戒し、排除する門であるのに對し、掖門は「九閤」の奥に住む天子に直結した名譽ある門である。⁽⁵⁹⁾正門の警備は衛士でもかまわないが、掖門は天子の最も信賴する郎官の親衛隊によって守られなければならないのである。

このような正門と掖門の關係は、門と閤の關係に容易にあてはめることができる。「門の旁戸」はただの潛り戸ではなく、主人にとって特別な者、親しい者を通す門である。そこから特別な者しか入れない「宮中の小門」を限定的に指すことも可能

となる。後者の場合、常にある門の「旁戸」でなくてもよいだろう。⁽⁶⁰⁾董卓と父子の誓いを結んだ呂布が「中閤」、すなわち中門の閤を守ったように、⁽⁶¹⁾「閤」は主人の最も信頼する者によって守られなければならない。丞相府において、「中門」の「旁戸」であるとともに「宮中の小門」としても機能する「黄閤」が、屬吏ではなく忠實な蒼頭によって守られたことは、このような「閤」の性格を物語っている。屬吏にとって、ここを潛することは丞相の身近に親しく仕えることを意味する。「閤」こそが丞相に仕える者にとって名譽の門なのである。

さて、「黄閤」に出入りできる屬吏は幹部に限られていたが、彼等は主簿を通じて面會を申し込めば、いちいち丞相に傳達せずに許可された。⁽⁶²⁾しかしこれは「萬機を助理する」丞相の任務に「節限」がなく、あらゆる報告が速やかに處理されなければならないからである。これは丞相府に特有のことで、他の役所ではおそらく長官の執務時間中に、長官本人の許可を得なければならなかっただろう。齋戒などのため「閤」が閉ざされていれば面會謝絶である。さらに許可を得ていても、「閤」を勝手に通することは許されず、門番の蒼頭が頑張っていたことは前述のとおり。長官を煩わせて面會するには、屬吏幹部でもなかなか面倒な手続きを要したのである。

彼等が丞相にまみえる際の禮は「師・弟子の如し」とされ、大袈裟な拜禮は省略される。「臣たらざるを示す」のである。⁽⁶³⁾これは屬吏幹部層が禮遇すべき存在として扱われたことを示している。後漢末期のこと、光祿勳陳蕃を主事范滂が訪れた。范滂は「公儀をもって」笏を持って「閤」に入ったが、座る時になっても陳蕃が笏を持たせたままだったので、范滂は憤然として笏を捨て、官を去った。范滂ほどの人物を「閤」に入ってまで部下扱いするのは失禮だというのである。⁽⁶⁴⁾この例は、「閤」の外が官僚的ヒエラルキーの論理に支配されているのに對して、「閤」の内部では長官との人格的結びつきが重視されたことを示している。「閤」は人間關係の仕切りとしても機能していたようである。

ところで、丞相は公孫弘以後すべて列侯に封ぜられたから、丞相の居住空間には家丞を始め列侯の家吏たちもいたはずである。⁽⁶⁵⁾したがって、「黄閤」の内部は列侯としての丞相の「家」の世界であり、外部は屬吏の官僚的ヒエラルキーの世界であっ

たともいえる。この境界は、和林格爾漢墓において前室と中室の境界に相當する。屬吏の仕事場である前室で官僚的ヒエラルキーが強調されるのに對して、中室・後室では墓主夫妻の人徳が強調されていたことは、二つの空間の質の差を物語っている。規模の差はあれ、和林格爾漢墓壁畫から得られた官衙のモデルは、中央官廳にもあてはまりそうである。

2 地方官廳

では、地方の官衙はどうだっただろうか。州・郡・縣の機構のうち、州刺史(秩六百石)はある時期まで「常治なし」とされ、管轄地域を巡回して京師に歸り、天子に報告することを本務とする特別職である。ここでは郡縣に限って調べてみることにする。まず漢代の地方行政制度を簡単に整理しておこう。前漢の郡の長官は太守(秩二千石)、副官が丞(六百石)である。邊郡にはこの他長史(六百石)も置かれる。前漢代には太守の補佐兼監視役として軍事を擔當する都尉(比二千石)が置かれたが、後漢代には内郡の都尉は省かれ、太守に一本化された。邊郡に残された都尉のうち、異民族居住地に置かれた特別な都尉が屬國都尉(比二千石)である。⁽⁶⁶⁾和林格爾漢墓壁畫に登場する護烏桓校尉もその一種である。これら郡の長吏は朝廷から任命され、自分の出身地以外の地方に赴任する。

これに對して郡太守府や都尉府の屬吏は、長官が任命する地元出身者である。郡太守府は前節にあげた後漢の三公府と同様の諸曹に分かれていた。ただし人事擔當の東西曹が功曹となり、屬吏の紀律擔當の五官掾、屬縣の監察擔當の督郵が置かれた。諸曹の文書をまとめる係として主簿や主記室史も置かれる。これが郡の「右職」である。だが、それ以下の諸曹の構成や人員は土地の實情に應じて多少異なることもあった。諸曹は掾・史・書佐といった職階に分かれるが、官秩は後漢の河南尹のような大郡は例外として、普通は幹部でもせいぜい二百石前後、壓倒的多數は百石以下の小吏である。官吏の數は後漢の河南尹の九二七人がおそらく最大、會稽郡でも五百餘人と傳えられる。⁽⁶⁷⁾

一萬戸以上の大縣には令、それ以下の縣には長が置かれた。前漢の縣令は秩千石から六百石、縣長は秩五百石から三百石で幅があったが、後漢代には縣令が千石、縣長が四百石と三百石にまとめられた。令長の下には丞・尉各一人(大縣は尉二人)

が置かれた。ここまでは朝廷に任命される長吏である。地元で採用される屬吏の部局の構成や官秩は、督郵がない他は大體郡太守府と同じだが、郡の五官掾が縣では廷掾とされる。さらに縣の下に、百石以下の郷亭の職として有秩・嗇夫・游徼がある。官吏の數としては後漢洛陽縣の七九六人という數値が知られている。⁽⁶⁸⁾そして行政の末端に連なるのが郷里の代表である三老・里正・父老である。このような行政制度を踏まえて、地方の官衙を見てみよう。

建武五年（後二九）春、光武帝が全國平定に努めていたころ、薊城を奪って燕王を稱していた漁陽郡太守彭寵が蒼頭に殺される事件があった。齋戒のため正室を避けて「便坐の室」にいた彭寵を、蒼頭子密ら三人が襲い、彼の妻や奴婢ともども縛りあげて家財を掠奪したうえ、彭寵夫妻の首をはねたのである。彭寵の部下はこの變事にまったく氣附かず、翌朝閤門が開かないのを不審に思つた官屬が扉を乗り越えて死體を發見する頃には、子密らはまんまと脱出して光武帝の恩賞にありついていた。⁽⁶⁹⁾この事件が起こつたのは恐らく王莽時代からの郡太守府だと思われる。⁽⁷⁰⁾「閤門」が彭寵と官屬の仕切りになっていたのだから、この門が丞相府の「黃閣」にあたることは明らかである。ただし「閤門」という表現は「中門」とその「旁戸」という區別を感じさせず、兩者をまとめて指しているようである。ここに見られる空間構造は、中央の丞相府のそれとまったく同じである。すなわち主人夫妻が閤門の内で奴婢にかしづかれて生活しており、閤門が閉められている限り、外の屬吏はその内部に立ち入ることができない。子密らはこれを利用したのである。

前漢景帝時代、蜀郡守文翁は成都に學官を建て、成績優秀な者は郡縣の吏に任用した。また諸生の優秀な者を傳令として「閤閣」に出入りさせ、年少の者を選んで「便坐」に置いた。これを見た吏民は争つて學官の弟子となつたという。⁽⁷¹⁾また武帝の初期、東海郡太守汲黯は病氣がちで「閤閣」の内で臥せていることが多かったが、それでも一年餘りで東海郡は大いに治まつたという。⁽⁷²⁾これらの例は太守府の「閤」の内部が太守の私的な生活空間だったこと、またここへの出入りを許されることが名譽と見なされたことを示している。

閤門内には「聽事」の堂がある。⁽⁷³⁾掾史らを集めた年始や十月（會計年度の始め）の酒宴、といった公的な儀式にも使われる。⁽⁷⁴⁾

後漢の末、漢陽郡の上計吏趙壹は、河南尹羊陟の面會を求めて堂に上がりこんだばかりか、さらに羊陟の寢室の前まで行き、故郷の郡の窮狀を訴えて泣いたという。⁽⁷⁶⁾堂の奥が羊陟の私的な生活空間になっていたことがわかる。

さて、太守は毎日堂に出て政務を執るとは限らない。例えば後漢の九江太守宋均は「五日に一たび聽事」し、冬は正午から、夏は日の出から執務したという。⁽⁷⁶⁾堂に出るまでもない書類の決濟などは「便坐」で済ますことも多かっただろう。前述の蜀郡守文翁が學官の優秀な生徒を「便坐」に置いたのは、そのような折りに書類の取り次ぎや起草をさせて、官僚としての現場教育を施すためだったともいえよう。

堂の後ろの「便坐」はやはり「後堂」が中心になっていた。河内太守の周景は毎年、孝廉に擧げられた吏を再三「入りて後堂に上らしめ」、酒宴を催したという。⁽⁷⁷⁾これは家人の扱いである。このほかに「園」もあった。⁽⁷⁸⁾

閣門の外には屬吏の勤務する諸曹があったが、その配置はよくわからない。ただ、賊曹や決曹といった司法關係の曹を「後曹」と呼ぶことがある。⁽⁷⁹⁾どこから見て「後ろ」なのかわからないのが残念だが、少なくとも諸曹の配置に一定の順序があったらしいことは想像できる。恐らく一番奥には諸曹の文書をとりまとめる主簿がいただろう。閣には「閣下の書佐」とか「直符の史」と呼ばれる書記官が當直として控えている。⁽⁸⁰⁾太守は必要に応じて彼等と呼ば入れ、書類を作らせた。王莽時代に河南郡太守となった陳遵は赴任早々に、政務をとるかたわら書吏十人を前に京師の故人にあてた書狀數百通を口述したという。⁽⁸¹⁾また嚴延年も同じく河南太守となり、嚴刑を亂用して「屠伯」の異名を奉られたが、彼は「獄文」を書くのが得意で書記官の手を借りなかった。そのため主簿や「親近の史」でもその中身を知り得なかったという。⁽⁸²⁾これらの屬吏は通常は官舎に住み、夏至などに休暇が與えられてはじめて自宅に歸ることができたのである。⁽⁸³⁾

この他郡太守府の附屬施設として倉庫や廚房、廩舎があったはずだが、文獻史料は多くを語らない。ただ、前漢宣帝時代、地方の官吏が使者の接待などと稱して「廚傳を飾る」現狀を警告する詔敕がある。⁽⁸⁴⁾勝手な理由を設けて官費で宴會を開いたり、公用車を乗りまわしたりすることが、一種の特權となっていたらしい。和林格爾漢墓壁畫に見える廚房や宴會のようすは、あ

まり譽められたものではないのかもしれない。

ところで、司法は地方行政の根幹のひとつである。郡太守府に未決囚を收容する獄があったことは言うまでもない。獄吏の拷問によって、未決のまま獄死する囚人も多かった。獄は治下の吏民にとって最も恐ろしい場所だったに違いない。⁽⁸⁵⁾和林格爾漢墓の壁畫に獄がないのは、半ば意圖的に省略されたのだと思われる。また、府中の雜用には、輪番の徭役で官府に給事する「卒」⁽⁸⁶⁾や、官奴婢・刑徒も使われた。雜用といつても、刑徒の場合律の規定どおり働かされたら、死んだ方がましな位だったようである。⁽⁸⁷⁾郡太守府の附屬施設として、獄の他に「卒」の宿舍や奴婢・刑徒の寄せ場も考える必要がある。

次に縣の官衙を見てみよう。官衙の中心は正堂である。後漢の章帝が元氏縣に行幸して光武帝・明帝を「縣舍の正堂」に祠った例がある。⁽⁸⁸⁾この堂は「聽事」とも呼ばれる。⁽⁸⁹⁾その前は廣い庭である。前漢元帝時代、右扶風美陽縣令代行の王尊は庭を前に坐し、樹に不孝者をつるして騎吏にこれを射させたという。⁽⁹⁰⁾

堂の後ろが「便坐」である。後漢章帝の建初七年(後八二)、中牟縣令魯恭の「便坐の廷中」に嘉禾が生じた。⁽⁹¹⁾さらにこの後ろには園もあり、野菜などが植えてあったようである。⁽⁹²⁾また後漢の膠東侯國の相呉祐が園に行くたびに、丞の舍から經典を讀む聲が聞こえて來たという。⁽⁹³⁾前漢の酷吏張湯が少年時代に鼠の裁判をしたのは、長安丞の舍の堂下であった。⁽⁹⁴⁾縣寺の周圍には丞以下の官舎があったのである。

縣寺の附屬施設についての文獻史料はほとんどないが、雲夢出土の秦律のうち、「内史雜」と題される律には、縣の倉などに關する規定が見出せる。それによれば、穀物倉やまぐさ倉の周圍には他よりも高い垣牆が設けられ、倉や「書府」「藏府」と呼ばれる重要な倉庫は、火の用心のため夜も宿直による見回りが行なわれる。これらの倉庫の附近には吏の舍を建ててはならない。⁽⁹⁵⁾このような倉庫類の管理は漢代にも共通すると考えてよいだろう。さらに獄があったことはいうまでもない。

ところで、このような縣寺でも令長と屬吏を隔てる門を「閤」と呼んだ。呉祐は「政唯だ仁簡」、民の裁判沙汰を裁くのに、まず「閤を閉ざして自らを責め」てから臨み、道理を諭して和解させた。吏民これを慕って欺かなかった。例えば畜夫孫性なる

ものは税金を横領して買った衣を持って自首し、「閤に詣で」たのである。⁽⁹⁷⁾河内郡平皐縣長の張歆は父の仇討をして自首した者を、自分で取調をするという口實で「閤に詣でしめ」、こっそり逃がしてやって自分も亡命した。⁽⁹⁸⁾閤内には屬吏の手が届かなかったのである。

このような閤は都亭や傳舍にもあった。河南太守嚴延年は母の許しを得ようと洛陽の都亭の閤の前に跪いた。⁽⁹⁹⁾また左馮翊韓延壽は、兄弟の相續争いの訴訟を見て高陵縣の傳舍に閉じ籠もり、「閤を閉ざして過を思」った。當事者が反省して訴訟を取り下げるや、彼は「閤を開きて延見し」和解の酒宴を催したという。⁽¹⁰⁰⁾都亭や傳舍には、驛傳用の廩舍・車庫の他公用旅行者のための宿泊施設もあったが、その建物構成は縣以上の官衙と基本的に變わらないと考えてよからう。

もはや明らかなように、漢代の官衙は、上は丞相府から下は傳舍に至るまで、大小の差はあるにせよ、皆な同じような空間構成を持っていることがわかる。その構成要素は、屬吏の勤務する區畫を手前に、閤門を隔てて堂と廷があり、さらにその奥に後堂を中心とした便坐が配置される。この三段構えの周圍に倉庫・獄・廩舍などの附屬施設の區畫が竝ぶ。これは和林格爾漢墓で見出された官衙のモデルが、普遍的にあてはまることを示している。このような漢代の官衙とは、いかなる性格の建築なのだろうか。

3 長官公邸としての官衙

前節まで見てきた漢代の官衙の空間構成は、役所というよりも屋敷といったほうがふさわしいように感じられる。官衙の建築を當時の大邸宅の例と比較してみよう。四川や山東の畫像磚や畫像石には、豪族の豪壯な屋敷を表わしたものがしばしば見られる。圖11は後漢後期の成都の畫像磚の例だが、ここには堂を中心とした主人の生活空間だけでなく、倉庫や廚房などが區畫されて使用人が働く姿も描かれている。圖12は山東畫像石の例で、やはり後漢後期に屬する。こちらは二重の門の内部が広い庭園になっており、その奥の門内には大小の堂が回廊に圍まれている。また河南の前漢前半期の家屋明器(圖13)は、門の内側が廩舍になっており、さらにもうひとつの門を通して中庭に面した堂があり、その奥に廚房や廁、居間などがある。建物

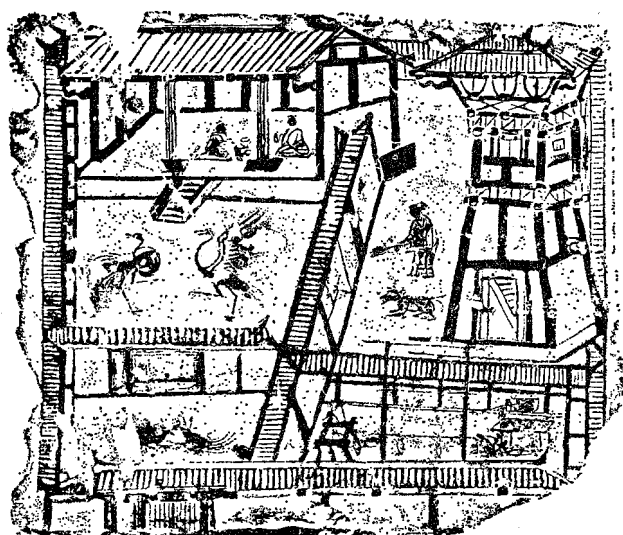


圖11 成都揚子山2號墓出土畫像磚

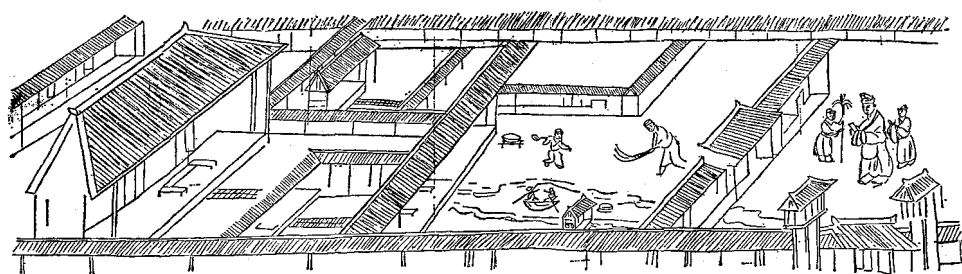


圖12 山東諸城前涼臺漢墓出土畫像石（模本）

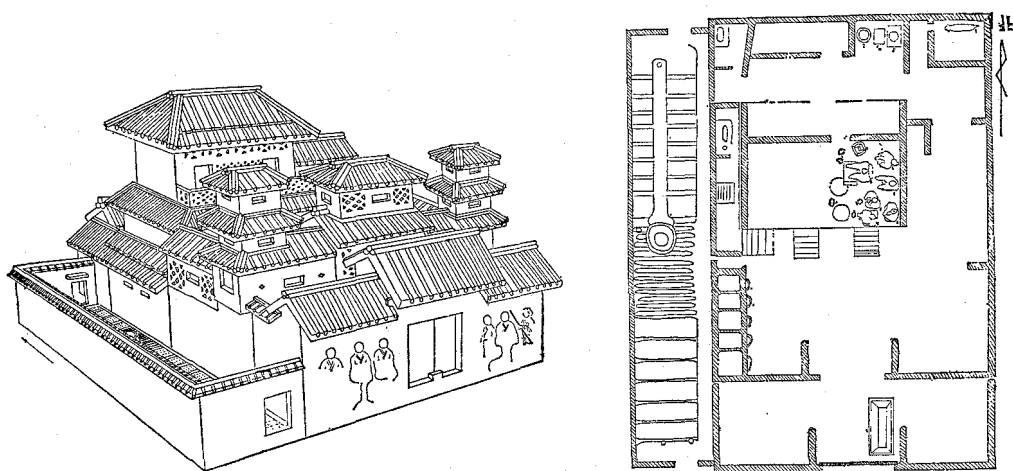


圖13 河南淮陽于莊漢墓出土陶屋

の横には菜園もある。このような構造の邸宅はかなり早くから存在していた⁽¹⁰⁾。長官の居住空間が當時の住宅に似ていることは當然としても、附屬施設を含む官衙全體が個人の邸宅と同じ構造を持つていたのである。

官衙に見られたような、中庭を圍む建築單位を連ねる建築様式は、當時民衆の一般的な住居として知られる「一堂二内」の住宅を前後に重ねた構造である⁽¹¹⁾。同時代の大規模な屋敷に似たタイプを捜せば、天子が功臣などに與える「第」がこれに近い。「第」は「出づるに里門に由らず、大道に面する」、里内の住宅よりもはるかに大規模な宮殿である⁽¹²⁾。その内部は賓客をもてなす前堂と、婦女がかしづく後房とに分かれており、ここに後堂があつた例も知られる⁽¹³⁾。第の内部にはこのような建物だけでなく、廣大な庭園もあり⁽¹⁴⁾、これら全體が垣に圍まれていた。このような建築様式の起源は、實例で知られる限り西周時代の岐山の宗廟建築まで遡ることができる。後世の四合院式住宅に至るまで、この様式はまさに傳統的に受け繼がれていく。

このような「第」の構成はこれまで述べてきた官衙の構成と明らかに一致する。事實、後漢朝が成立したばかりの洛陽で、もとの館陶公主の「第」が太尉府として使われていた例がある⁽¹⁵⁾。また例えば、文獻の中で本來長官の公邸を示す「舍」は、しばしば官衙全體をも指している⁽¹⁶⁾。官衙は長官の公邸と事實上同義だったことを示している。さらに和林格爾漢墓の武成城圖において、墓主の住んだ「長史舍」の門が「長史宮門」とされていたことは、長官の公邸が實際に宮殿とみなされ得たことを示している。これまでの分析から明らかなように、官衙の機能の中樞は長官の公邸、すなわち長官の「家」の空間にあり、これなくしては官衙全體が機能し得ない。官衙の一角に長官の公邸があつたのではなく、長官の公邸そのものが官衙だったのである。

この點からいえば屬吏の事務所やさまざまな附屬施設は、面積の多少にかかわらず、それぞれ長官公邸の外側の一角を占めているに過ぎない。長官以外の官吏はすべて、宿直勤務の時以外は官衙の外の官舎に住み、毎朝官衙に出勤して夕刻に退出する。この點では朝廷から任命される丞・尉などと長官の採用する屬吏に區別はない。官衙という場においては、長官と丞以下の官吏という二分法にこそ意味がある。ある官衙の長官を務めた人にとって、その官衙は單なる勤務先や臨時の住居ではあり

得ない。和林格爾漢墓や望都漢墓の墓主が、死後の住居として故郷の我が家ではなく、官歴の頂點にあった時の官衙を選んだことは、このような官衙の性格を最も雄辯に物語っていたのである。

このような官衙は極めて傳統的な建築であり、漢代を通じてあまり顯著な變化は認められない。漢代の官衙において、さまざまな變化を遂げていくのは、建築ではなく、そこで働く官僚の方である。「閤」の内と外には、長官と屬吏のそれぞれの歴史があり、兩者の關係もそれにつれて變化するだろう。次の課題は、このような官衙で展開する長官と屬吏の關係の歴史的分析である。

第三章 閤の内と外

1 屬吏制度と諸曹の形成

官衙の閤の外を仕事場とする屬吏たちのヒエラルキーと職掌はどのように形成されたのだろうか。まずそのヒエラルキーの形成をたどってみよう。

漢代の屬吏の主體は掾・屬・史・書佐といった職務等級に分かれた下級書記官である。このような等級の起源は、少なくとも戰國秦まで確實に遡るようである。例えば湖北雲夢睡虎地一一號墓から出土した「大事記」あるいは「編年記」と呼ばれる一群の竹簡は、縣の屬吏であつた墓主の「喜」なる人物の經歷を記している。彼は秦王政（のちの始皇帝）の元年（前二四六）に十九歳で「史」となり、安陸縣（現雲夢縣）の「令史」を経て鄢縣の「令史」、さらに同縣の「治獄」となっている。彼は始皇帝の統一以前の段階で南郡に屬する縣の書記官を歴任したのである。「大事記」とともに出土した法律書やその手引き書、報告書の書式集といった書籍類が、彼の職務を物語っている。これらに見られる「掾」「令史」「佐」「史」や「有秩」「嗇夫」などの屬吏の等級は、最近再發見された戰國秦の惠文王四年（前三三四）の紀年を持つ瓦書にすでに一部見られるから、おそ

らくその起源は商鞅の變法の時期まで遡るだろう。

秦末の動亂前夜、蕭何は沛縣の「主吏掾」として重んぜられた。これは漢代の功曹にあたるとされる。⁽¹⁰⁾ おそらく「喜」のような屬吏たちの勤務評定や任免を擔當していたのだろう。雲夢秦簡によれば、屬吏の人事異動は例年十二月から三月末までに行なわれる。臨時の缺員が生じた場合は速やかに後任を任命しなければならない。⁽¹¹⁾ いずれも正式に辭令が交付されてはじめて任務につくことが許される。⁽¹²⁾

こうして任命された屬吏のうち、「令史」が犯罪捜査の陣頭指揮や報告書の作成にあたっていること、また「官畜夫」が缺けた時に「令史」がこの職務を代行でき、「佐」「史」にはそれができないことから見て、「令史」が行政實務の中核をなす書記官であり、その下に「佐」「史」が屬したことがわかる。⁽¹³⁾ 「佐」は成人したての若者以外の壯丁が任ぜられ、その下の「史」は、「喜」がそうだったように、十九歳の若者が初任で任命されるような下級書記官クラスである。

秦律では、役所への訴えなどはすべて書面で提出することが義務づけられ、口頭では受け附けないことになっている。⁽¹⁴⁾ お役所仕事の特色ともいえる文書主義は、すでに統一以前から徹底していた。「史」を始めとする書記官の任務は、ありとあらゆる書類の作成であった。このような書類作りの現場から、簡便な筆記體である隸書が廣まったに違いない。このような書記官を中心とした屬吏の職階は、すでに統一前の秦で成立しており、基本的に漢代に繼承されたと考えてよい。

次に縣の部局構成をみてみよう。雲夢秦簡から窺える縣の機構は、縣の令・丞をトップに、軍事と治安を擔當する司馬、強制勞働者を管理する司空、倉・少内といった財政機關、廩・工室などの附屬施設に分かれている。⁽¹⁵⁾ このような秦代の縣の機構は、傳統的な官名か具體的な持ち場を示すことによって職掌を表わしている。部局のことを「曹」と呼ぶことがないわけではないが、⁽¹⁶⁾ 漢代のように「某曹」の上の一字で職掌を表わす部局名の體系はまだ前面には出てこない。

前述のように、漢代の郡縣の長官には屬吏の任免などについて大幅な権限が與えられていた。掾史など屬吏の官秩と職階はすでに制度が固まっていたとしても、彼等が分屬する部局の構成や名稱については、法的に統一されていたわけではない。し

かし前漢宣帝時代ごろから、ようやく功曹・主簿・五官掾といった郡の右職の名稱が各地で確認できるようになる。⁽¹¹⁸⁾「某曹」という名稱の體系が普及、定着し、中央地方を問わずこの役所でも同じような部局構成をとるようになったのは、おそらく前漢もかなり後になってからだろう。

このような過程を経た前漢末期に、縣の部局名と職掌を列挙した史料がある。嚴耕望氏が漢代の地方行政制度の研究の中で紹介した、蕭吉『五行大義』に引く劉向『洪範五行傳』である。⁽¹¹⁹⁾これを整理したのが左の表である。

この表は縣の屬吏の官名を十干十二支に割り振ったものである。上段の十干に配當されているのは「某曹」の系列である。これに對して下段は「某官」という名稱を持つものが多い。功曹のような右職が上段に、市官や郵亭、鄉官といった行政の末端に位置する職が下段に現われることから見て、劉向は十干を上級の屬吏に、十二支をその下に分屬する下級の屬吏にあてはめているようである。ただしどの「官」がどの「曹」に屬するかははっきりわからないし、縣の部局名がこれだけだったかどうかともわからない。⁽¹²⁰⁾しかし、少なくとも前漢末の縣の機構が諸曹に大別さ

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲
集曹	時曹	尉曹	金曹	田曹	功曹	賊曹	辭曹	戶曹	倉曹
共納輸	共政教	共本使	共錢布	共群畜	共除吏	共獄捕	共訟訴	共口數	共農賦
亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅
宰官	獄官	倉官	庫官	廚官	郵亭	少府	鄉官	市官	司空
閉藏完具	禁訊具備	五穀蓄積	兵器器械	百味悉具	馳逐追捕	行書驛置	金銅錢布	親事五教	守將班治

れ、さらに各曹の下に職掌の細分化されたさまざまな係が置かれたことは、これによって十分に窺い得る。前漢末にはこのような部局構成が大體定着し、後漢に受け繼がれていったのだろう。屬吏の官秩と職階が早くから固定されていたのと對照的に、部局構成と名稱が定着したのは、前漢後期であつた。

このような機構で働く屬吏には文字の知識が必須である。雲夢秦簡では、縣に「學室」と呼ばれる一種の研修所があり、ここで文字の知識をはじめとする書類作成技術が傳授されたようである。⁽¹²¹⁾漢律では、十七歳以上の者に試験をして九千字の籀文を覺えている者に「史」となる資格を與えるこ

とになっていた。⁽¹²⁾十九歳で「史」となった「喜」もおそらくこういった教育と試験を経たはずである。ただし秦律では、「學室」で學ぶのは「史」の子に限られる。「史」は一種の世襲的職務なのである。とはいえ秦の段階では、すでに書記官の初等教育を縣が行なっている以上、文字の知識そのものは父から子へと世襲される獨占排他的な知識ではなくなっている。その意味で「史」の世襲的性格は希薄化しつつあるともいえる。

しかし一方で文字の知識を身につけることは、壓倒的多数の農民にとっては經濟的餘裕の產物であり、誰もができることではない。「史」の世襲的な資格制限を定めた律が漢代に繼承されたかどうかは不明だが、屬吏の多數を占める書記官の任用が世襲的色彩を帯び続けたことは十分想像できる。『史記』には、漢代になってようやく平和と安定がもたらされた結果、官吏はずっと同じ官職を務め、官職を姓とするまでになったと記される。⁽¹³⁾これは漢代になって始まった現象ではあるまい。屬吏たちの世界は混亂の時代を経て、ようやく常態に復したと考えたほうがよい。

漢代の地方官衙の屬吏たちは、このように土着的で、世襲的ですらある一種の職能者であった。彼等の職能の中心をなす文字の知識は、彼等の生活のための技術であり、學問的な教養とは異なる。彼等は、文字と職務に必要なだけの法律、書類の書式を知っていれば十分だったのである。しかも彼等の給與は非常に低く、しばしば袖の下や公金のつまみ食いに頼らなければならぬ。これが漢初の官僚機構の底邊で働く屬吏の姿であった。

池田雄一氏が指摘したように、⁽¹⁴⁾景帝時代の蜀郡守文翁が成都に學官を建てたのは、單なる文化政策ではなく、このような屬吏の質の改善が狙いであった。⁽¹⁵⁾また丞相公孫弘が元朔三年（前一二六）に、博士弟子員とともに郡國に文學卒史や文學掌故を設けたのは、地方の吏には美辭麗句をちりばめた詔敕がよく理解できないために、上意下達が妨げられているという現状認識に立っていた。⁽¹⁶⁾武帝時代になっても地方の屬吏の實情は一向に改まっていなかったのである。この後、下級官僚の待遇改善や、『孝經』の普及を中心とした儒教的教化が圖られていく。⁽¹⁷⁾前述のような官衙の機構面での整備は、屬吏層の質的改善を主軸とする地方行政への取り組みの結果でもあっただろう。閭の外に竝ぶ諸曹は、何よりもこのような前漢後期の歴史の產物だ

ったのである。

この過程は、もう一つの副産物を産み出した。「門下」と呼ばれるユニークな屬吏の階層である。

2 ふたつの「門下」

「門下」という言葉の歴史は戰國時代に遡る。當時の用例では、門番としてまさに門の下にいる人間を指したり、現在も「門下生」というように弟子を意味することもある⁽¹²⁾。また孟嘗君などが召しかかえた食客が「舍人」とか「門下」とか呼ばれている⁽¹³⁾。このような「門下」と郡縣の屬吏としての「門下」はどのような關係があるのだろうか。

漢代、長官の身の回りには「舍人」と呼ばれる私従が見出される。例えば曹參が齊國の丞相から中央の相國となる時、旅の支度を「舍人」に命じた⁽¹⁴⁾。また武帝時代、司馬遷の友人として知られる任安は大將軍衛青の「舍人」として「門下に居り」、外出の供まわりも務めたが、貧乏なため「家監」の命で噛みつき癖のある馬の世話に甘んじなければならなかった⁽¹⁵⁾。このように、「舍人」は官衙の閣内にあつて長官の「家」に屬する私従であり、その中には下僕といったほうがよい者も含まれている。しかし、同じく「門下」にいても、下僕とは扱いの異なる場合もある。前漢文帝時代、賈誼は年十八にして河南郡守に見出され、「門下に置」いてその才を愛された⁽¹⁶⁾。また前章で紹介した景帝時代の蜀郡守文翁は、成都の學官の生徒の優秀な者を閭閻に出入りさせたり、便坐で使ったりしている⁽¹⁷⁾。賈誼もおそらくこのような存在だったと思われる。彼等は屬吏ではなく、かといって任安のように家事にこき使われたのでもなさそうである。こちらはいわば長官の私設秘書のような存在とみてよいだろう。

さらに長官の周圍には、このような下僕や私設秘書に加えて、「客」として扱われる食客もいたことを忘れてはならない。戰國時代の「食客三千人」の遺風は前漢前期にも廣く見られる。武帝の前半期に長らく大農を務めた鄭當時は貴賤となく賓客を好んだことで知られている⁽¹⁸⁾。司馬相如は蜀郡臨邛縣令王吉の「客」としてその地の豪族の注目を浴びた⁽¹⁹⁾。このような「客」の中には、齊の丞相時代の曹參が特に重んじた蓋公のように、政治顧問を務める者もいた⁽²⁰⁾。公孫弘が東閣を開いて尊重し、謀

議に加えたという賓客もこのような顧問格の客人だったのである。特に自分の出身地以外の土地を治める地方長官にとって、地元的事情に明るい上に、學があつて筆も立つ顧問や補佐役——屬吏にはめつたにいなかったらう——は重寶である。後世の幕友のような存在は漢代にも必要とされたに違いない。

このように「閤」の内部には、長官や家族以外にも、ボディーガード兼雜用係、私設秘書、政治顧問など、さまざまな人間がいた。戰國時代の孟嘗君を始め四公子の「門下」に、一流の學者から鷄鳴狗盜の徒に至るまで多様な人間が蟬集したのと同じことが、漢代の官衙についてもいえるのである。⁽¹³⁾「門下に居る」とか「門下に置く」といった表現は、從屬の度合いはともかく、一貫して長官の私的保護を受けることを意味する。その中には長官の補佐役を務める者がいたとしても、彼等は決して屬吏として祿を食んでいたわけではないのである。

ところが前漢後期になると、郡縣の屬吏に「門下」の肩書きを帶びる者が現われる。武帝の末、繡衣使者暴勝之に従つた「門下の諸從事」はその早い例である。⁽¹³⁾宣帝時代の長安の游侠萬章は京兆尹の「門下督」となつてゐる。⁽¹⁴⁾「門下督」は「門下賊曹」と同じく長官のボディーガード。通常の警察業務を擔當する「賊曹」とは異なる。似たような官名でも、「門下」を冠することによって區別されている點に注意しておきたい。⁽¹⁴⁾

このほか「門下」の一員として「議曹」がある。宣帝時代の渤海郡太守龔遂は宮中に召されて帝の下問を受けたが、その應答は豫め「議曹」の王生なる者の入れ知恵で用意した言葉であつた。王生は酔いどれの役立たずとして功曹にいらまされてゐた人物、『史記』滑稽列傳では「文學卒史」とされる。⁽¹⁵⁾「議曹」のメンバーは、前述のように公孫弘によって郡縣に設けられた儒官である文學卒史や掌故だらう。成帝時代にはすでに「議曹」は全國に見られ、郡太守を歴任した朱博は行く先々で、うるさがた揃いの「議曹」を廢止している。⁽¹⁶⁾彼等の職務はもちろん言論をもつて長官を補佐することである。「議曹」は後漢代には「門下議生」⁽¹⁶⁾というように、はっきり「門下」の一員となつてゐる。

さらに後漢代には、望都漢墓壁畫に見られる「門下小史」や、文獻に見える「門下書佐」⁽¹⁶⁾のように、「門下」という以外に

は職掌を示さない書記官も出てくる。長官秘書といったところかもしれないが、官秩はごく下級である。「門下」の内部に、幹部から下級の書記官までのヒエラルキーが形成されていたことがわかる。

前漢後期から現われるこのような「門下」の屬吏のリーダー格が「門下掾」である。宣帝時代、東郡の「門下掾」が古い例である。⁽¹⁴⁾成帝時代の琅邪郡太守朱博は、數百人の弟子を教える大儒であった門下掾の拜禮が氣に入らないと、主簿に命じて拜禮の仕方を教えたという。⁽¹⁵⁾大儒が郡の「門下掾」となる例は兩漢交替期にも見られる。⁽¹⁶⁾また哀帝時代、河南都尉公孫仁は、天水郡清水縣長に赴任する息子の公孫述が年少なのを案じて、門下掾について行かせた。⁽¹⁷⁾南陽郡宛縣の人卓茂は、王莽政權を嫌って故郷に歸り、「門下掾」の祭酒となつて「職吏」となることを肯んじなかつた。⁽¹⁸⁾「職吏」は諸曹で事務をとる吏であらう。「門下掾」は特に忙しい仕事をあてがわれなかつたらしい。

このように、「門下掾」は長官の文教顧問のような名譽職であり、おそらく毎日出勤する必要もなかつただらう。「門下」の「掾」という漠然とした名稱はその現われである。成帝時代の御史大夫張忠は、息子に經典を教えるために孫寶を「屬」として招いたが、孫寶はこれを嫌つて去つた。ところが主簿として招くと、喜んで歸つてきた。當時「高士」は主簿となることを嫌つていたので、孫寶のこの行動は不審に思われたという。⁽¹⁹⁾この事例は、長官の家庭教師として祿を食む屬吏もありえたこと、「高士」はむしろこのような仕事を名譽と見なし、主簿のように書類書きに追われる仕事（といつても諸曹の最高幹部である）を卑しんだことを示している。郡縣の「門下掾」たちもこのような「高士」や「大儒」だったに違いない。

このように、前漢後期に現われる「門下」の屬吏は、諸曹の實務には関わらず、長官のボディガードや秘書、顧問を務める側近グループである。彼等の多くは、儒學の教養に基づいた言論や人徳で長官を補佐することを任務と心得る文化人であり、その中でも「高士」や「大儒」は長官に「師友」として重んぜられる。⁽²⁰⁾彼等は本來の要職である功曹などとともに、補佐官や顧問として側近を務める長官官房を形成するのである。⁽²¹⁾「門下」とは、このような長官官房のスタッフを、諸曹で實務に携わる「職吏」と區別するための、名譽ある稱號にはかならない。望都漢墓壁畫において、「門下功曹」以下「門下小史」までの

グループが諸曹の一員である「賊曹」や「仁恕掾」よりも墓主に近いところ、まさに「閤」の門下に描かれていたことは、官衙における「門下」の屬吏の位置附けを明確に示していたのである。

このような長官官房としての「門下」は、前節で述べたような、前漢後期に進められた地方行政機構の整備にもなっており、新たな機構であった。その契機となったのは、郡縣に學問をもつて仕える儒官が設けられたことであろう。⁽¹⁹⁾ 學問的教養と立派な人格を持つことを條件とした新たな屬吏が産み出されたのである。これはそれまでの、一種の職能者としての屬吏、極端に言えば書類作りの勞働力に過ぎなかった屬吏とは決定的に異なる。儒學の浸透が、このような末端の屬吏の質的改善をもたらしたかどうかはともかく、少なくとも郡縣の官衙に新たなエリートの階層を産み出したことは間違いない。

このような新しい官名としての「門下」は、従来の「門下」の一部とある程度系譜的關係を持っている。すなわち、地方行政が機構的に整備され、儒教イデオロギーの枠がはめられていくともなつて、長官の私従が果たしていたさまざまな役割の一部が、官僚機構によって果たされるようになったのである。長官官房としての「門下」の役割が、純粹な政務補佐だけでなく、長官の身邊警護をも含んでいることは、新たな「門下」が長官の「家」の世界での「門下」を雛形として形成され、名附けられたことを示している。ただし、これは従来の「門下」が官僚化することによって實現したとは言い切れない。私設秘書や「舍人」は長官の身の回りで常に必要とされ續けるに違いない。長官の私従としての「門下」と、長官の私的空間から排除されていた屬吏の間に、屬吏でありながら「門下」を稱するグループが現われたのである。

新たな「門下」は郡縣の誇り高い文化的エリートの集團である。彼等が「門下」を名乗るからといって、そのまま彼等を長官の私従とみなすことはできない。⁽²⁰⁾ 本來私従として主人の身近に仕えることを意味した「門下」という言葉は、側近として仕えることを媒介に、エリートの官名に轉化したのである。これは、本來私従を意味した「舍人」が、側近という意味で官名化し、例えば「中書舍人」となるのと同様である。このような新たなエリートとしての「門下」の形成過程で、屬吏幹部層が、

「閤」内では長官から官僚的ヒエラルキーを離れて禮遇されるべきだという考えかたも産み出されただろう。

このように「門下」という言葉は、圖式的に分けてしまえば、長官の「家」の世界である「閤」内では長官の私従を、官僚的ヒエラルキーの世界である「閤」外では長官側近のエリート官僚を指している。このようなふたつの「門下」の成り立つ場こそ、前章まで分析してきた漢代の官衙にほかならない。諸曹の機構と「門下」の漸進的形成は、前漢後期における地方行政機構の整備を物語る。しかしこの過程は、長官の公邸としての官衙の本質を變化させるものではなく、むしろこのような官衙を前提として進んだのである。

では、この過程で長官と「門下」を含む屬吏とはどのような關係で結ばれ、その關係はどのように變化したのだろうか。

3 長官と屬吏のアラベスク

ここまで見てきた地方官衙における諸曹と「門下」の形成は、前漢後期に顯著に進んだように思われる。武帝時代末期の政治的混亂を承けたこの時代、地方行政の背負った課題は、地方における公權力そのものの再建にあった。さらに、漢代、中央・地方を問わず長官には定まった任期がなく、特に地方行政に熱心に取り組んだ宣帝の時代にはむしろ長びく傾向もあった⁽¹⁸⁾。しかも、官僚の出世コースはまだ確立されておらず、郡縣の屬吏から叩き上げた能吏が位九卿に至ることも希ではない。このような歴史的背景のもとで、幾多の有能な郡太守が輩出し、彼等のこらした工夫は後世の模範となった。この流れの中で形成された諸曹と「門下」は、いずれもある時点で法令によって強制されたのではなく、中央の意向を體した長官と、地元採用の屬吏たちとの相互關係から生まれてきたのである。したがって、この時期の郡府における太守と屬吏の關係を具體的に分析することによって、漢代全般にわたる地方行政の基本構造を知る手掛かりが得られるのではないだろうか。この觀點から、太守と屬吏の様々な動きを追ってみよう。

前漢隨一の循吏として、宣帝時代の黃霸が有名である。彼は潁川郡太守として赴任すると、良吏を選択して上意下達に努め、管轄内の細かいことまでよく把握して「神明」と稱されるに至る。「教化を行なって後に誅罰し」、よく人心を得て「天下第一」の治績をあげた⁽¹⁹⁾。このような柔和なタイプには、前述の韓延壽も加えていいだろう。こちらは淮陽、潁川、東郡の太守か

ら左馮翊を歴任したが、至る所で教化に努め、賢士を禮遇して謀議に加え、諫争を納れた。「下吏を接待するに、恩施甚だ厚くして約誓明らか」、彼に背いた門下掾は自殺して詫びようとしたほどであった。左馮翊の時、兄弟の相續争いの訴訟を見て傳舎に閉じ籠もり、「閤を閉ざして過を思った」ことでも知られる⁽¹⁸⁾。

このようなタイプの太守が上計による勤務評價で上位を占めると、各地の太守が毎年の勤務評價を少しでも上げようと、一齊にそれに倣うようになる。とりわけ新任の太守は、新たに赴任してから一年間は「守太守事」、つまり「太守心得」であり、一年たつて適任と判断されてはじめて正式に太守となる⁽¹⁹⁾。彼等は、始めの一年で少なくとも前任者や他郡に見劣りのしない治績をあげなければならない。彼等が各地の成功例を率先して取り入れるには、それなりの事情があつたのである⁽²⁰⁾。こうして、諸曹の統一的名稱や、儒官などを「門下」と稱するしきたりが、どの郡にも見られるようになるには、案外短い時間しかかからなかつたかもしれない。

しかし、黃霸や韓延壽のまねがいつも成功するとは限らない。哀帝時代の潁川郡太守嚴詡は孝行をもって官となつた人物、掾史を師友と呼び、何か過ちがあるとすぐに閤を閉ざして自らを責めるといふ、やはり典型的な儒吏であつたが、韓延壽と違つて治績が一向にあがらず、郡は亂れていった。郡を去る時、彼は見送りに集まつた官屬に向かつて哭し、こう言つた。「柔弱な自分の次には剛猛な太守が来るに違いない。諸君の中には非業の死を遂げる者も出よう。それを弔っているのだ」と⁽²¹⁾。これはただの脅しではなかつた。

元帝時代の安定郡太守王尊は赴任早々に、屬吏の能力・素行を簡條書にして報告させ、「一郡の錢ことごとく輔の家に入る」とまで言われた五官掾張輔を獄死させている⁽²²⁾。新任の太守が厳しい綱紀肅正を行なえば、不正を働いてきた屬吏が處刑されることも十分ありえた。また宣帝時代の酷吏嚴延年は、涿郡太守として赴任早々に豪族彈壓に乗り出したが、掾の趙繡には新太守がどこまでやる氣かわからない。そこで彼は豪族に對する告發狀を二通用意し、罪狀の軽い方から報告して様子を見ようとした。嚴延年はこれを見破つて即座に趙繡を投獄、處刑したので、屬吏は震えあがつて太守に従つたといふ⁽²³⁾。こちらは職務に

忠實でない屬吏の肅清である。このように、太守には屬吏の任免だけでなく、運用によっては屬吏の生殺與奪權ともなり得る強い權力があったのである。

また、太守が右腕と頼む屬吏幹部に、常に儒吏を配置したわけではない。やはり宣帝時代の尹翁歸は、右扶風となるや、「廉平疾姦の吏を選用してもって右職となし、接待するに禮をもつてし、好惡ともにこれを同じうす。その翁歸に負くや、罰もまた必ず行なう」という、公平だがこわい上司であった。⁽¹⁰⁴⁾

齊の地は萬事ゆるゆるともったいぶる土地柄。成帝時代の琅邪郡太守朱博が赴任してみると、重要な部局の掾史は皆な病氣缺勤している。聞けば、慣例として新任の太守が存問してからでないと職務に就かないのだという。怒った朱博は病缺の掾史を下着のまま官衙から追い出し、諸曹の史や書佐、屬縣の幹部から適當な者を選んで昇進させた。また議曹を廢止したり、大儒であった門下掾を侮辱するなど、それまでの官衙の慣習をひっくり返してしまった。朱博は亭長を振り出しに出世した典型的な叩き上げの實務官僚、口先ばかりの儒者が大嫌いだだったのである。しかしよく下の者を「操持」して治績をあげ、大いに風俗を改めたため、左馮翊に榮轉することができた。⁽¹⁰⁵⁾ 屬吏の人事權を握る新太守は、その氣になれば幹部の總入れ替えも可能だったのである。

このような循吏や廉吏、酷吏にも一貫しているのは、部下の賞罰を公平にし、自分の方針を末端の屬吏にまで徹底して、それぞれ職分を盡させることである。前述のように末端の屬吏は、上司の目を盗んで賄賂や公金横領に手を染めることも多い。太守にとって、彼等に手柄を立てさせること以上に、不正を行なわせないことが大事である。⁽¹⁰⁶⁾ そのために必要とあらば、屬吏の拔擢や更迭はもちろん、處刑も辭さないだけの權力が與えられていたのである。屬吏を出し抜いても、屬吏に出し抜かれてはならない。太守には、このような韓非子流の統治技術が要求されていた。屬吏幹部を禮遇することと威壓することとは、このテクニクの両面であった。循吏か酷吏かの區別は、その現われ方の相違に過ぎない。屬吏は常に「操持」の客體である。官衙における長官と屬吏のこのような關係は、君主と臣下の關係に近かったともいえよう。⁽¹⁰⁷⁾

長官の補佐役をもって任ずる「門下」も例外ではない。如何に長官の禮遇を受けるにせよ、彼等に許されたのは進言や諫言の範圍にとどまる。長官と決定的に對立した場合、處罰を覺悟の上で諫め續けるか、さもなければ「病を稱して」官を去るしかない。⁽¹⁰⁸⁾

このような權力と統治技術をもった太守の交替は、屬吏にとって大きな試練である。特に舊太守の側近グループの去就は微妙である。たとえ新太守が前任者の方針を踏襲するとしても、彼等の地位が新太守によって安堵されるまでは、事實上レイオフ状態に置かれるといつてもよい。琅邪郡において、右曹の掾史が病缺届けを出して新太守の存問を待ったのは、必ずしも尊大な行動ではなく、謹慎の意思表示だったのである。

しかし、太守として官僚の一員、地元出身で中央の大官になった人物や、中央にコネのある有力者がいた場合は、無用の刺激は禁物であつたろう。⁽¹⁰⁹⁾ 太守の權力には、上計や刺史による監察以外にも、有形無形の制約があつたことは確かである。普通は屬吏に焼きを入れ、一罰百戒を狙つて一部の幹部を更迭する程度で済んだに違いない。⁽¹¹⁰⁾ 太守との折り合いが大きく作用する幹部クラスとは異なり、大多數の屬吏はこつこつと勤め上げ、「功勞を積む」ことで昇進することができた。⁽¹¹¹⁾ また官僚志願者や屬吏経験者にとつて、太守の交代は官途につくチャンスである。縣の屬吏だった者が、引き抜かれて郡府に仕えることも希ではない。⁽¹¹²⁾ さらに少なくとも前漢の間は、屬吏が「廉を察せられて」昇進を繰り返し、いつかは出身郡の枠を越えて出世するといふ、淡い夢を持つこともできたのである。⁽¹¹³⁾

また、地方の儒者たちにとって、前漢の賢良・文學の推舉や後漢における孝廉科の人材登用は、中央に出るチャンスであつた。孝廉科は、郡太守が人口二十萬人に一人の割合で、學問や德行のある人材を朝廷に推薦し、朝廷はこれを郎官として能力を試したうえで、地方の長官や中央官廳の官吏に任命する制度である。太守がこの人選を誤れば、「選舉不實」として連帶責任を負うはめになる。⁽¹¹⁴⁾ このような孝廉科の人材登用は、後漢代には次第にエリートコース化し、叩き上げ官僚を排除していく。孝廉の人選の責任者である太守たちが儒生や名士を顧問格で「門下」に迎えることは、次第に文化政策以上の意味を帯びてい

くだろう。儒生にしてみれば、太守の知遇を得ること、あるいは少なくとも自己の徳行が郡府に知られることが必要である。こうして郡府の「門下」は肥大し、地方名士のサロン化して行く。もちろん「門下」は、朱博のような太守の下では文化的飾り物となってしまうこともあり得る。また、孝廉に挙げられる人材が常に郡縣の「門下」出身だったわけでもない。しかし、中央における孝廉の重視と郡縣における「門下」の出現は、ともに漢代官僚機構の中での儒學の勝利を物語る事象として呼應しているのである。

こうして、新太守は屬吏の恐れと期待、さらに地元の利害關係者のさまざまな思惑を一身に集めて赴任する。その際には、多額の官費を費やして太守の居住空間の調度が整えられた。前述の黃霸が長吏の人事異動を好まなかったのは、そのたびに費用がかさむ上に横領を企む輩も現われて、結局民が苦しむ、という理由からであった。⁽¹⁰⁾後漢代の魏郡では、太守が交代するたびに、調度の新調に巨額の官費を費やしていた。⁽¹¹⁾しかしその反面、前漢後期から後漢代にかけて、官舎に妻子を入れないとか、粗末な衣食に甘んずることが長官の廉潔な行ないの代表となる。⁽¹²⁾とはいえ、節儉につとめて「儲侍は法に非ざれば悉く留むるところなし」という廉潔な長官は、珍しい存在となっていたことも事實である。官衙はこうして、さながら長官の宮殿となっていたのである。

このような官衙において、長官と屬吏を結び付け、あるいは切り離す空間的裝置が「閤」である。すでに指摘したように、韓延壽や呉祐が「閤」を閉ざしたのは、屬吏に對する謹慎や反省の意思表示であった。⁽¹³⁾後漢の河内郡懷縣令の胡紹は、倉から俸米を受け取ると、わざわざ「閤」の外でこれを「ほしいい」にした。⁽¹⁴⁾臨戰體制でいくぞという無言のアピールであろう。このように「閤」の開閉や長官の出入りは、それだけで屬吏と地元民への意思表示となり得た。

しかし「閤」の役割は教化だけではない。再び朱博の例。彼が琅邪郡から左馮翊に榮轉した時のこと、功曹が「大姓」から賄賂を受けて守尉の人事を行なったことがわかった。⁽¹⁵⁾朱博はこの功曹を召すと「閤」を閉ざし、責め立ててすべての收賄を白状させ、二度と不正を行なわせなかった。「閤」内は禮遇の場から一轉して裁きの庭と化す。また後漢光武帝時代、會稽郡の

主簿鍾離意は吳縣の獄吏の處罰をめぐって行太守事宰量を諫めたが、宰量は逆に彼を縛りあげて投獄しようとした。功曹彭脩が「閤」をこじ開けて入って諫めたので、鍾離意は事なきを得た。同様な例は後漢末にも見られる。⁽¹²⁾長官と對立して「閤」内に閉じ込められた屬吏は、しばしば命がけの事態に直面したのである。

禮敎主義が行き渡ったかに見える後漢代にあつても、一旦「閤」を閉ざして長官の強權が振るわれれば、もはや「門下」たちも出る幕はない。長官への報告に赴いたり、書類の決濟を待ったりで日常的に「閤」をくぐる「門下」以下の屬吏の前に、「閤」は突如權力の壁として立ちはだかることもある。⁽¹³⁾「閤」は、名譽の門であるとともに恐怖の門でもある。「閤」の動靜は、さまざまな思惑を秘めて常に注目され續けた。長官と屬吏の織り成すアラベスクには、どこかに必ずこのような「閤」が織り込まれているに違いない。

おわりに

以上三章にわたって漢代の官衙とそこに展開する官僚のありさまを論じてきた。論點をまとめてみよう。

和林格爾漢墓壁畫に描かれた護烏桓校尉府の分析から、漢代の官衙は屬吏の仕事場である諸曹の區畫を手前に、中門を挟んで堂と廷の區畫があり、さらにその奥に長官のプライベートな區畫がある、という三段構えになっていたことがわかる。大別すれば、中門の奥は長官とその家族が奴婢や私従にかしづかれて暮らす私的な空間、外は屬吏たちの公的空間である。倉庫・監獄・廩舎・廚房などの附屬施設はその周圍に設けられる。これら全體を垣牆が圍んでおり、官衙の内部は回廊や建物によって迷路のように複雑に區切られていた。官衙の周圍には屬吏たちの官舎が設けられ、彼等は日常はそこで暮らしている。このような官衙は、上は丞相府から下は縣寺、傳舎に至るまで、ほとんど普遍的に見出されるだけでなく、兩漢を通じて基本的な大きな變化はない。建築として見れば、官衙は當時の大邸宅の代表である列侯や公主などの「第」と非常によく似ている。漢

代の官衙は、第一義的には長官の公邸であり、これに附屬施設を加えた全體が役所として機能していたのである。

このような官衙の空間的性格は、公私の接点ともいえる中門の「閤」に集約されている。⁽¹⁴⁾「閤」は本來門の脇の潛り戸を指すが、これは單なる通用門ではなく、主人に親しい者を通す名譽ある門であつた。屬吏は幹部でも、許しを得なければ「閤」内に立ち入ることができない。この名譽を與えられた屬吏は、長官から官僚的ヒエラルキーを離れて禮遇される。「閤」の外は官僚的ヒエラルキーの世界であるのに對して、「閤」の内部は長官の「家」の世界であつた。このような官衙における長官と屬吏の關係は、家における主人と臣妾の關係に類比される。⁽¹⁵⁾屬吏の忠誠は、まずその長官に向けられるべきであつた。漢代の官衙は、空間的にも、また人間關係の面でも、長官を主人とする一種のミニ朝廷だつたといえる。漢代の官僚機構は、このようなミニ朝廷の累層として捉えられるのである。

ところで官衙に働く屬吏たちは、最低限の法律や文字の知識を持っているだけの職能的な存在であり、待遇も恵まれなかつたから、賄賂や横領などの不正行爲が後を斷たなかつた。前漢後期には、彼等の質的改善が地方行政の大きな課題となる。この過程で、屬吏層の待遇の改善とともに官衙の機構的整備も進められた。その結果、官衙の「閤」の外に居並ぶ部局名が次第に共通化し、どこの役所でも似たような部局名が見出されるようになったと思われる。屬吏層の質的改善のもう一つの柱となつたのが儒學の浸透による教化である。この動きは、郡縣に行政實務を離れて、學問や人格をもつて長官に仕える新たな屬吏の階層を産み出した。彼等は言論や人格で長官を補佐する側近となり、功曹・主簿などの要職とともに長官官房を形成する。この長官官房が「門下」である。「門下」は本來「閤」の内部で長官の身の回りに仕える私從を意味するが、これが側近という意味で官名化し、長官の側近を務めるエリートの稱號となつたのである。「門下」の形成過程には、當時の官衙の空間構造が強く反映している。

巨視的に見れば、兩漢の地方行政は、「門下」の形成に代表されるように、前漢後期を畫期として次第に禮敎主義的色調を強めていく。しかし長官には屬吏の任免權だけでなく、事實上生殺與奪權として機能する強い權力があつた。長官にはこの權

力を巧妙に使って屬吏を操る統治技術が要求されていた。官衙における禮敎主義的協調の裏に、このような權力者である長官と、地元の利益や自分たちの既得權益を守ろうとする屬吏の思惑がせめぎあう、緊張した状態があった。強大な權力を持ったよそ者が中央から任命され、任期も定まらないという基本構造が變らない限り、「閥」を挟んでにらみ合う長官と屬吏の潜在的緊張關係も變らない。現任の長官に忠節を盡すという建て前とはうらはらに、屬吏たちは自分を取り立ててくれたり、目をかけてくれた長官にのみ、終生「故吏」として忠誠心を懷き續ける^(四)。このユニークな心情は、このような官衙の實態の中に位置附けてみる時、より明瞭に理解できよう。

時に苛酷、貪欲、運がよければ溫厚、廉潔。次々に赴任してくる長官の個性は様々である。上計や州刺史による監察制度が完全に機能したとしても、長官の交代が早まるだけのこと、新たな長官が望ましい人物であるとは限らない。屬吏を始め地元

の民は長官の個性に振り回され續けたのである。しかし後漢の桓帝時代になると、地方官衙の構造に變化の兆しが現われる。建和元年（後一四七年）四月壬辰の詔敕で、州郡で「長吏を迫脅驅逐」することを禁ずるとともに、刺史・二千石に長吏の汚職摘發の強化を命じている。^(五)時に外戚梁冀が專權を振るい、慢性化する苛斂誅求の下で、各地に反亂が相次いでいた。この情

勢の中で、不正蓄財に明け暮れる長吏を實力で追い出そうとする動きが全國で活發になっていたのである。この動きは、飢民による官衙の襲撃——であれば軍事的な鎮壓の對象にしなければならない——とは質を異にし、おそらく地方の有力者や屬吏層も絡んだ根の深いものではなかったか。これは、それまで赴任してくる長吏を黙って受け入れざるを得なかった郡縣において、ついに始まった異議申し立てであり、漢王朝の地方行政制度の根幹を否定することにもつながる。黨錮事件のはるか以前に、すでに地方において「漢末のレジスタンス運動」^(六)の裾野が形成されつつあった。やがて後漢の崩壊を経て、地方行政の枠組は郡から州へと重點を移し、郡という官衙は有名無實化していくだろう。和林格爾漢墓や望都漢墓の壁畫は、實は崩壊し始めていた地方官衙の思い出だったのである。

注

- (1) 大庭脩「漢代官吏の勤務と休暇」(『秦漢法制史の研究』所收 創文社一九八二) 参照。
- (2) 最初に本稿で参考にした和林格爾漢墓關係の文獻を列挙しておく。
 內蒙古博物館「和林格爾發現一座重要的東漢壁畫墓」
 吳榮曾「和林格爾漢墓壁畫中反映的東漢社會生活」 文物一九七四—
 羅哲文「和林格爾漢墓壁畫中所見的一些古建築」 同
 黃盛璋「和林格爾漢墓壁畫與歷史地理問題」 同
 「再論和林格爾漢墓壁畫的地理與年代問題」 同
 金維諾「和林格爾東漢壁畫墓年代的探索」 考古與文物一九八二—
 內蒙古博物館「和林格爾漢墓壁畫」 文物一九七四—
 蓋山林「和林格爾漢墓壁畫」 內蒙古人民出版社一九七八
 (書名が紛らわしいがA5版の概説書で文物出版社版とは別)
 夏超雄「和林格爾漢墓壁畫莊園圖和屬吏圖探討」
 李逸友「和林格爾壁畫所反映的東漢定襄郡武成縣的地望」 北京大學學報一九八〇—二
 (3) 前掲金維諾論文。『後漢書』順帝紀、永和五年(後一四〇)九月に「丁亥、徙西河郡居離石、上郡居夏陽、朔方居五原。(注、西河本都平定縣、至此徙於離石)」とある。
- (4) 漢代の畫像に見える廚房については田中淡「中国古代畫像の割烹と飲食」(『論集 東アジアの食文化』所收 平凡社 一九八四) 参照。
- (5) この語は『後漢書』列傳六九儒林傳上に「順帝感翟酺之言、乃更修黌宇、凡所造構二百四十房、千八百五十室。(注) 說文曰、黌、學也。黌與橫同。」とあるのに基づく。ただし今本說文に黌字はない。
- (6) 車馬行列の畫像については林巳奈夫「後漢時代の車馬行列」(『東方學報』京都第三七冊 一九六六) 参照。

漢代の官衙と屬吏について

- (7) 俞偉超「東漢佛教圖像考」『文物』一九八〇—五、のち同氏『先秦兩漢考古學論集』(文物出版社 一九八五) 所收。
- (8) 護烏桓校尉については、『後漢書』列傳八〇烏桓傳によれば「(建武二五年) 於是始復置校尉於上谷寧城、開營府、并領鮮卑、賞賜賁子、歲時互市焉。」とあり、光武帝時代には「護烏桓校尉一人、比二千石。本注曰、主烏桓胡。(注) 應劭漢官曰、擁節。長史一人、司馬二人、皆六百石」とある。
- (9) 前注に見える「互市」と「賁子」のためであろう。
- (10) 『漢書』卷五二竇嬰傳「陳廊廡下」注に「師古曰、廊、堂下周屋也。廡、門屋也。」とあり、廡は本來堂を圍む回廊を指すが、これが幾つかの區畫に分かれていたと考えれば矛盾はない。『漢書』卷七六張敞傳に見える廣川王の殿屋の「重轅」の注に「蘇林曰、轅、椽也。重轅、重勢中。師古曰、重勢、即今之廊舍也。一邊虛爲兩夏者也。」とある。回廊の建築は、片側が壁、片側が吹き放しになっていたようであり、寧城圖の回廊もそのように見える。
- (11) ここにいう「營」とは、注(8)に引いた『後漢書』烏桓傳に見える「開營府」の「營」にあたる。「營曹」は文獻に見えないが、「營門」については『後漢書』列傳七十文苑下、禰衡傳に曹操の「營門」の用例がある。
- (12) 渡部武「漢代の畫像に見える市」『東海史學』一八号、一九八三。
- (13) 模本によれば、この右上に「……食大倉」という題記が見える。『圖版』の解説ではこれを「□□□穀倉」と讀んでおり、食い違いがある。いずれにせよ、この題記は一連の護烏桓校尉府の圖の總タイトルだったと考えられる。後で觸れる上郡屬國都尉府・西河郡府、繁陽縣寺の圖の題記も「……食大倉」であるから、護烏桓校尉府についてもこのような題記があっても不思議ではない。後述の望都一號漢墓壁畫にも同様の題記があり、やはり壁畫の總タイトルである。「食大倉」という表現については佐伯有清「食大倉考——德興里高句麗壁畫古墳

の墓誌に關連して——」(『日本常民文化紀要』第三輯 一九八七)に多数の用例が挙げられている。

- (14) この題記は模本のみに見え、カラー圖版ではすでに剝落している。壁畫の現狀が思いやられる。「莫府大郎」はもちろん「幕府大郎」の省略である。

- (15) 衛立の前に座る墓主の畫像は他の漢代壁畫墓にも見られる。李文信「遼陽發現的三座壁畫古墓」(『文物參考資料』一九五五—五) 參照。また屋根の上の同様の飾りは同じく遼陽北園の壁畫に見える。李文信「遼陽北園畫壁古墓記略」(『國立瀋陽博物院籌備委員會彙刊』第一期 一九四七) 參照。

- (16) 『漢書』卷七七何並傳「拔刀劍其建鼓」注に「師古曰、……建鼓、一名植鼓。建、立也。謂植木而旁懸鼓焉。縣有此鼓者、所以召集號令、爲開閉之時。」とある。

- (17) 通路は墨色でぼんやりした描き方になっているが、實際には磚が敷いてあったと思われる。明確な事例は沂南畫像石墓の前室東壁の横額に刻されたカギ形の建物の前に見られる。南京博物院等編『沂南畫像石墓發掘報告』(新華書店 一九五六) 圖版28參照。

- (18) 人物の地位を衣服の色で描き分けた壁畫として注(15)に引いた遼陽北園の壁畫墓が挙げられる。大まかに分ければ、「宴飲圖」の主人と賓客が青袍、侍者が黒褐色の袍。その他「小府史」、「倉廩圖」の倉吏がやはり黒褐色の袍を着ている。また「車騎圖」の從騎等は赤色の短衣である。和林格爾漢墓壁畫では文吏と武吏の描き分けははっきりしないように思われる。文獻史料では、大體文吏が黒、武吏が赤、という色分けになっていたようである。『論衡』商蟲篇には、穀物を食い荒らす害虫の頭が赤で身が黒なら武官が、頭が黒で身が赤なら文官が、悪事を働いているのだとする「変復家」の説が見えるし、同じく謝短篇には文吏(刀筆の吏)が黒衣であったとされる。前漢代長安の恵少年は、くじを引いて黒丸を引いた者は文吏を、赤丸を引いた者は武吏を殺すことにしたという(『漢書』卷九〇酷吏尹賞傳)。文官たちは裾

を引きずるような長い袍を好んだらしく、『續漢書』輿服志下に「今下至賤更小史、皆通制袍・單衣・卑緣領袖中衣、爲朝服云。」とある。武官は職掌柄長い袍を着るわけにはいかず、短めだったらしい。蓋寛饒は司馬を拜命するや、門を出ないうちに衣の裾を切つて短くし、その足で兵士の廬室に赴いたという(『漢書』卷七七本傳)。

- (19) 秋山進午「漢代の倉庫について」(『東方學報』京都第四六冊 一九七四) 參照。

- (20) このことは「食大倉」という表現が、注(13)で指摘したように壁畫の總タイトルであることを傍証する。

- (21) 上郡屬國都尉府が土軍に置かれたことは文獻に見えない。黃盛璋氏は前掲注(3)に引いた『後漢書』順帝紀によつて、西河郡とともに上郡郡治が徙されたのにもなつて、屬國都尉府も徙つたのではないかとしている。なお、上下に並べられた離石と土軍の圖は、その間に山や樹木、河川らしいものも描かれており、兩者が山や河川で隔てられていることを表わしている。ちなみに實際の地理で離石は土軍の東北五〇キロ前後にある。ところで、池田雄一「漢代の河南縣城をめぐつて——漢代の地方「都市」について——」(『唐代史研究会報告』Ⅵ「中國都市の歴史的研究」刀水書房 一九八八)は、これらの「都城圖」を用いて漢代の「都市」のありさまを論じている。しかしこれらの「都城圖」の主題は寧城圖と同様、墓主が赴任した官衙であり、それ以外の要素、例えば密集した民家などにはもともと關心をもたない。したがつてこれらの壁畫は、厳密な意味で都市の地圖とみなすことはできないように思う。極端にいえば、ここに描かれた城郭は官衙とその關連施設を描いた壁畫の額縁に過ぎないのである。

- (22) 發掘報告と圖録は次のとおり。
姚鑒「河北望都縣漢墓的墓室結構和壁畫」(『文物參考資料』一九五五 四—一二)

- (23) 北京歷史博物館等「望都漢墓壁畫」(『中國古典藝術出版社』一九五五) 二字めは上半分しか見えない。陳直「望都漢墓壁畫題字通釋」(『考

古「一九六二—三」はこれを「勉勞謝史」と釋讀し、「民衆が小史に感謝して慰勞するようす」としているが、この壁畫はここに描かれな
い墓主との關係において解釋すべきである。「勉勞」という言葉は見
慣れないが、文獻には上司が下僚の忠勤ぶりを稱賛し慰勞するという
意味で「勞勉」なる言葉が用いられる（例えば『漢書』卷七四丙古傳
同卷八三薛宣傳、同卷九三佞幸石顯傳、『後漢書』列傳二景丹傳注
引『東觀漢記』）。「勉勞」も同様の意味だと考えれば、ここに平伏す
る人物は長吏である墓主に慰勞されて感謝していると解釋するのが自
然である。

- (24) 侍閤については『續漢書』輿服志上、公卿から三百石の縣長に至るま
での車馬行列の規定の中に、「鈴下・侍閤・門蘭部署・街里走卒、皆
有程品、多少隨所典領。」と見えている。職掌や官秩は判らないが、
『後漢書』章帝紀、建初七年九月に「己酉、進幸鄴、勞饗魏郡太守已
下、至于三老・門蘭・走卒、賜錢各有差。」とあり、侍閤と併記され
る門蘭などが官吏の最下層に位置することは確かである。おそらく侍
閤も同程度の下端だろう。また『後漢書』列傳六七、酷吏周紆傳注
に引く『漢官儀』に「鈴下・侍閤・辟車、此皆以名自定者也」とあり、
官名どおりの職掌だったようである。なお、「鈴下」については注
(133) 参照。

- (25) 甘肅省文物隊等『嘉峪關壁畫墓發掘報告』（文物出版社 一九八五）
参照。

- (26) 林巳奈夫編『漢代の文物』（京都大學人文科學研究所 一九七六）四
建物（四）建物の配置参照。また、墓を建物と見なす風習は前漢代か
らずで見られる。町田章「華北地方における漢墓の構造」（『東方學
報』京都第四九冊 一九七七）参照。吳曾德・蕭元達「就大型漢代畫
象石墓的形制論『漢制』」（『中原文物』一九八五—三）は、この傾向を
墓室の「第宅化」ととらえている。

- (27) 後掲注（61）引『後漢書』呂布傳参照。

- (28) 河南省唐河縣で、王莽の天鳳五年（後一八）の年紀を持つ「鬱平大尹

漢代の官衙と屬吏について

馮君孺人」墓が發掘されている。墓室は前・中・後の三室と、前室の
兩側の耳室、中・後室を圍む回廊狀の側室からなる。各室の入り口に
はそれぞれ題記があり、耳室は「鬱平大尹馮君孺人車庫」、中室入り
口は「鬱平大尹馮君孺人大門」、後室入り口は「西方內門」、また側
室入り口は「鬱平大尹馮君孺人感閤」と書かれていた。この場合中室
入り口は「中門」ということになる（考古學報一九八〇—一参照）。
また、江蘇省阜寧では、後漢の元嘉元年（後一五一）の年紀を持つ
「故彭城相繆宇」墓が發掘されている。こちらは前後二室にやはり回
廊狀の側室のつく形だが、後室入り口に刻された數人の官吏の畫像は
「守閤吏」と題されていた。墓の構造は違ふが、墓室の入り口が「閤」
と關係することを示している（文物一九八四—八参照）。

- (29) 武成縣については注（2）に引いた黃盛璋論文、李逸友論文参照。定
襄郡治は善無縣であるから、ここに描かれるのは郡府ではなく長史の
役所としての「長史宮」である。なお、武成縣に長史の役所が置かれ
たことは初見。長史は『續漢書』百官志五に「每郡置太守一人、二千
石、丞一人。郡當邊成者、丞爲長史。」とあり、また注（8）にあげ
たように護烏桓校尉などにも置かれた邊郡の官職である。官秩は六百
石だから、比二千石からは三ランク下になる。

- (30) 漢代の建築の堂と「内」については田中淡「中國建築からみた寢殿造
の源流」（『古代文化』三九卷一—號、一九八七）参照。

- (31) 前引の「上郡屬國都尉西河長史吏馬皆食大倉」圖に見える門扉は
官衙の奥に描かれている。これは中門か「閤」ではなからうか。

- (32) 山東蒼山縣城前村から、後世の墓に再利用された一群の畫象石と題記
が出土した。元嘉元年（後一五一）の紀年を持つ題記は各畫象の墓室
における位置と内容を説明しており、本來の墓室は「堂」「夾室」
「便坐」「廚」に分かれていたらしい。考古一九七五—二、杉本憲司
「畫象石墓の一・二について——畫象石再利用の六朝墓——」（大阪
府立大學社會科學論集一一・一二 一九八一）参照。

- (33) 『漢書』卷一九百官公卿表上

相國・丞相、皆秦官、金印紫綬、掌丞天子助理萬機。秦有左右。高帝即位、置一丞相、十一年更名相國、綠綬。孝惠・高后置左右丞相、文帝二年復置一丞相。有兩長史、秩千石。哀帝元壽二年、更名大司徒。武帝元狩五年初置司直、秩比二千石、掌佐丞相舉不法。

『漢舊儀』(平津館叢書本、以下同じ) 卷上

武帝元狩六年、丞相史員三百八十二人、史二十人秩四百石、少史八十人秩三百石、屬百人秩二百石、屬史百六十二人秩百石。

この数字の合計は合わないが、成帝時代の丞相府の官屬が三百餘人だったという記事もある(『漢書』卷八十四翟方進傳)ので、参考にはなる。その他、斗食の吏も多數いたはずである。

(34) 『續漢書』百官志一 太尉

長史一人、千石。本注曰、署諸曹事。掾史屬二十四人。本注曰、漢舊注、東西曹掾比四百石、餘掾比三百石、屬比二百石……(注、漢書音義曰、正曰掾、副曰屬)。西曹主府史署用、東曹主二千石長吏遷除及軍吏。戶曹主民戶・祠祀・農桑。奏曹主奏議事。辭曹主辭訟事。法曹主郵驛科程事。尉曹主卒徒轉運事。賊曹主盜賊事。決曹主罪法事。兵曹主兵事。金曹主貨幣・鹽・鐵事。倉曹主倉穀事。黃閣主簿錄省衆事。令史及御屬二十三人。本注曰、漢舊注、公令史百石、……御屬主爲公御。閣下令史主閣下威儀事。記室令史主上章表報書記。門令史主府門其餘令史、各典曹文書。

前漢の丞相府・大司徒府については、『漢書』卷七十四丙吉傳に

(丙) 吉馭吏者酒、數通蕩。嘗從吉出、醉馭丞相車上。西曹主吏白欲斥之。……此馭吏邊郡人、習知邊塞發奔命警備事。嘗出、適見驛騎持赤白囊、邊郡發奔命書馳來至。馭吏……遽歸府、見吉白狀。……吉善其言、召東曹案邊長吏、瑣科條其人。

とある。前漢においても東曹は地方官の人事を、西曹は府内の人事を擔當していたことがわかる。また『史記』卷一〇一袁盎傳に

袁盎……乃之丞相舍上謁、求見丞相。丞相良久而見之。盎因跪曰、『願請問。』丞相(申屠嘉)曰、『使君所言公事、之曹與長史掾議。

吾且奏之。即私邪、吾不受私語。』

とある。人事以外のことを擔當する曹もあったとみてよい。さらに『漢書』卷九二游俠陳遵傳に

(陳遵) 並入公府、……又日出醉歸、曹事數廢。(大司徒) 西曹以故事適之。侍曹輒詣寺舍白遵曰、『陳卿今日以某事適。』遵曰、『滿百乃相聞。』故事、有百適者斥。滿百、西曹白請斥。

とあり、『侍曹』の例が知られる。侍曹は『周禮』の府・史・胥・徒の胥にあたる小吏、一種のメッセンジャーであろう。『周禮』天官宰夫、鄭玄注參照。

(35) 『史記』卷五四曹相國世家

(曹) 參代(蕭) 何爲漢相國。……相舍後園近吏舍、吏舍日飲歌呼。從吏惡之、無如之何。乃請參游園中、聞吏醉歌呼、從吏幸相國召按之。

乃反取酒張坐飲、亦歌呼與相應和。

『漢書』卷九三佞幸董賢傳

上以賢難歸、詔令賢妻得通引籍殿中、止賢廬、若吏妻子居官寺舍。

なお、注(1) 大庭論文參照。

(36) 『漢書』卷八三朱博傳

是時御史府吏舍百餘區井水皆竭。又其府中列柏樹、常有野鳥數千棲宿其上。晨去暮來、號曰朝夕鳥。

吏舍の什器類は官費で整えられた。『漢書』卷七七孫寶傳

御史大夫張忠辟(孫) 寶爲屬、欲令授子經、更爲除舍、設備侍(師古曰、謂豫備器物也。侍音文紀反。寶自効去、……後署寶主簿、寶從入舍、祭竈請比鄰。(張) 忠陰察怪之、使所親問寶、『前大夫爲君設除大舍、子自効去者、欲爲高節也。今兩府高士俗不爲主簿。子既爲之、徒舍甚說。何前後不相副也。』

『續漢書』百官志一、司徒條注『應劭曰、……丞相舊位長安時、府有四出門、隨時聽事。明帝本欲依之、迫於太尉・司空、但爲東西門耳。』四方に門を設けるのは前漢の丞相府と後漢の司徒府に特有のことであった。また同注に『荀綽『晉百官表注』曰、漢丞相府門無闌、不設鈴、

(37)

不警鼓。言其深大闊遠、無節限也。」とある。『漢舊儀』卷上には「丞相府官奴傳漏、以起居不擊鼓。官屬吏不朝旦白錄而已。」とある。

(38) 『集韻』平声十五、青の韻に

廳、古者治官處謂之聽事、後語省直曰聽。故加广。

とある。胡三省は『資治通鑑』卷八九、晉建興二年三月條の注で中庭曰聽事。言受事察訟於是。漢・晉皆作「聽事」、六朝以来乃始加「广」作「廳」。

という。「廳」字は六朝以後に用いられるようになったらしい。

(39) 『漢書』卷六十六楊敞傳

明年、昭帝崩。昌邑王徵即位、淫亂。大將軍光與車騎將軍張安世謀欲廢王更立。議既定、使大司農田延年報（丞相楊）敞。敞驚懼、不知所言、汗出洽背、徒唯唯而已。延年起至更衣（師古曰、古者延賓必有更衣之處也）、敞夫人遽從東箱謂敞曰、「此國大事、今大將軍議已定、使九卿來報君侯。君侯不疾應、與大將軍同心、猶與無決、先事誅矣。」延年從更衣還、敞・夫人與延年參語許諾、請奉大將軍教令。遂共廢昌邑王、立宣帝。

(40) 『史記』卷九十六周章傳、及び『漢書』卷四二同傳

及（高）帝欲廢太子、……大臣固爭之、莫能得。……而周章廷爭之彊、上問其說。……上欣然而笑。既罷、呂后側耳於東箱聽（集解、韋昭曰、殿東堂也。師古曰、正寢之東西室皆曰箱、言似箱簾之形）。見周章、爲跪謝曰、「微君、太子幾廢。」

(41) 『初學記』卷二四に引く『蒼頡篇』に「殿、大堂也」とある。上計は、

毎年郡國から中央に戸口・墾田・錢穀出納・刑獄などの帳簿を提出して監査を受けること。郡國から選抜された上計吏が一會計年度（十月から九月）分の計簿を持って上京し、朝廷の歳旦の儀式にも郡國代表として参加する。計簿のチェックと考課は丞相・御史大夫が行なう。

鎌田重雄「郡國の上計」（『秦漢政治制度の研究』日本學術振興會一九六二）参照。この際の丞相府における儀式については『漢書』卷八十九史黃霸傳に

五鳳三年、代丙吉爲丞相。……時京兆尹張敞舍鵲集丞相府、霸以爲神雀、議欲以聞。敞奏霸曰、「竊見丞相請與中二千石・博士雜問郡國上計長吏守丞、爲民興利除害成大化條。其對有耕者讓畔、男女異路、道不拾遺、及學孝子弟貞婦者、爲一輩、先上殿（師古曰、丞相所坐屋也。古者屋之高嚴、通呼爲殿、不必宮中也）。舉而不知其人數者次之、不爲條教者在後叩頭謝。丞相雖口不言、而心欲其爲之也。長吏守丞對時、臣敞舍有鵲雀飛止丞相府屋上、丞相以下見者數百人。邊吏多知鵲雀者。問之皆陽不知。丞相圖議上奏曰、『臣問上計長吏守丞以興化條、皇天報下神雀。』後知從臣敞舍來、乃止。郡國吏竊笑丞相仁厚有知略、徵信奇怪也。……漢家承敞通變、造起律令、所以勸善禁姦、條貫詳備、不可復加。宜令貴臣明飭長吏守丞、『歸告二千石、舉三老・孝弟・力田・孝廉・廉吏、務得其人。郡事皆以義法令檢式、毋得擅爲條教。敢挾詐僞以奸名譽者、必先受戮、以正明好惡。』天子嘉納敞言、召上計吏、使侍中臨飭如敞指意。霸甚慙。

とある。ただしこの時の黄霸の措置は前例がなく、非難されている。ここに見られる上計吏への教飭で特徴的なのは「歸りて二千石に告げよ」という言葉である。これは『續漢書』百官志一、司徒條注に引く『漢舊儀』に、

郡國守（丞）長史上計事竟、遣公出廷、上親問百姓所疾苦。記室掾史一人大音讀敕。畢、遣敕曰、「詔書、『殿下禁吏無苛暴。』丞史歸告二千石、順民所疾苦。……詔書『無節尉養』、至今未變、又更過度、甚不稱。歸告二千石、務省約如法。……」

(42)

とあるように、上計吏の引見の際の決まり文句だったと考えられる。『周礼』地官典人鄭注に「今司徒府中有百官朝會之殿、云天子與丞相舊決大事焉。是外朝之存者與。」という。『續漢書』百官志一司徒條注はこれを『周禮』千室注として引く。同條注はまた

應劭曰……國每有大議、天子車駕親幸其殿。殿西、王侯以下更衣併存。每歲州郡聽採長吏臧否、民所疾苦、還條奏之、是爲之舉謠言者也。頃者、舉謠言者、掾屬令史都會殿上、主者大言某州郡行狀云何、善者同

聲稱之、不善者各爾銜枚。

と傳える。ここに天子が來臨する例である。『後漢書』列傳卷七〇下、文苑趙壹傳には「光和元年、舉郡上計到京師。是時司徒袁逢受計。計吏數百人皆伏庭中、莫敢仰視。」(趙)壹獨長揖而已。」とあり、上計吏の引見も行なわれた。

(43) 『漢書』卷九三佞幸董賢傳

(丞相孔)光雅恭謹、知上欲尊寵賢。及聞賢當來也、光警戒衣冠、出門待、望見賢車、乃卻入。賢至中門、光入閣。既下車、乃出拜謁、送迎甚謹、不敢以賓客均敵之禮。

(44) 『後漢書』靈帝紀、光和三年二月

公府駐駕廡自壞。(公府、三公府也。駐駕、停車處也。廡、廊屋也。『續漢書』五行志一によればこの時「南北三十餘間」が壞れた。

(45) 『漢書儀』卷上

丞相、……據史見禮如師弟子、白錄不拜朝。示不臣也。聽事閣曰黃閣、無鐘鈴。據有事當見者、主簿至曹請、不傳召。據見、脫履。公立席後答拜。百石屬不得白事。當謝者、西曹掾爲謝。部吏二千石初除詣、東曹掾拜部、謁者贊之。

(46) 注(34) 『續漢書』百官志參照。

(47) 『漢書儀』卷上

丞相府……諸吏初除、謁視事、問君侯應閣奴名。白事、以方尺板叩閣、大呼奴名。

(48) 謁見を許さない小吏については前注(45)參照。

(48) 『宋書』卷三九百官志上に「有署頭字宜祿。至漢、丞相府每有所關白、到閣輒傳呼「宜祿」、以此爲常」とある。

(49) 『風俗通』怪神篇、世閒人家多有見赤白光爲變怪者條

謹案、太尉梁國橋玄公祖、爲司徒長史。五月末所、於中門外臥。夜半後、見東壁正白、如開門明。呼問左右、左右莫見。因起自往手按摸之、壁自如故。還牀復見之、心大悸動。

(50) 『說文解字』十二篇上

閣、門旁戶也。从門合聲。(段玉裁注)按漢人所謂閣者、門旁戶也。皆正門之外爲之。

(51) 『漢書』卷五八公孫弘傳

數年至宰相封侯。於是起客館、開東閣、以延賢人、與參謀議。(師古曰、閣者、小門也。東向開之、避當庭門而引賓客、以別於掾史官屬也。……其後李蔡・嚴青翟・趙周・石慶・公孫賀・劉屈氂繼踵爲丞相。自蔡至慶、丞相府客館丘虛而已。至賀・屈氂時、壞以爲馬廄・車庫・奴婢室矣。

なお、『西京雜記』によれば、客館は欽賢館、翹材館、接士館の三つに分かれていたとされる。また『後漢書』列傳卷三六郭躬傳に「初、肅宗時、司隸校尉下邳趙興亦不卹諱忌、每入官舍、輒更繕修館宇、移穿改築、故犯妖禁。」とあるように、官舎の増改築は長官の一存で可能だったようである。

(52) 『漢書』卷六武帝紀、建元六年四月「高園便殿火」條注

師古曰、凡言便殿・便室・便坐者、皆非正大之處、所以就便安也。園者於陵上作之、既有正寢以象平生正殿。又立便殿、爲休息閑宴之處耳。

(53) 『漢書』卷七六尹翁歸傳

徵拜東海太守、過辭廷尉于定國。定國家在東海、欲屬託邑子兩人、令坐後堂待見。定國與翁歸語終日、不敢見其邑子。既去、定國乃謂邑子曰、「此賢將、汝不任事也。又不可干以私。」

(54) 『後漢書』列傳卷二一蘇不韋傳

時(李)嵩爲司隸校尉、收(蘇不韋父)謙詰掠、死獄中。……不韋時年十八、……會嵩遷大司農。時右校獨廡在寺北垣下。不韋與親從兄弟潛入廡中、夜則鑿地、晝則逃伏。如此經月、遂得傍達嵩之寢室、出其牀下。值嵩在廁、因殺其妾并小兒、留書而去。嵩大驚懼、乃布棘於室、以板籍地、一夕九徙、雖家人莫知其處。

(55) 注(35)引『史記』曹相國世家參照。

(56) 『漢書』卷九〇酷吏田延年傳

初、大司農取民牛車三萬兩爲轍、載沙便橋下、送致方上、車直千錢、

延年上簿詐增僦直車二千、凡六千萬、盜取其半。焦・賈兩家告其事、下丞相府。……延年曰、「……何面目入牢獄、……」即閉閣獨居齊舍（師古曰、齊讀曰齋）、……。數日、使者召延年詣廷尉。聞鼓聲（晉灼曰、使者至司農、司農發詔書、故鳴鼓也）、自刎死。國除。

(57) 『漢書』卷九百官公卿表上

衛尉、秦官、掌宮門衛屯兵。有丞。景帝初更名中大夫、後元年復爲衛尉。屬官有公車司馬、衛士、旅賁三令丞（師古曰、『漢官儀』云、公車司馬掌殿司馬門、夜徹宮中。天下上事及闕下凡所徵召、皆總領之。令秩六百石。）。……

(58) 同

郎中令、秦官、掌宮殿掖門戶。有丞。武帝太初元年更名光祿勳。屬官有大夫・郎・謁者、皆秦官。……大夫掌論議、有太中大夫・中大夫・諫大夫、皆無員、多至數十人。武帝元狩五年初置諫大夫、秩比八百石。太初元年更名中大夫爲光祿大夫、秩比二千石。太中大夫秩比千石如故。郎掌守門戶、出充車騎。有議郎・中郎・侍郎・郎中、皆無員、多至千人。議郎・中郎秩比六百石、侍郎比四百石、郎中比三百石。中郎有五官・左・右將、秩皆比二千石。郎中有車・戶・騎三將、秩皆比千石。謁者掌賓贊受事、員七十人、秩比六百石。有僕射、秩比千石。……

(59) 吏民の上書は通常、衛尉の屬官である公車司馬令で受け付けられる。

「闕に詣りて上書する」とは、この手續きを指す。しかし上書が注目されて本人を召し出す時や、賞賜が下される場合は、指定された「掖門」に出頭するよう命じられた。例えば許慎の子許沖は、上書して父の著書『說文解字』を献上することを請うた。これが認められると、彼は「左掖門外」に召され、書物を献上した。さらに一か月後、今度は「朱雀掖門」に召され、詔書とともに布四十四匹を賜わったのである（『說文解字』十五下）。このように、正門と掖門は明確に異なる役割を果たしていた。

(60) 注(28)で紹介した「鬱平大尹馮君孺人」墓の側室入り口が「臧閤」と題されていたことは、「閤」が独立した門を指し得ることを示して

いる。

(61) 『後漢書』列傳卷六五呂布傳

（董）卓以布爲騎都尉、誓爲父子、甚愛信之。……卓又使布守中閤。

(62) 前掲注(45)引『漢書儀』參照。

(63) 同右。

(64) 『宋書』卷一五禮志二

史臣按、……陳蕃爲光祿勳、范滂爲主事、以公儀詣蕃、執板入閤。至坐、蕃不奪滂板、滂投板振衣而去。郭泰責蕃曰、「以階級言之、滂宜有敬。以類數推之、至閤宜省。」……

同じエピソードは『後漢書』列傳卷五七、黨錮范滂傳にも見えるが、閤には觸れられていない。

(65) 『漢書』卷九百官公卿表上

徵侯、金印紫綬、避武帝諱、曰通侯、或曰列侯。……又有家丞・門大夫・庶子。

丞相府に家丞がいたことについては、『漢書』卷六六陳萬年傳に丞相丙吉病。中二千石上謁問疾、遣家丞出謝。謝已皆去、萬年獨留、昏夜乃歸。

とある。この他同卷八一匡衡傳にも見える。また同卷七六趙廣漢傳に地節三年七月中、丞相傳婢有過、自殺死。（京兆尹趙）廣漢聞之、疑丞相夫人妒殺之府舍。……遂自將吏卒突入丞相府、召其夫人、跪庭下受辭、收奴婢十餘人去、責以殺婢事。丞相魏相上書自陳、「妻實不殺婢。……願下明使者、治廣漢所驗臣相家事。」事下廷尉治、實丞相自以過譴答傳婢、出至外弟乃死、不如廣漢言。

とある。丞相夫妻に仕える奴婢は、丞相みずから鞭打つべき存在であった。奴婢の起こした問題は魏相の「家事」なのである。

(66) 『漢書』卷九百官公卿表上

郡守、秦官、掌治其郡、秩二千石。有丞。邊郡又有長史、掌兵馬、秩皆六百石。景帝中二年更名太守。

帝中二年、更名都尉。

關都尉、秦官。農都尉、屬國都尉、皆武帝初置。

『續漢書』百官志五

凡州所監、都爲京都、置尹一人、二千石。丞一人。每郡置太守一人、二千石。丞一人。郡當邊戍者、丞爲長史。王國之相亦如之。每屬國置都尉一人、比二千石、丞一人。本注曰、凡郡國皆掌治民、進賢勸功、決訟檢姦。常以春行所主縣、勸民農桑、振救乏絕。秋冬遣無害吏案訊諸囚、平其罪法、論課殿最。歲盡遣吏上計。并舉孝廉、郡口二十萬舉一人。尉一人、典兵禁、備盜賊。……中興建武六年、省諸郡都尉、并職太守、無都試之役。省關都尉、唯邊郡往往置都尉及屬國都尉、稍有分縣、治民比郡。……

(67) 同前

皆置諸曹掾史。本注曰、諸曹略如公府曹。無東西曹、有功曹史、主選舉功勞。有五官掾、署功曹及諸曹事。其監屬縣、有五部督郵、曹掾一人。正門亭長一人。主記室史、主錄記書、催期會。無令史。閣下及諸曹各有書佐、幹主文書。

(注) 漢官曰、河南尹員吏九百二十七人、十二人(四)百石。諸縣有秩三十五人、官屬掾史五人、四部督郵吏部掾二十六人、案獄仁恕三人、監津渠漕水掾二十五人、百石卒史二百五十人、文學守助掾六十人、書佐五十人、循行二百三十人、幹小史二百三十一人。

會稽郡の屬吏については『後漢書』列傳七一獨行陸續傳に見える。また郡によって部局名がまちまちだったことは、『宋書』百官志下に見える。

諸郡各有舊俗、諸曹名號、往々不同。

(68) 『漢書』卷一九百官公卿表上

縣令・長、秦官、掌治其縣。萬戶以上爲令、秩千石至六百石。減萬戶爲長、秩五百石至三百石。皆有丞・尉、秩四百石至二百石、是爲長吏。百石以下有斗食・佐史之秩、是爲少吏。大率十里一亭、亭有長。十亭一鄉、鄉有三老・有秩・嗇夫・游徼。三老掌教化。嗇夫職聽訟、收賦

稅。游徼徼循禁賊盜。

『續漢書』百官志五

屬官、每縣・邑・道、大者置令一人、千石。其次置長、四百石。小者置長、三百石。侯國之相、秩次亦如之。本注曰、皆掌治民、顯善勸義、禁姦罰惡、理訟平賊、恤民時務、秋冬集課、上計於所屬郡國。……丞各一人。尉大縣二人、小縣一人。本注曰、丞署文書、典知倉獄。尉主盜賊。……各署諸曹掾史。本注曰、諸曹略如郡員、五官爲廷掾、監鄉五部、春夏爲勸農掾、秋冬爲制度掾。

(69)

『後漢書』列傳卷二彭寵傳

遂攻拔薊城、自立爲燕王。……(建武)五年春、寵齋、獨在便室(注、便坐之室、非正室也。——『太平御覽』卷五百引『東觀漢記』は「便坐室」に作る)。蒼頭(『御覽』「奴」に作る)子密等三人、因寵臥寐、共縛著牀、告外吏云、「大王齋禁、皆使吏休。」僞稱寵命教、收縛奴婢、各置一處。又以寵命呼其妻。……於是收金玉衣物、至寵所裝之、被馬六疋、使妻縫兩練囊。昏夜後、解寵手、令作記告城門將軍云、「今遣子密等至子后蘭卿所、速開門出、勿稽留之。」書成、即斬寵及妻頭、置囊中、便持記馳出城、因以詣闕、封爲不義侯。明旦、閣門不開、官屬踰牆而入、見寵屍、驚怖。

光武帝の与えた「不義侯」という封號は、蒼頭が主人を殺したことへの嫌惡感が込められている。

(70)

薊縣は前漢を通じて燕王國あるいは廣陽王國の首都だったが、王莽が即位して前漢の宗室諸王を廢すると、「廣有郡」の「大尹」(太守)治である「伐戎」縣となった。『漢書』卷二八地理志下、廣陽國條參照。

(71)

『漢書』卷八九循吏文翁傳

文翁、廬江舒人也。少好學、通春秋、以郡縣吏察舉。景帝末、爲蜀郡守、仁愛好教化。見蜀地辟陋有蠻夷風、文翁欲誘進之、乃選郡縣小吏開敏有材者張叔等十餘人、親自飭厲、遣詣京師、受業博士、或學律令、減省少府用度、買刀布蜀物、齎計吏以遺博士（師古曰、少府、郡掌財物之府、以供太守者也）。數歲、蜀生皆成就還歸、文翁以爲右職、用次察舉、官有至郡守刺史者。又修起學官於成都市中、招下縣子弟以爲學官弟子。爲除更繇、高者以補郡縣吏、次爲孝弟力田。常選學官僮子、使在便坐受事（師古曰、便坐、別坐、可以視事、非正廷也）。每出行縣、益從學官諸生明經飭行者與俱、使傳教令、出入闔閭（師古曰、闔閭、內中小門也）。縣邑吏民見而榮之、數年、爭欲爲學官弟子、富人至出錢以求之。繇是大化、蜀地學於京師者、比齊魯焉。至武帝時、乃令天下郡國皆立學校官、自文翁爲之始云。

(72) 『史記』卷一二〇汲黯傳

遷爲東海太守。……黯多病、臥闔閭內不出。歲餘、東海大治、稱之。『漢書』卷五〇同傳は「臥闔閭內」を「臥闔內」に作る。意味は同じこと。

(73) 『後漢書』列傳卷三八應奉傳注引『華嶠書』

（應）華仲少給事郡縣……遷東平相。賞罰必信、吏不敢犯。有梓樹生於廳事室上。事後母至孝、衆以爲孝感之應。

(74) 『後漢書』列傳卷一七吳良傳

吳良字大儀、齊國臨淄人也。初爲郡吏（注、東觀漢記曰、良爲郡議曹掾）。歲旦與掾史入賀、門下掾王望舉觴上壽、詔稱太守功德。良於下坐勃然進曰……太守斂容而止。譙龍、轉良爲功曹。恥以言受進、終不肯調。

同卷一九郭曄傳

（建武年間）太守歐陽歙請爲功曹。汝南舊俗、十月饗會、百里內縣皆齎牛酒到府饗飲。時臨饗禮訖、歙教曰、「西部督郵縣延、天資忠貞、稟性公方、……太守敬嘉厥休、牛酒養德。」主簿讀教、戶曹（風俗通過譽篇「戶吏」に作る）引延受賜。曄於下坐愀然前曰、「……案延資

漢代の官衙と屬吏について

性貪邪、外方內員、朋黨構姦、罔上害人、所在荒亂、怨惡並作。……歙色慙動、不知所言。門下掾鄭敬進曰、「君明臣直、功曹言切、明府德也。……」歙意少解、……遂不譴而罷。曄歸府稱病、延亦自退。また、山東諸城縣前涼臺村の後漢墓から發見された畫象石のうち、報告者によつて「講學圖」と名付けられた畫象は、北海郡太守であつた墓主が、太守府の堂で屬縣の上計を受ける儀式を描いたものであるという見解が提出されている。任日新「山東諸城漢墓畫象石」（文物一九八一—一〇）、王恩田「諸城涼臺孫琮畫象石考」（同一九八五—三）参照。

(75) 『後漢書』列傳卷七〇文苑下趙壹傳

（趙）壹以公卿中非（羊）陟無足以託名者、乃日往到門。陟自強許通、尙臥未起、壹逕入上堂、遂前臨之、曰、……因舉聲哭。門下驚、皆奔入滿側。

(76) 『太平御覽』卷二六〇引司馬彪續漢書

宋均爲九江太守、五日一聽事、冬以日中、夏以平旦。『五日一聽事』には前漢宣帝的故事がある。後注（156）『漢書』循吏傳參照。また「三日一聽事」の例もある。後注（180）司馬彪續漢書參照。

(77) 『後漢書』列傳卷三五周景傳

稍遷豫州刺史、河內太守。……每至歲時、延請舉吏、入上後堂、與共宴會。如此數四、乃遣之。

同じことを『風俗通』十反篇は每舉孝廉、請之上堂、家人宴飲、皆令平仰、言笑晏晏、如是三四。とする。對照すれば、後堂が家人の集まる寛いだ場所であることがわかる。

(78) 『漢書』卷六四上、朱買臣傳

入吳界、見其故妻・妻夫治道。買臣駐車、呼令後車載其夫妻、到太守舍、置園中、給食之。居一月、妻自經死。買臣乞其夫錢、令葬。

(79) 『漢書』卷七八蕭育傳

(79) 〔肅育〕後爲茂陵令、會課、育第六。而漆令郭舜殿、見責問。育爲之請、扶風怒曰……及罷出、傳召茂陵令詣後曹（如淳曰、賊曹・決曹皆後曹）、當以職事對（師古曰、忿其爲漆令言、故欲以職事責之）。

(80) 〔閣下の書佐〕は注（67）にあげた郡の屬吏中に見える他、後掲注（183）朱博傳參照。〔直符の史〕は後掲注（162）王尊傳參照。後漢代の例は『後漢書』列傳卷三四張禹傳注に引く『東觀漢記』に見える。居延漢簡で「直符」は倉庫警備の夜間の當直をいう。裘錫圭「漢簡零拾」（文史第二輯 一九八一）參照。

(81) 〔漢書』卷九二游俠陳遵傳
王莽素奇遵材、在位多稱譽者、繇是起爲河南太守。既至官、當遣從史西、召善書吏十人於前、治私書謝京師故人。遵馮几、口占書吏、且省官事、書數百封、親疏各有意。河南大驚。

(82) 〔漢書』卷九〇酷吏嚴延年傳
遷河南太守。……然疾惡泰甚、中傷者多。尤巧爲獄文、善史書。所欲誅殺、奏成於手中、主簿・親近吏不得聞知。奏可論死、奄忽如神。冬月、傳屬縣囚、會論府上、流血數里、河南號曰「屠伯」。

(83) 〔漢書』卷八三薛宣傳
及日至休吏、賊曹掾張扶獨不肯休、坐曹治事。（左馮翊薛）宣出教曰、「蓋禮貴和、人道尚通。日至、吏以令休、所繇來久。曹雖有公職事、家亦望私恩意。掾宜從衆、歸對妻子、……斯亦可矣。」扶慙愧、官屬善之。

(84) 〔漢書』卷八宣帝紀、元康二年
夏五月、詔曰、「……吏務平法、或擅與繇役、飾廚傳、稱過使客。越職臨法、以取名譽。……豈不殆哉。……」

なお、夏至の休暇に關する全國への通達の全文が居延漢簡から發見されている。大庭脩「居延出土の詔書冊」（『秦漢法制史の研究』所收 創文社 一九八二）參照。

なお注（41）に引く『漢舊儀』で「詔書『無飾廚傳』、至今未變。」というのは、この詔敕を踏まえている。

(85) 〔漢書』卷八四翟義傳

年二十出爲南陽都尉。宛令劉立與曲陽侯（王根）爲婚、又素著名州郡、輕義年少。義行太守事、行縣至宛、……義既還、大怒、陽以他事召立至、以主守盜十金、賊殺不辜、部掾夏恢等收縛立、傳送鄧獄。……立家輕騎馳從武關入、語曲陽侯。曲陽侯白成帝、帝以問丞相（翟方進）。方進遣吏敕義出宛令。宛令已出、吏還白狀。方進曰、「小兒未知爲吏也。其意以爲入獄當亂死矣。」

このことは、官僚が政敵を投獄したら判決を待たずに拷問死させるのが常識となっていたことを物語る。一度投獄されたらおしまい、という點で官吏も民衆も變わりはなかったとみてよい。

(86) 〔漢書』卷七六韓延壽傳
〔東郡太守韓〕延壽嘗出、臨上車、騎吏一人後至。敕功曹議罰白。還至府門、門卒當車、頗有所言。延壽止車問之。卒曰、「……今旦明府早駕、久駐未出。騎吏父來至府門、不敢入。騎吏聞之、趨走出調、適會明府登車。以敬父而見罰、得毋虧大化。」……歸舍、召門卒。卒本諸生、聞延壽賢、無因自達、故代卒（師古曰、代人爲卒也）。延壽遂待用之。其納善聽諫、皆此類也。

(87) 〔漢書』卷六六陳咸傳
起家復爲南陽太守。所居以殺伐立威、豪猾吏及大姓犯法、輒論輸府（師古曰、府謂郡之府）、以律程作司空、爲地曰木杵、春不中程、或私解脫鉗鉞、衣服不如法、輒加罪笞。督作劇、不勝痛、自殺死、歲數百千人。

同卷七六尹翁歸傳
豪彊有論罪、輪掌畜官、使斫莖、責以員程、不得取代。不中程、輒笞督、極者至以鉄自剄而死。

(88) 〔後漢書』紀卷三章帝紀、元和三年二月
癸酉、還幸元氏、祠光武・顯宗於縣舍正堂。

(89) 〔風俗通』正失篇、葉令祠條
俗說、孝明帝時、尚書郎河東王喬、遷爲葉令。喬有神術、……後天下

一玉棺於廳事前、令臣吏試入、終不動搖。……

『後漢書』列傳卷七二上、方術王喬傳は「廳事」を「堂」に作る。

(90) 『漢書』卷七六王尊傳

初元中、……轉守槐里、兼行美陽令事。春正月、美陽女子告假子不孝曰、「兄常以我爲妻、妒答我。」尊聞之、遣吏收捕驗問、辭服。……尊於是出坐廷上、取不孝子、縣磔著樹、使騎吏五人張弓射殺之。吏民驚駭。

(91) 『後漢書』列傳卷一五魯恭傳

魯恭字仲康、……拜中牟令。……是歲（建初七年）、嘉禾生恭便坐廷中。（河南尹袁）安因上書言狀、帝異之。

(92) 『漢書』卷八三薛宣傳

（薛）宣子惠亦至二千石。始惠爲彭城令。宣從臨淮遷至陳留、過其縣。橋梁郵亭不修。宣心知惠不能、留彭城數日、案行舍中、處置什器、觀視園菜、終不問惠以吏事。

(93) 『後漢書』列傳卷五四吳祐傳

（吳）祐以光祿四行遷膠東侯相。時濟北戴宏父爲縣丞。宏年十六、從在丞舍。祐每行園、常聞諷誦之音、奇而厚之、亦與爲友。卒成儒宗、知名東夏、官至酒泉太守。

(94) 『史記』卷一二二酷吏張湯傳

張湯者、杜人也。其父爲長安丞。出、湯爲兒守舍。還而鼠盜肉。其父怒笞湯。湯掘窟得盜鼠及餘肉、劾鼠掠治、傳爰書、訊鞠論報、并取鼠與肉、具獄磔堂下。

(95) 『雲夢睡虎地秦墓』（文物出版社 一九八一、以下『報告』と略稱）

二六二～二六五簡
有實官、高其垣墻。它垣屬焉者、獨高其置獨廬及倉茅蓋者。令人勿新舍。非其官人毆、毋敢舍焉。善宿衛、閉門輒靡其旁火、慎守唯敬。有不從令而亡、有敗、失火、有重辜。大衛夫・丞任之。內
毋敢以火入厥府・書府中。吏已收賊、官衛夫及吏、夜更行官、毋火乃閉門戶。令令史循其廷府。節新爲吏舍、毋依厥府・書府。 內史雜

漢代の官衙と屬吏について

(96) 『漢書』卷九〇酷吏尹賞傳

永始・元延間……賞以三輔高第選守長安令、得壹切便宜從事。賞至、修治長安獄、穿地方深各數丈、致令辟爲郭、以大石覆其口、名爲「虎穴」。乃部戶曹掾史、與鄉吏・亭長・里正・父老・伍人、雜舉長安中輕薄少年惡子、……得數百人。賞一朝會長安吏、車數百兩、分行收捕皆効以爲通行飲食羣盜。賞親閱、見十置一、其餘盡以次內虎穴中、百人爲輩、覆以大石。數日壹發視、皆相枕藉死。便與出、處寺門垣東、揭著其姓名、百日後、乃令死者家各自發取其尸。

(97) 『後漢書』列傳卷五四吳祐傳

（膠東相吳）祐政唯仁簡、以身率物。民有爭訴者、輒閉閣自責、然後斷其訟、以道譬之。或身到閭里、重相和解。自是之後、爭隙省息、吏人懷而不欺。喬夫孫性私賦民錢、市衣以進其父。父得而怒曰、「有君如是、何忍欺之。」促歸伏罪。性慙懼、詣閭持衣自首。

(98) 『後漢書』列傳卷三四張禹傳注引『東觀漢記』

（張禹父）歆守（平）卓長。有報父仇賊自出。歆召囚詣閭、曰、「欲自受其辭。」既入、解械飲食、便發遣。遂棄官亡命。
「平」字は『御覽』卷二六六によつて補つた。

(99) 『漢書』卷九〇酷吏嚴延年傳

初、（河南太守嚴）延年母從東海來、欲從延年臘、到雒陽、適見報囚母大驚、便止都亭、不肯入府。延年出至都亭謁母、母閉閣不見。延年免冠頓首閣下。良久母乃見之、因數責延年。……延年服罪、重頓首謝、因自爲母御、歸府舍。

(100) 『漢書』卷七六韓延壽傳

入守左馮翊、滿歲稱職爲眞。……行縣至高陵、民有昆弟相與訟田自言。（韓）延壽大傷之、……是日移病不聽事、因入臥傳舍、閉閣思過。一縣莫知所爲、令丞・喬夫・三老亦皆自繫待罪。於是訟者宗族傳相責讓、此兩昆弟深自悔、皆自髡肉袒謝、願以田相移、終死不敢復爭。延壽大喜、開閣延見、內酒肉與相對飲食……。

(101) 圖は周口地區文化局文物科等「淮陽子莊漢墓發掘簡報」（『中原文物』

一九八三—一)による。その後淮陽縣博物館「淮陽出土西漢三進院落」(同 一九八七—四)が發表されたが、平面圖が裏焼きになっている。この他鄭州南關一五九號墓出土の陶屋(文物一九六〇—八・九「中國陶俑之美」展圖錄參照)も同様な庭院建築である。

- (102) 前掲注(30) 田中淡論文參照。また勞幹氏は『漢晉西陲木簡新考』(中央研究院歷史語言研究所單刊甲二七 一九八五)で和林格爾漢墓の寧城圖を引き、この建築構造を四合院式に先行する單純な形式として「兩進院」式と命名している。ただし氏は、第一章で論じた堂の後ろの部分の存在に氣附いていない。正しくは「三進院」ではなからうか。

- (103) 『文選』卷二九古詩十九首、第二首李善注引『魏王奏事』
出不由里門、面大道者、名曰第。

- (104) 『史記』卷一〇七武安侯列傳
武安(侯田蚡)由此滋驕、治宅甲諸第。……前堂羅鍾鼓、立曲旃。後房婦女以百數。

『漢書』卷八一張禹傳
爲(丞)相六歲、鴻嘉元年、以老病乞骸骨。……(張)禹性習知音聲、內奢淫、身居大第、後堂理絲竹。禹成就弟子尤著者、淮陽彭宣至大司空、沛郡戴崇至少府九卿。……禹心親愛崇、敬宣而疏之。……禹將崇入後堂飲食、婦女相對、……昏夜乃罷。而宣之來也、禹見之於便坐、講論經義、日晏賜食、不過一肉、巨酒相對。宣未嘗得至後堂。

また『漢書』卷九二游俠陳遵傳には
封嘉威侯。……(陳)遵著酒、每大飲、賓客滿堂、飢關門、取客車轄投井中、雖有急、終不得去。嘗有部刺史奏事、過遵、值其方飲、刺史大窮、候遵寤醉時、突入見遵母、叩頭自白當對尚書有期會狀。母乃令從後閣出去。

とある。酒宴の催された堂の奥は家人の居住する場所であり、この刺史のように許しを得ずに入り込むには、「突入」する決心が要ったのである。なお「後閣」は「勝手口」のような裏門。

- (105) 『漢書』卷八六王嘉傳
嘉復奏封事曰、……而駙馬都尉董賢亦起官寺上林中、又爲賢治大第、開門鄉北闕、引王渠灌園池。

同様な第には曲陽侯王根を始めとする王氏五侯の例もある(同書卷九八元后傳)。これほど大きな第でなくても、堂の前の中庭に池を設けて鳥を飼う程度のは廣く見られたと思われる(同書卷八四義傳)。

- (106) 『續漢書』百官志一太尉條注引『漢官儀』に
張衡曰、明帝以爲司馬・司空府已榮、欲更治太尉府。時公趙壹也。西曹掾安衆鄭均、素好名節、以爲「……今府本館陶公主第舍、員職既少、自足相容。」壹表陳之、即見聽許。

とある。後漢の都洛陽が本格的に整備されたのは明帝の時代であり、それ以前にこのような状況があったことは十分に想像できよう。また、甘肅武威磨咀子一八号漢墓出土の「王杖十簡」には、「王杖」を授けられた老人の特権を記した制詔が含まれている。その中のひとつは、「得出入官府郎第、すなわち役所の「郎第」に出入りしてもよい」ということであった。制詔のような法的拘束力を持つ文書で、官府の建物に「郎第」とされていることは重視されてよい。甘肅省博・考古研『武威漢簡』(文物出版社 一九六四)參照。なお最近發表された「王杖詔令冊」では、「郎第」を「節第」に作る。上文に「比於節」とあるのに引きずられての書き誤りである。武威縣博「武威新出土王杖詔令冊」(甘肅省博編『漢簡研究文集』甘肅人民出版社 一九八四)參照。

- (107) 注(88)に引いた『後漢書』章帝紀で、元氏縣の正堂が「縣舍の正堂」とされるのがその一例である。また、和林格爾漢墓壁畫の武成城圖で「武威寺門」の奥に「武成長舍」しか描かれていないことも、この傾向を示している。

- (108) 「大事記」によれば、「喜」は昭王四五年(前二六二)十二月甲午に生まれ、「今元年」(前二四六)十七才で成人、三年八月に「史」と

なっている。翌四年に「十一月、喜□安陸□史」とあるが、これはよくわからない。おそらく三年に「史」の資格を得、四年に安陸縣の「□史」となったのだろう。さらに六年（前二四一）四月には安陸令史、翌年正月甲寅に郡令史となって鄢縣に移り、一二年（前三三五）四月癸丑に「治獄郡」と記される。この書き方では「治獄」が官名かどうかあいまいだが、少なくとも仕事の内容はわかる。「治獄」擔當の令史となつたのではないだろうか。彼はその後、六國統一後の始皇帝三十年（前二二七）ごろに死亡するまで、十八年間はこの職にあつたと思われる。以上、『雲夢睡虎地秦墓』〇〇一—〇四九簡。圖版は線装本『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社 一九七六、以後『圖版』と略稱）「編年記」、釋文は洋装本『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社 一九七八、以後『釋文』と略稱）一—一三頁。

- (109) 郭子直「戰國秦封宗邑瓦書銘文新釋」『古文文字研究』第十四輯 一九八六 參照。

- (110) 『史記』卷五三蕭相國世家

- (111) 『報告』二二四—二二五、『圖版』秦律十八種一五八—一五九、『釋文』九四頁「縣・都官・十二郡免除吏及佐・羣官屬、以十二月朔日免除、盡三月而止之。其有死亡及故有缺者、爲補之、毋須時。置吏律」

- (112) 『報告』二二六—二二七簡、『圖版』秦律十八種一六〇—一六一、『釋文』九五—九六頁「除吏・尉、已除之、乃令視事及遣之。所不當除而敢先見事及相聽以遣之、以律論之。……（略）……置吏律」

- (113) 「封診式」と名附けられた各種報告書の書式集では、令史が検分に赴いて爰書を書くことになっている例が多い。また『報告』二二八簡、『圖版』秦律十八種一六二、『釋文』九四頁に「官嗇夫館不存、令君子毋害者、若令史守官。毋令官佐・史守。置吏律とある。

- (114) 『報告』二五七簡、『圖版』秦律十八種一九〇、『釋文』一〇六頁「除佐、必當壯以上、毋除士五新傳。苑嗇夫不存、縣爲置守、如殿律。

漢代の官衙と屬吏について

内史雜

- (115) 『報告』二五五簡、『圖版』同一八八、『釋文』一〇五頁

有事請毆、必以書、毋口請、毋羈請。 内史雜

- (116) 于豪亮「雲夢秦簡所見職官述略」『文史』第八輯 一九八〇 參照。

- (117) 「語書」と題された、南郡守から各県に発せられた執務心得の教書の末尾『報告』〇六五—〇七簡、『圖版』南郡守騰文書二二—一四、『釋文』二〇頁に、

……故如此者、不可不爲罰。發書、移書曹、曹莫受、以告府。府令曹畫之、其畫最多者、當居曹奏令・丞。令・丞以爲不直、志千里使有籍書之、以爲惡吏。

とある。ここに見える「曹」は、縣の各部局を指すとともに郡の監察官のグループをも指している。

- (118) 嚴耕望氏は、『中國地方行政制度史上篇』一九九頁で、功曹は武帝時代の例が初見だとしているが、彼の基づいた『史記』滑稽列傳の記事は宣帝時代の逸話が誤って武帝時代のこととされたものである。後掲注(142)參照。功曹の早い事例は、注(173)に引いた『漢書』尹翁歸傳で昭帝時代、五官掾の事例は注(162)に引いた『漢書』王尊傳の元帝時代の例が早い方だろう。主簿の例は注(163)に引いた『漢書』嚴延年傳が宣帝時代である。

- (119) 嚴耕望氏は前掲書三三五頁、第五章附錄二としてテキストの紹介と校勘を行なっている。本稿の表は知不足齋叢書本卷五に基づく。

- (120) 例えはここには主簿や廷掾が挙げられていない。これはこの二つが「某曹」というネーミングになっていないからだと思われる。

- (121) 『報告』二五八簡、『圖版』秦律十八種一九一、『釋文』一〇六頁「令敎史毋從事官府。非史子毆、毋敢學學室。犯令者有辜。 内史雜

- (122) 『說文解字』十五上

尉律、學僮十七已上、始試、諷籀書九千字、乃得爲史。又以八體試之、郡移大史并課。最者以爲尙書史。書或不正、輒舉劾之。 同律について『漢書』卷三〇藝文志は

漢興、蕭何草律、亦著其法曰、「太史試學童、能諷書九千字以上、乃得爲史。又以六體試之、課最者、以爲尚書・御史史書令史。吏民上書、字或不正、輒舉劾。」

としており、多少の出入りがある。なお、この律は最近江陵張家山の漢墓から出土した漢律にも含まれているようである。

(123) 『史記』卷三〇平準書

至今上即位數歲、漢興七十餘年之間、國家無事、……爲史者長子孫、居官者以爲姓號。

(124) 池田雄一「漢代における地方小吏についての一考察」(『中央大学文學部紀要』史學科一七號 一九七二) 参照。

(125) 前注(71)引『漢書』循吏傳參照。

(126) 『漢書』卷八八儒林傳

而公孫弘以治春秋爲丞相封侯、天下學士靡然鄉風矣。弘爲學官、悼道鬱滯、乃請曰、「丞相・御史言、制曰『……』。謹與太常臧・博士平等議曰、……爲博士官置弟子五十人、復其身。……臣謹案、詔書律令下者、明天人分際、通古今之誼、文章爾雅、訓辭深厚、恩施甚美。小吏淺聞、弗能究宣、亡以明布諭下。以治禮掌故以文學禮義爲官、遷留滯。請選擇其秩比二百石以上及吏百石、通一藝以上、補左右內史・大行卒史、比百石以下補郡太守卒史、皆各二人、邊郡一人。先用誦多者不足、擇掌故以補中二千石屬。文學掌故補郡屬、備員(師古曰、云備員者、示以升擢之、非籍其實用也)。請著功令、它如律令。」制曰「可。」

(127) 『漢書』武帝紀によれば、元朔三年(前一二六)六月のことである。

(128) 渡邊信一郎「孝經の國家論——孝經と漢王朝——」(『中國貴族制社會の研究』所收、京都大學人文科學研究所 一九八七) 參照。

(129) 『史記』卷七〇張儀列傳

張儀於是之趙、上謁求見蘇秦。蘇秦乃誠門下人不爲通、又使不得去者數日。已而見之、坐之堂下、賜僕妾之食。……蘇秦已而告其舍人曰、「張儀、天下賢士、吾殆弗如也。……」

ここでは門番が「門下」、弟子が「舍人」と呼ばれている。

(130) 『淮南子』道應訓

昔者公孫龍在趙之時、謂弟子曰、「人而無能者、龍不能與遊。」有客衣褐帶索、而見曰、「臣能呼。」公孫龍顧弟子曰、「門下故有能呼者乎。」對曰、「無有。」公孫龍曰、「與之弟子之籍。」

なお、戰國から漢代の師と弟子の關係については字都宮清吉「管子弟子職篇によせて」(『中國古代中世史研究』所收、創文社、一九七七)、吉川忠夫「鄭玄の學塾」(『中國貴族制社會の研究』所收、京都大學人文科學研究所、一九八七) 參照。

(131) 『史記』卷七六平原君列傳

平原君趙勝者、趙之諸公子也。……賓客蓋至者數千人。……平原君家樓臨民家。民家有覺者、輒散行汲。平原君美人居樓上、臨見大笑之。明日、覺者至平原君門、請曰、「……臣願得笑臣者頭。」平原君笑應曰、「諾。」……終不殺。居歲餘、賓客門下舍人稍稍引去者過半。平原君怪之。……門下一人前對曰、「以君之不殺笑覺者、以君爲愛色而賤士、士即去耳。」

(132) 『史記』卷五四曹相國世家

惠帝二年、蕭何卒。參聞之、告舍人趣治行、「吾將入相。」居無何、使者果召參。

(133) 『史記』卷一〇四田叔列傳褚少孫補

(任安) 乃爲衛將軍舍人、與田仁會、俱爲舍人、居門下、同心相愛。此二人家貧、無錢用以事將軍家監。家監使養惡驢馬。……衛將軍從此兩人、過平陽主。主家令兩人與騎奴同席而食。此二子拔刀、列斷席、別坐。主家皆怪而惡之、莫敢呵。

(134) 『史記』卷八四屈原賈生列傳

賈生名誼、雒陽人也。年十八、以能誦詩屬書聞於郡中。吳廷尉爲河南守、聞其秀才、召置門下、甚幸愛。

(135) 前注(71)引『漢書』循吏傳參照。

(136) 『史記』卷一二〇汲鄭列傳

至九卿……遷大農令。鄭莊爲太史、誡門下、「客至、無貴賤無留門者」執賓主之禮、以其貴下人。

この場合の「門下」は門番と取り次ぎ役などをまとめて指している。

(136) 同卷一七司馬相如列傳

會梁孝王卒、相如歸。而家貧、無以自業。素與臨邛令王吉相善。吉曰、「長卿久宦遊不遂、而來過我。」於是相如往、舍都亭。臨邛令繆爲恭敬、日往朝相如。……臨邛中多富人。而卓王孫家僮八百人、程鄭亦數百人。二人乃相謂曰、「今有貴客、爲具召之。」并召令。

(137) 『史記』卷五四曹相國世家

孝惠元年、除諸侯相國法、更以參爲齊丞相。參之相齊、齊七十餘城。天下初定、悼惠王富於春秋。參盡召長老諸生、問所以安集百姓。如齊故諸儒以百數、言人人殊、參未知所定。聞膠西有蓋公、善治黃老言、使人厚幣請之。既見蓋公。蓋公爲言治道貴清靜而民自定、推此類具言之。參於是避正堂、舍蓋公焉。其治要用黃老術。故相齊九年、齊國安集、大稱賢相。

(138) 『史記』卷七項羽本紀

秦二世元年七月、陳涉等起大澤中。其九月、會稽守通謂（項）梁曰（集解、楚漢春秋曰、會稽假守殷通）、「……吾欲發兵、使公及桓楚將。」是時桓楚亡在澤中。梁曰、「桓楚亡、人莫知其處。獨籍知之耳。」梁乃出、誠籍持劍居外待。梁復入、與守坐曰、「請召籍、使受命召桓楚。」守曰「諾。」梁召籍入。須臾、梁胸籍曰、「可行矣。」於是籍遂拔劍斬守頭。項梁持守頭、佩其印綬。門下大驚擾亂、籍所擊殺數十百人。一府中皆僇伏、莫敢起。

項羽が斬り從えた「門下」はこれらのさまざまな人間の總稱、抵抗もせず以降參したのが府中の屬吏だったと考えられる。

(139) 『漢書』卷七一雋不疑傳

武帝末、郡國盜賊羣起、暴勝之爲直指使者、衣繡衣持斧、逐捕盜賊、督課郡國、東至海、以軍興誅不從命者、威振州郡。勝之素聞不疑賢、至勃海、遣吏請與相見。不疑……盛服至門上謁。門下欲使解劍、不疑

漢代の官衙と屬吏について

曰、「劍者君子武備、所以衛身、不可解。請退。」吏白勝之。勝之開閣延請、望見不疑容貌尊嚴、衣冠甚偉、勝之躡履起迎。登堂坐定、不疑據地曰「……勝之知不疑非庸人、……問當世所施行。門下諸從事皆州郡選吏、側聽不疑、莫不驚駭。至昏夜罷去。ここには門番としての「門下」と、暴勝之を補佐する「門下の諸從事」の二種類の「門下」が見える。

(140) 『漢書』卷九二游俠萬章傳

萬章字子夏、長安人也。長安熾盛、街閭各有豪俠。章在城西柳市、號曰「城西萬子夏」。爲京兆尹門下督、從至殿中、侍中諸侯貴人爭欲揖章、莫與京兆尹言者。章遂循甚懼。其後京兆不復從也。

(141) 嚴耕望注(118)前揭書一三六頁參照。

(142) 『漢書』卷八九循吏龔遂傳

上以爲渤海太守。……數年、上遣使者徵遂、議曹王生願從。功曹以爲王生素耆酒、亡節度、不可使。遂不忍逆、從至京師。王生日飲酒、不視太守。會遂引入宮、王生醉、從後呼曰、「明府且止、願有所白。」遂還問其故。王生日、「天子即問君『何以治渤海』、君不可有所陳對、宜白『皆聖王之德、非小臣之力也。』」遂受其言。既至前、上果問以治狀。遂對如王生言。天子說其有讓、笑曰、「君安得長者之言而稱之。」遂因前曰、「臣非知此、乃臣議曹教戒臣也。」上以遂年老不任公卿、拜爲水衡都尉、議曹王生爲水衡丞、以褒顯遂云。

『史記』卷一二六滑稽列傳褚先生傳

武帝時、徵北海太守詣行在所。有文學卒史王先生者。自請與太守俱、「吾有益於君。」君許之。諸府掾功曹白云、「王先生嗜酒、多言少實、恐不可與俱。」太守曰、「先生意欲行、不可逆。」遂與俱。……

見られるように、「史記」はこれを武帝時代の北海郡のこととしており、太守の名前は忘れられている。しかし文學卒史が屬吏として功曹の勤務評定の對象となっていたこと、しかし同時に太守から「先生」と呼ばれ、むげには逆らい難い存在だったことがわかる。「漢書」の議曹もそのような存在と見てよい。

(143) 注(165)引『漢書』朱博傳參照。

(144) 『後漢書』列傳卷三五袁安傳

(袁) 忠子秘、爲郡門下議生。黃巾起、秘從太守趙謙擊之、軍敗、秘與功曹封觀等七人以身扞刃、皆死於陳、謙以得免。

(注) 謝承書曰、秘字永寧。封觀與主簿陳端・門下督范仲禮・賊曹劉偉德・主記史丁子嗣・記室史張仲然・議生袁秘等七人、擢刃突陳、與戰並死也。

(145) 例えば朱儁は後漢延熹年間に會稽上虞縣の「門下書佐」であつた。

『後漢書』列傳卷六一本傳參照。

(146) 後揭注(153)引『漢書』韓延壽傳參照。

(147) 後揭注(165)引『漢書』朱博傳參照。

(148) 『後漢書』列傳卷七一獨行傳、劉茂、索廬放條參照。

(149) 『後漢書』列傳卷三公孫述傳

哀帝時、以父任爲郎。後父仁爲河南都尉、而述補清水長。仁以述年少、遣門下掾隨之官(注、州郡有掾、皆自辟除之、常居門下、故以爲號。月餘、掾辭歸、白仁曰、「述非待教者也。」……)

この注に見える「門下」の説明は明らかに不十分である。

(150) 『後漢書』列傳卷一五卓茂傳

卓茂字子康、南陽宛人也。……及(王)莽居攝、以病免歸郡、常爲門下掾祭酒、不肯作職吏。

王莽時代の門下掾の例はこの他、同列傳卷四二崔篆傳にも見える。なお後漢代、名譽職としての「祭酒」は中央にも見られる。『說文解字』の著者許慎は太尉府の「南閣祭酒」であつた(『說文』十五下)。

(151) 前注(36)引『漢書』孫寶傳參照。

(152) 長官が名士を「師友」として招くことは、『後漢書』列傳卷六六循吏任延傳に

更始元年、……拜會稽都尉。……時天下新定、道路未通、避亂江南者皆未還中土。會稽頗稱多士。延到、皆聘請高行如董子儀・嚴子陵等、敬待以師友之禮。

という例がある他、同卷三隗囂傳の例もある。また屬吏の幹部を「師友」として遇した例も知られる。『後漢書』列傳卷一五魯丕傳

(魯) 丕字叔陵、……遂兼通五經、以魯詩・尚書教授、爲當世名儒。後歸郡(扶風)、爲督郵・功曹、所事之將、無不師友待之。

この他後揭注(161)、王莽時代の嚴詡の例參照。

(153) 例えば注(144)に引いた謝承書に見えるように、太守の本陣を固めた功曹・主簿・門下督・賊曹・主記史・記室史・議生はこのような長官

官房のメンバーを中心としている。この「賊曹」が「門下賊曹」の省略かどうかは不明。また、江蘇泗洪縣曹廟出土の畫象石に、縣令の側近グループを描いたものがある。全體が左向きの徒歩の行列をなし、中心が縣令である。縣令の右脇に「鈴下」、以下「主簿」、「門下干」、「小史」、「書佐」四人の順にならび、このうち「鈴下」と「門下干」、「小史」は小さめに描かれる。縣令の左脇は「騎吏」二人、以下左に「功曹」、「五白」二人、「賊曹」、「游徼」、「主記」、「門下史」四人、「行亭掾」の順にならび、「騎吏」と「五白」は小さく描かれている。

このように官吏の像に大小の差があるのは、官位の高下を表わすと考えられる。この畫像石は、長官官房としての「門下」を描く典型的な例である。龍振堯「江蘇泗洪曹廟東漢畫象石」(文物一九八六・四)參照。

(154) 前注(126)引『漢書』儒林傳參照。儒官は創設當初から「備員」、すなわち名譽職に近い存在であつた。

(155) 池田雄一「中国古代における郡縣屬吏制度の展開」(『中國古代史研究』四一九七六)は、屬吏制度の起源が戰國時代に見られた「門下」の「舍人」にあり、漢代になつても長官の私屬的な側面を強く残

していたとしている。このような「門下」の中に次第に役割分擔が生じ、武帝時代以後に功曹以下の諸曹が分化したのだという説である。しかし本稿で述べてきたように、屬吏の職階はすでに戰國時代から存在しており、長官の私屬と未分化な状態にあつたとは考えにくい。「某曹」という部局名の體系が定着したのは前漢後期だが、だからと

いってそれ以前は職務分擔が存在しなかったとするのは無理である。「門下」の屬吏は諸曹の「職吏」の存在を前提として形成され、しかもその職掌は諸曹に比べて漠然としたままだったと考えたほうがよからう。名譽ある稱號としての「門下」の性格を見落としたまま、「門下」イコール私屬という圖式で割りきってしまうことには賛成できない。

(156) 『漢書』卷八九循吏傳序

及至孝宣、……自霍光薨後、始躬萬機、厲精爲治、五日一聽事、自丞相已下各奉職而進。及拜刺史・守・相、輒親見問、觀其所繇、退而考察所行以實其言、有名實不相應、必知其所由然。常稱曰、「庶民所以安田里而亡歎息愁恨之心者、政平訟理也。與我共此者、其唯良二千石乎。」以爲太守吏民之本也。數變易則下不安。民知其將久、不可欺罔、乃服從其教化。故二千石有治理效、輒以璽書勉厲、增秩賜金、或爵至關內侯、公卿缺則選諸所表以次用之。是故漢世良吏、於是爲盛、稱中興。

(157) 『漢書』卷八九循吏黃霸傳

(潁川) 太守霸爲選擇良吏、分部宣布詔令、令民咸知上意。……米鹽靡密、初若煩碎、然霸精力能推行之。……吏民不知所出、咸稱神明。姦人去入它郡、盜賊日少。霸力行教化、而後誅罰。務在成就全安長吏。許丞老、病聾。督郵白逐之、霸曰、「許丞廉吏、雖老、尚能拜起送迎、正頗重聽、何傷。且善助之、毋失賢者意。」或問其故。霸曰、「數易長吏、送故迎新之費、及姦吏緣絕簿書、盜財物、公私費耗甚多、皆當出於民。所易新吏、又未必賢、或不如其故、徒相益爲亂。凡治道、去其泰甚者耳。」霸以外寬內明、得吏民心、戶口歲增、治爲天下第一。

(158) 『漢書』卷七六韓延壽傳

數年、徙爲東郡太守。……延壽爲吏、上禮義、好古教化、所至必聘其賢士、以禮待用、廣謀議、納諫爭。舉行喪讓財、表孝弟有行。修治學官、春秋鄉射、陳鍾鼓管絃、盛升降揖讓。及郡試講武、設斧鉞旗旗、習射御之事。治城郭、收賦租、先明布告其日、以期會爲大事、吏民敬

畏趨鄉之。……接待下吏、恩施甚厚、而約誓明。或欺負之者、延壽痛自刻責、「豈其負之。何以至此。」吏聞者自傷悔、其縣尉至自刺死。及門下掾自剄、人救不殊、因瘡不能言。延壽聞之、對掾史涕泣、遣吏擊治視、厚復其家。……在東郡三歲、令行禁止、斷獄大減、爲天下最。左馮翊の時にについては前注(100) 参照。

(159) 濱口重國「漢碑に見えたる守令・守長・守丞・守尉等の官に就いて」

『秦漢隋唐史の研究』下巻所收、東大出版会 一九六六、大庭脩「漢の官吏の兼任」(『秦漢法制史の研究』所收) 参照。

(160) この動きは弊害も産んだ。例えば『漢書』卷八九循吏王成傳

王成、不知何郡人也。爲膠東相、治甚有聲。宣帝最先褒之、地節三年下詔曰、「……今膠東相成、勞來不怠、流民自占八萬餘口、治有異等之效。其賜成爵關內侯、秩中二千石。」未及徵用、會病卒官。後詔使丞相・御史問郡國上計長吏守丞以政令得失。或對言、前膠東相成爲自增加、以蒙顯賞。是後俗吏多爲虛名云。

また、不適任とされて免職となるにも、内容に區別があった。『漢書』卷九〇酷吏尹賞傳

數年卒官、疾病且死、戒其諸子曰、「丈夫爲吏、正坐殘賊免、追思其功效、則復進用矣。一坐軟弱不勝任免、終身廢棄、無有赦時。其羞辱甚於貪汙坐職。慎毋然。」

酷吏の經驗であるだけに興味深い。

(161) 『漢書』卷七七何並傳

徙潁川太守、代陵陽嚴詡。詡本以孝行爲官、謂掾史爲師友、有過輒閉閣自責、終不大言。郡中亂。王莽遣使徵詡。官屬數百人爲設祖道、詡據地哭。掾史曰、「明府吉徵、不宜若此。」詡曰、「吾哀潁川士。身豈有憂哉。我以柔弱徵、必選剛猛代。代到、將有僵仆者。故相弔耳。」……

(162) 『漢書』卷七六王尊傳

以高弟擢爲安定太守。到官、出教告屬縣曰、「令長丞尉、奉法守城、爲民父母、抑強扶弱、宣恩廣澤、甚勞苦矣。太守以今日至府、願諸君

卿勉力正身以率下。故行貪鄙、能變更者、與爲治。明慎所職、毋以身試法。」又出教救掾功曹、「各自底厲、助太守爲治。其不中用、趣自避退、毋久妨賢。夫羽翮不修、則不可以致千里。園內不理、無以整外。府丞悉署吏行能、分別白之。賢爲上、毋以富。賈人百萬、不足與計事。昔孔子治魯、七日誅少正卯。今太守視事、已一月矣。五官掾張輔、懷虎狼之心、貪汙不軌、一郡之錢、盡入輔家。然適足以葬矣。今將輔送獄。直符史詣閣下、從太守受其事（師古曰、直符史、若今當直佐史也）。丞戒之戒之、相隨入獄矣。」輔繫獄數日死、盡得其狡猾不道、百萬姦賊。威震郡中、盜賊分散、入傍郡界。豪彊多誅傷伏辜者。坐殘賊免。……

ここで王尊は、太守の人事權に屬する自分の屬吏には嚴罰で臨むのに對し、人事權の及ばない郡太守府の丞、屬縣の令・長・丞・尉には警告を發するにとどまっている。兩者の扱いの差がわかる。

(163) 『漢書』卷九〇酷吏嚴延年傳

時郡比得不能太守、涿人畢野白等由是廢亂。大姓西高氏・東高氏、自郡吏以下皆畏避之、莫敢與語。咸曰、「寧負二千石、無負豪大家。」……（嚴）延年至、遣掾蟲吾趙繡校高氏、得其死罪。繡見延年新將、心內懼、即爲兩劾、欲先白其輕者、觀延年意、怒乃出其重劾。延年已知其如此矣。趙掾至、果白其輕者、延年索懷中、得重劾、即收送獄。夜入、晨將至市論殺之。先所按者死、吏皆股升。更遣吏分考兩高、窮竟其姦、誅殺各數十人。郡中震恐、道不拾遺。

(164) 『漢書』卷七六尹翁歸傳

以高第入守右扶風、滿歲爲眞。選用廉平疾姦吏、以爲右職、接待以禮、好惡與同之。其負翁歸、罰亦必行。

(165) 『漢書』卷八三朱博傳

齊郡舒綏養名、博新視事、右曹掾史皆移病臥。博問其故、對言、「惶恐。故事、二千石新到、輒遣吏存問致意、乃敢起就職。」博奮怒抵几曰、「觀齊兒、欲以此爲俗邪。」乃召見諸曹史・書佐及縣大吏、選視其可用者、出教置之。皆斥罷諸病吏、白巾走出府門。郡中大驚。頃之、

門下掾龔遂耆老大儒、教授數百人、拜起舒遲。博出教主簿、「龔老生不習吏禮。主簿且教拜起、閑習乃止。」又敕功曹、「官屬多褒衣大褶、不中節度。自今掾史衣皆令去地三寸。」博尤不愛諸生、所至郡輒罷去議曹、曰、「豈可復置謀曹邪。」文學儒吏時有奏記稱說云云、博見謂曰、「如太守漢吏、奉三尺律令以從事耳。亡奈生所言聖人道何也。且持此道歸。堯舜君出、爲陳說之。」其折逆人如此。視事數年、大改其俗、掾史禮節如楚・趙吏。

また後注(183)参照。

(166) 屬吏に不正を行なわせなければ、出世はできないとしても、太守の地位を保つことができた。『漢書』卷六六陳咸傳

起家復爲南陽太守。……其治放嚴延年、其廉不如。所居調發屬縣所出食物、以自奉養、奢侈玉食。然操持掾史、郡中長吏皆令閉門自斂、不得臨法。公移敕書曰、「即各欲求索自快、是一郡百太守也。何得然哉。」下吏畏之、豪彊執服、令行禁止。然亦以此見廢。咸三公子、少顯名於朝廷、……而咸滯於郡守。

(167) この傾向は、宮崎市定「中國官制の發達」（歴史教育一三卷六號、一九六五、のち『アジア史論考』中卷所收）がすでに指摘している。

(168) 太守との對立については後掲注(182)参照。病氣を稱して辭職することとは、『漢書』卷七一于定國傳に典型的な例がある。

于定國字曼倩、東海郯人也。其父于公、爲縣獄吏、郡決曹。決獄平、羅文法者、于公所決、皆不恨。……東海有孝婦、少寡亡子、養姑甚謹。姑欲嫁之、終不肯。……其後姑自經死。姑女告吏、「婦殺我母。」吏捕孝婦、孝婦辭不殺姑。吏驗治、孝婦自誣服。具獄上府、于公以爲此婦養姑十餘年、以孝聞、必不殺也。太守不聽、于公爭之、弗能得。乃抱其具獄、哭於府上、因辭疾去。太守竟論殺孝婦。郡中枯旱三年。後太守至、卜筮其故。于公曰、「孝婦不當死、前太守疆斷之。咎黨在是乎。」於是太守殺牛自祭孝婦家、因表其墓、天立大雨、歲孰。郡中以此大敬重于公。

(169) 前注(53)で、東海太守となつた尹翁歸が赴任する前に、東海郡出身

の廷尉于定國を訪問したのは、地元出身の大官に仁義を切っておく必要があったからである。その時に早速人事の請託を受けそうになったことは前述のとおり。また前注(85)にあげたように、翟義は中央に強いコネを持つ吏の追放に失敗している。その後翟義が無事に済んだのは、彼自身が時の丞相の子だったからである。後漢末、宦官の請託を拒否した河東太守史弼は凄まじい報復を受けている。『後漢書』列傳卷五四本傳参照。

(170) 後漢代の例をあげる。『後漢書』列傳卷六六循吏秦彭傳

建初元年、遷山陽太守。以禮訓人、不任刑罰。崇好儒雅、敦明庠序。……吏有過咎、罷遣而已、不加恥辱。百姓懷愛、莫有欺犯。

同列傳卷一五魏霸傳

建初中、舉孝廉。八遷、和帝時、爲鉅鹿太守。以簡朴寬恕爲政。據史有過、霸先誨其失、不改者乃罷之。吏或相毀訴、霸輒稱它吏之長、終不及人短。言者懷慙、譖訟遂息。

同列傳卷五四史弼傳注引謝承書

弼年二十爲郡功曹、承前太守宋所穢濁之後、悉條諸生聚斂姦吏百餘人、皆白太守、埽迹還縣、高名由此而興。

魏霸傳に見えるように、屬吏が功を焦って足の引つ張り合いを演ずることも多かったに違いない。前注(74)にあげた『後漢書』郭曄傳や周景傳は、大事な儀式の席で公然と上司を批判するスタンドプレイの例である。應劭は『風俗通』過譽篇で、この傾向を苦々しく記している。屬吏の争いに荷擔することなく全體をまとめていくことも、長吏たるものの腕であった。

(171) 大庭脩「漢代における功次による昇進」(『秦漢法制史の研究』所収)参照。

(172) 前掲注(165)引『漢書』朱博傳参照。

(173) 典型的な例が尹翁歸である。『漢書』卷七六本傳

尹翁歸字子兄、河東平陽人也。徙杜陵。翁歸少孤、與季父居。爲獄小吏、曉習文法。喜擊劍、人莫能當。是時大將軍霍光秉政。諸霍在平陽、

漢代の官衙と屬吏について

奴客持刀兵、入市鬪鬪、吏不能禁。及翁歸爲市吏、莫敢犯者、公廉不受餽、百賈畏之。後去吏居家。會田延年爲河東太守、行縣至平陽。悉召故吏五六百人、延年親臨見。令有文者東、有武者西。閱數十人、次到翁歸、獨伏不肯起、對曰、「翁歸文武兼備、唯所施設。」功曹以爲此吏偃敖不遜。延年曰、「何傷。」遂召上辭問、甚奇其對、除補卒史、便從歸府。案事發姦、窮竟事情、延年大重之、自以能不及翁歸、徙署督郵。河東二十八縣、分爲兩部、閭閻部分北、翁歸部分南。所舉應法、得其罪辜、屬縣長吏雖中傷、莫有怨者。舉廉爲緱氏尉、歷守郡中(師古曰、歷於郡中守丞尉之職也)、所居治理。遷補都內令、舉廉爲弘農都尉。

(174) 永田英正「漢代の選舉と官僚階級」(『東方學報』京都四一冊 一九七〇)参照。

(175) 前注(152)黃霸傳參照。

(176) 『北堂書鈔』卷三八引東觀漢記

黃香字文強、遷魏郡太守。俗每交代、添設儲峙、輒數千萬。香未入界移教、悉出所設什器。及到頗有、即徹去。到官之日、不祭竈求福、閉門絕客。

(177) 『漢書』卷七七何並傳

徙潁川太守。……郡中清靜、表善好士、見紀潁川、名次黃霸。性清廉、妻子不至官舍。

『後漢書』列傳卷一七宣秉傳

(建武二年)遷司隸校尉。……秉性節約、常服布被、蔬食瓦器。

同王良傳

建武六年、代宣秉爲大司徒司直。在位恭儉、妻子不入官舍、布被瓦器。同列傳卷二一羊續傳

(中平三年)拜續爲南陽太守。……續妻後與子秘俱往郡舍、續閉門不

內。妻自將秘行、其資藏唯有布衾、祗敝襦、鹽麥數斛而已。

(178) 『隸釋』卷七竹邑侯相張壽碑(建寧元年卒)

君下車、崇尚儉節、躬自菲薄、儲府非法悉無所留。并官相領、省倉□

小府御史。朝無姦官、豎無淫寇。

(179) 前注(97)及び(100)参照。

(180) 『藝文類聚』卷五〇引司馬彪續漢書

胡紹爲河內懷令、三日一視事、十日一詣倉受俸米、於閤外炊作乾飯食之、不設釜竈。得一強盜、問其黨與、得數百人、皆誅之。政教清平、爲三河表。

(181) 『漢書』卷八三朱博傳

以高弟入守左馮翊、滿歲爲眞。……長陵大姓尙方禁、少時嘗盜人妻見斫、創著其頰。府功曹受賂、白除禁調守尉。博聞知、以它事召見、視其面、果有瘢。……禁自知情得、叩頭服狀。……久之、召見功曹、閉閣、數責以禁等事、與筆札使自記、「積受取一錢以上、無得有所匿。欺謾半言、斷頭矣。」功曹惶怖、具自疏姦臧、大小不敢隱。博知其對以實、乃令就席、受敕自改而已。

(182) 『後漢書』列傳卷七一獨行彭脩傳

後仕(會稽)郡爲功曹。時西部都尉宰疆行太守事、以徵過收吳縣獄吏、將殺之。主簿鍾離意爭諫甚切。疆怒、使收縛意、欲案之。掾史莫敢諫。脩排闥直入、拜於庭。……疆遂原意、賞獄吏罪。

『後漢書』列傳卷六四袁紹傳注引『英雄記』

劉子惠、中山人。兖州刺史劉岱與其書、……封書與嫂。嫂得此大懼、歸岱子惠、欲斬之。別駕從事耿武等排闥伏于惠上、願并見斬、得不死。作徒、被赭衣、梟除宮門外。

(183) 書類が閤内に行つたまま決濟されない場合も、事実上閤が閉ざされるのと同じようなことになる。『漢書』卷八三朱博傳に

(琅邪郡)姑幕縣有羣輩八人、報仇廷中、皆不得。長吏自繫書言府。賊曹掾史自白請至姑幕。事留不出。功曹諸掾即皆自白、復不出。於是府丞詣閤、博乃見丞掾曰、「以爲縣自有長吏、府未嘗與也。丞掾謂府當與之邪。」閤下書佐入、博口占檄文曰、「府告姑幕令丞。言賊發不得、有書。檄到、令丞就職、游徼主卿力有餘、如律令。」王卿得敕惶怖、親屬失色、晝夜馳驚、十餘日間、捕得五人。……其操持下、皆此類也。

とあり、朱博が部下の申請を握り潰しても、部下はせいぜい閤まで行つて催促してみることしかできなかったことがわかる。書類の決濟についても、閤は壁となり得るのである。

(184) 顧炎武は『日知錄』卷二四、閤下において、しばしば混同して用いられる閤と閤の原義の違いを述べ、歴代の官衙における兩字の用法の變遷を論じている。その記述の中で、漢代の官衙の閤の機能も紹介されている。

(185) 渡邊信一郎(122)所引論文参照。

(186) 鎌田重雄「漢代の門生・故吏」(『秦漢政治制度の研究』所收)参照。

(187) 『後漢書』本紀卷七桓帝紀、建和元年四月

壬辰、詔州郡不得迫脅驅逐長吏。長吏臧滿三十萬而不糾舉者、刺史・二千石以縱避爲罪。若有擅相假印綬者、與殺人同弃市論。

(188) 川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」(『六朝貴族制社會の研究』所收、岩波書店 一九八二)参照。

圖版出典一覧

- 圖1 『和林格爾漢墓壁畫』(文物出版社 一九七八)三頁圖四に基づいて筆者作成
- 圖2 同書一七頁圖三四
- 圖3 同書五〇・五一頁に基づいて筆者作成
- 圖4 同書四八・四九・五五頁に基づいて筆者作成
- 圖5 同書五二・五三頁に基づいて筆者作成
- 圖6 同書一〇九頁
- 圖7 同書八二・八四・一三〇・一三一頁に基づいて筆者作成
- 圖8 『望都漢墓壁畫』(中國古典藝術出版社 一九五五)
- 圖9 『和林格爾漢墓壁畫』九九・一四五頁に基づいて筆者作成
- 圖10 四川德陽縣黃詩鎮出土畫象磚、『重慶市博物館藏四川漢畫象磚選集』(文物出版社 一九五七)
- 圖11 四川成都揚子山二號墓出土畫象磚、同右

圖 12 山東諸城縣前涼臺漢墓出土畫象石、任日新「山東諸城漢墓畫象石」文

物一九八一—一〇

圖 13 河南淮陽縣于莊漢墓出土陶明器、注(101) 參照。

本稿は昭和六二年度文部省科學研究費補助金、奨勵研究Aによる成果の一部である。